
新規テキスト ドキュメント.txt

えにい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新規テキスト ドキュメント.txt

【Nコード】

N7517Y

【作者名】

えにい

【あらすじ】

剣と魔導とマモノとが交じり合う混沌とした世界・・・
そんな適度にブッソウな大陸に、魔導学校があった。

晴れて今日から入学することになったピカピカ1年生の「つむぎ」
早く一人前の魔導師になることが夢の彼女の周りには、頭痛のタネ
の幼なじみや、クールなルームメイトや、ちょっと古風なエリート
委員長など、個性あふれる(?)クラスメイトがいっぱい。
彼女は無事卒業して、リッパな魔導師になることができるのか？

そして、ある課外実習の途中、世界の根底をゆるがすような秘密を知ってしまい・・・？

王道のようなそうでもないような、ファンタジー学園物です。

シリアスもギャグも恋愛も青春もバトルも、全部こった煮になる予定。

どちらかと言うと少女向けライトノベル系・・・かも

※この文は、別ブログで掲載したものと重複投稿です

プロローグ『魔導学校へようこそ！』いかにして4人は出会ったか！

遠い音楽が聞こえる。

ずうっと昔に聞いた、優しい歌だ。

まだお父さんもお母さんも側にいて、何一つ不安なことなんてなかったあの頃の――

「……朝？」

チチチと鳴く小鳥の声が窓の外から聞こえ、ぼくはゆっくりと体を起こした。まだ半分夢見心地のままの頬を、涙が伝う。

シャツと黄色いチェックのカーテンを引くと、白い街並みが飛び込んできた。

輝くような朝の空気の中、扇状に広がった家々が朝日を反射してきらめいている。

そして何より目を引くのが、この街の中心にそびえる大きな建物――今日から通うことになる魔導学校だ。

まるでお城のように湖のふちにそびえたつ学校のとっぺんには、大きな鐘が吊り下げられ左右にゆうらり振られて街中に朝を告げている。

そして同時にぼくの遅刻も告げているのだった。

しばらくベッドの上でぼんやりとしていたけど、外から響くソウゴンな鐘の音に、ひっぱたかれたように意識を戻す。

「う、わっ、寝坊！」

慌ててベッドを飛び降りて、パジャマを脱いで服に着替え始める。鏡の前にたち、あっちこっちに跳ねている金色の髪をムリヤリなでつけ、赤いヘッドホンをガポツとはめる。

最後に青い目に目やにがついてないか確認してから、ニコツと笑う。うん！ これでよしっ

年頃のオンナノコの支度がわずか3分で済んでしまうのはちよつとばかり首をひねるところだけど……とにかく今は遅刻しないことが第一だっ！

緑のナナメ掛けカバンの中に必要書類をつめこんで、ぼくは元氣よく家を飛び出した。

「いつてきまーす!!」

プロローグ『魔導学校へようこそ!』いかにして4人は出会ったか』

ところが、玄関を1歩出るか出ないかというところでそれに気がついた。

地面に映る影の形が、やけに不自然に歪んでいるんだ。ってまさか――

「つむぎいいい――っ!!」

街中に響き渡るんじゃないかってくらいの大声を耳に、ぼくは勢いよく振り仰いだ。

眩しい朝日をバックに飛び降りてきた「そいつ」をすんでのところでかわし、そこらへんに飾ってあった鉢植えを両手で投げつける。ドゴオツとかそんな感じの音をたてて、鉢植えは見事ピンクの髪の毛をしとめていた。

「こらあかなで! いい加減出がけに襲ってくるのを止める、毎朝生きた心地がしないんだから!」

倒れ込んでいたそいつは、ブザマに倒れた体勢から無駄なほど優雅に身を起こした。……頭に鉢植えを乗せたまま。

ピンク色の髪の毛に水色の瞳、ニヤニヤと笑う口元が実に腹立たしいコイツは「かなで」

なんの因果か昔からばくに付きまとう変な男の子、だ。ちなみに付きまとうと言う意味に恋愛的な意味は微塵も含まれていない。どういうことかと言うと――

「勝負だ！」

こちらに指をビシツとつきたて言うかなでに、ガクリと肩を落としてため息をひとつ。

そう、コイツは何かとあるとすぐに勝負だバトルだと絡んでくるのだ。一方的なライバルというのか、とにかく今のぼくにとっては邪魔者以外の何者でもなかった。

できるだけ軽くあしらってしまおうと、手をヒラヒラと振って追い払う。

「悪いけどそんなヒマないよ。これから入学式なんだか……ら……」
「？」

——ってえ！

ここでハツと気付いたぼくは、キョトンとしたかなでの頭を一つはたいて、その襟元を掴んで走り出した。

「キミもだろー！！」

「ぐえっ！」

そう、腹立たしいことにコイツも入学試験をパスし晴れて本日より魔導学校1年生のはずなのだ。

「それが何でこんな所でのんびりしてるのさっ」

「いやあ、朝駆けの奇襲はオレのライフワークだから。」

「信じらんないっ、ばかばかばかなで！」

ぼくは半分泣き声になりながらも走る。ようやく見えてきた学校の門は、すでに閉まり始めている！

「ちょ、つむぎ、擦れてる擦れてる！ オレけずれる下ろしになる」

「だったら自分で走れっ」

業をにやしたぼくは、かなでの襟元を思いっきり前方に投げつける。そしてその場にザツと止まり、右手をまっすぐ上に伸ばす。

「t a c t！」

そう呼び出しの呪文をかけると、光の粒子が手の中にあつまっていき、次の瞬間にはタクトを握っていた。

そして左から右へとふり『リズム』を刻む。空気中の密度があつ

まっていき、限界点に達したとき、ぼくは魔法を発動させた。

「エアブラスト！」

タクトの先から圧縮された空気が発射され、前を転げそうになっていたかなでの背中に命中する。

「おわあ〜！」

後ろから背中を押された状態のかなでは、とうてい生身では出せないようなスピードで吹っ飛び、敷地内に転がり込んだ。

「つむぎい〜、はやくはやく」

「わかってるよ！」

そしてぼくも力の限り走り、かなでが押さえてくれている門を本当にギリギリのところですり抜けた。

転げるように校庭に倒れこんだぼくたちは、力なくハイタッチする。

「セーフ」

「間に合わないかと思ったあ」

くやしいけど、なんだかんだいってかなでとのコンビネーションは悪くないんだよね……幼なじみだから。

「さてと、さっさと行こう。今ならまだ間に合うよね。」

「へ〜い」

やる気のない返事を背中に、ぼくたちは入学式がとりおこなわれると聞いている講堂に向かう。

今まで外から見つめるだけだった学校は、想像以上に大きかった。まるで小さい子のようにあちこちをキョロキョロと見回してしまう。

「みてみて！　ここ大聖堂だよ。ほらてっぺんに鐘がある。」

「でっかいな〜、このスケールつむぎも見習った方が良さぞ」

「ちょ、どういう意味だよ」

「ベーターにー。あ、ほら講堂」

「おお」

かなでが指す方向には、目指す講堂が堂々とそびえ立っていた。中からはざわざわとたくさんの人が居るようなざわめきが聞こえて

くる。

「式は9時から。今5分前。みんな着席してるだろうから、こっそり入ろう」

「ド派手に空から入場とかなし？」

「なし！」

本当にやりかねないかなでに釘をさし、ぼくはそっと重たい金属の扉を開けかける。すると――

「ん？ なに？」

後ろからかなでがツンツンと服のすそをひっぱる。振り返るとフシギそうな顔がこちらを見返していた。

「オレじゃないよ」

「うそ。だっていま現に――」

と、ここでもうやく気づいた。かなでとの間に小さな女の子が居たんだ。紫色のロングヘアーが綺麗な、オッドアイの子がぼくの服をひっぱっていた。

「キミはえっと？」

まさかこの子も新人生……じゃあないよね。どう見たって5、6歳だ。あ、もしかして新人生の家族でついてきたとか？

「迷子？ お母さん一緒に探してあげようか」

「いや、つむぎ。その子……。」

そういつて腕に抱えると、その大きな眼差しで見つめられた後、とんでもないしゃがれ声が返ってきた。

「ふうむ、ワシを見抜けぬとは、なかなか鈍いのう、おぬし」
「え」

その愛らしい外見とはどう考えてもマッチしないそのしゃべり方に、ぼくの脳は完全に停止してしまう。それにも関わらず女の子は淡々と続けた。

「まあ仕方なかる。それをこれから鍛えてゆくのがワシらの指名じやからのう。どれ、他の魔導師のタマゴたちにも挨拶しにいかうではないか。」

ぴよいつと腕から降りた彼女は、スタスタと扉の前に行き、右手をあてる。

「破ッ！」

気合の一言と共にすさまじい轟音がして、扉が内側にバターンと開く。えっと、それ……外開きじゃなかったっけ。

女の子(?)は、中に居た数百人もの新入生の注目をあびながら壇上にあがり、音声拡声魔導器の前に立った。

【えー、生徒諸君。ようこそニキ魔導学校へ。ワシが校長のニキ・インゴットじゃ】

会場のどよめきが一瞬にして静まり返る。そりゃそうだ、ぼくだってそうだ。

「……ぼく、何を信じたらいいいのかわからなくなってきたよ。」

「つむぎはそれでいいんじゃない、ダイジョブダイジョブ」

テキストにそう流すかなでの後を追ってぼくも普通に席に座る。

当然のことながらみんな校長のインパクトにおされて、遅刻してきたぼくらのことなんかお構いなしだったからだ。

校長インパクトの後は実に平和に式は進んでいった。

先生たちの軽い挨拶と自己紹介、これからの心構えについて、在校生代表からの歓迎の言葉。そして新入生の答辞。

ぼくたちの代表として挨拶をしたのは、ひびきという黒髪の男の子だった。さすが代表に選ばれるだけあって、堂々としたものだった——ケド。

(え?)

読み終えてまだ拍手が鳴り止まない時に、彼がまっすぐにこちらを見たんだ。いや、見たというよりはニラミつけられたといった方が近いかもしれない。な、なんで?

とまどって目がそらせずに居ると、壇上から降りてきた彼はこちらへとツカツカ歩み寄ってきた。長い髪の毛がさらっと揺れる様に、近くにいた女の子が熱っぽい視線を送る……のだけど、ぼくにとっ

てはわけがわからない。

目を白黒させていると、ひびき君はキッと眉根をよせてからビシリとこちらを指差しこう言った。

「貴様がつむぎとか言うヤツか。」

「そ、そうだけど。」

何なんだよっ、いったいぼくが何をしたっていうのさあゝ!!

ギラギラと光る黒い目から逃げ出せず、ひたすら冷や汗を流すだけのこちらを彼は無遠慮に見回す。

「ふん、なんと貧相な魔力だ。これがあの伝説の魔導師メイユールとリセリアたちの娘とは到底おもえんな。」

「！」

そう言われた瞬間、ぼくの頭の芯がすうっと冷えていくのを感じた。

メイユールとリセリア。この街で魔導師を志す者なら知らない人は居ないであろう名前は、ぼくにとって二つの意味を持っていた。尊敬すべき大魔導師としての名前、そしてもう一つは……どこにでも居る普通のお父さん、お母さんだと言うこと。そう、ぼくは彼らの間に生まれた一人娘なんだ。

お父さんもお母さんも、とても優秀な音式魔法——世の中の物質すべてに存在するという『リズム』をあやつり、魔法を発動させる者の総称——の使い手だった。その名声は高く、となりの大陸にまで響いていたという。

けれどもそんな人たちの娘であるぼくの魔力といえば、簡単な基本魔法しか使えないおそまつな物だった。絶対的な魔力の量が少なかったんだ。

自分でも気にしていることを言われ、何も言えなくなってしまふぼくにひびき君は宣言する。

「いいか！ 天才魔導師の子供らしいが、絶対にお前には負けないからな！」

それだけ言うと、きびすを返して自分の席へと戻っていつてしま

う。一方的なライバル宣言に、どこか脱力してため息をつく。

「かなでに続いて、どうしてこう自称ライバルが増えるんだろう……」

「んお？ 呼んだ？」

「どう思う？」

「んー？ ごめん、寝てた。」

間の抜けたその返答に、ぼくは再度がくりと肩を落としたのだった。

いったいこれから先の学校生活、どうなっちゃうんだろう。

今年の入学者は100名。各20人ずつの5クラスに分かれることになるみたいだ。

一通りの式が終わったようなので、新入生は新しいクラスへと移動することになった。……のは良いんだけど。

「わぷっ、ちょ、わあぁー！！！」

一斉に移動しはじめる人の波の中で、流されるままになってしまふ。うう、認めたくないけど、ぼくはその、他の人に比べてちよっぴり背が低くて、思うような方向に進むことができないのだ。

（もうっ！）

ぼくの所属は3組。それには南の扉から出れば近いらしいんだけど、どうにも流されて別の扉から出てしまう。（腹立たしくも同じクラスだった）かなでともとつくにはぐれてしまったし、どうしよう……。

見知らぬ場所で途方にくれているぼくの背中に、声が掛けられた。「ねえあなた。一緒のクラスみたいだし、ついてくる？」

「え？」

振り向くとそこには大・中・小とでも表現できそうな女の子3人組がにこやかにたっていた。わぁーどの子も綺麗でおしゃれだなあ。都の方から来た新入生かな。

とにもかくにも、天の助けとばかりにぼくはとびついた。

「ありがとう！ すごく困ってたんだ」

「いいのよ。同級生じゃない」

一番大きなリーダー各っぽい子が、綺麗な金髪をかきあげながら
そう言う。友達になれるかな？

「あ、ぼくつむぎ！ キミたちは？」

「それはクラスについてからにしようよ」

新緑のおかっぱ頭の中ちゃん（仮）が、そういつてぼくの腕をと
る。そう言うものの？ まあ確かに早く教室に行かないと怒られ
ちゃうもんね。

「そいじゃいこっか」

鮮やかな桃色の髪の小ちゃん（仮）が反対側の腕にも飛びつく。

（あ、ちなみに小ちゃんとは言っても残念なことにぼくより背はほ
んの少しだけ高い……。ぐぬぬ）

なぜか拘束されるような形になってしまった状態で、多少とまど
いながらもひきずられていく。

「あ、あのう……？」

なぜだか人目を気にするようにチラチラと周囲を警戒する3人は、
駆け足でぼくを一つの教室に連れて行った。

「わっ！」

暗くてほこりっぽくて、どう考えても3組の教室には見えないそ
の場所に放り込まれたぼくは、彼女たちがガラガラと後ろ手に扉を
閉めるところを目撃した。

「なにするんだよっ！」

思わずそう抗議して立ち上がろうとすると、小ちゃんがずっと
顔を近づけてきた。

「ってゆーかさあ、ウザいよアンタ」

「いっ？」

とーとつにそんなことを言われ、本日何度目か分からないフリー
ズをしてしまう。なんだろう今日、厄日？

続けざまに大ちゃんがぼくの前髪をグイッと掴んで上を向かせる。

「いたたた！ 痛い！」

「あなたねえ、この程度の顔でひびき様に気に入られるとか何様？
自重なさいな」

「あぐっ」

ひびき？ ひびきって、さっきのライバル宣言の答辞の人？

床に顔を押し付けられ、苦しくなるもなんとか誤解を解こうとする。

「あんな人しらないよ、勝手に言ってきただけじゃないか！」

「わからないのね……それがどれだけ名誉なことか。」

中ちゃんが暗い目で前に立つ。その手には細めのインクペンが握られていた。述式魔法——！

「入学したばかりで残念でしょうけど、今日にも退学手続きをしないと二度と歩けない体になってしまうかもしれないわよ。」

「な——」

述式魔法の特徴である筆記用具の魔具で、空中にスペルを直接書き出す中ちゃん。その魔法展開は、氷。

空中に無数の鋭い氷の塊が出現する。フローズエッジ（氷の錐）と呼ばれる高等魔法がぼくに狙いを定めていた。

「さあ、どうするの？ ひびき様の前から消える？ それとも串刺しになってみる？」

「……………」

ぜったいに、やだ！

お父さん、お母さんみたいになりたくて、小さい頃からあこがれてきた魔導学校を、どうしてこんな人たちのために諦めなきゃいけないんだ。

ムカムカした気持ちを視線に変え、せいっぱいにらみつけるようにして、はっきりと言う。

「ぼくは、この学校を卒業して、リッパな魔導師になるんだ！」

「……そう。残念」

大ちゃんの合図で、氷の槍がぼくへと――っ

――あれえ？ 何してるんですかこんなと・こ・で

「――っ？」

覚悟を決めて目を瞑っていたぼくの耳に、どこか楽しそうな新しい声が聞こえてきた。

目をおそろおそろ開けてみると、いつの間に來たんだろう、教室の扉によりかかるようにして一人の女の子が紫の瞳を歪ませ、ニヤニヤと笑っていた。

彼女はゆっくりと歩み寄ってくると、腕を組んだまま言葉を続ける。

「こんな人の少ない空き教室で、イジメ？ 古いなー、実に古典的

」

「どなた？ 何を根拠にそのようなことをおっしゃるのかしら。」

氷の槍はいつの間にか消えていた。どうやらすばやく詠唱キャンセルをしたらしく、あたりにはひんやりとした空気だけが残っていた。

今にも爆笑しそうな女の子は、ゆるやかにウェーブするオレンジ色の長髪をゆらしながらさらに近寄ってくる。

「根拠お？ そんなもんじゃないわよ。ただ――」

ふところから手のひらサイズの赤い魔具を取り出した彼女は、それをパカッと開けた。

「証拠ならここにあるけど。」

そこにはついさきほどの、まさにぼくが刺し貫かれる寸前の写真がぼっちりと写されていた。

「！ 映写魔導器か！！」

「うぜえ！ まじうっぜえ！！」

「くっ、行くわよ。」

そそくさと退散した3人組を見送って、女の子はふーっとため息

をついた。

「どこにでも居るのねー、ああいうヤツらって。ちょっとは個性が出せないもんかしら」

「あの、ありがとう。でもどうしてここに……?」

貸してくれた手に掴まりながらぼくは立ち上がる。うつ、抑え付けられていたからかちよつとふらつく。

「あなた『つむぎ』でしょ? 答辞の人にケンカふっかけられてた。」

「……そうだけど。」

その切り出し方になんとかなく警戒を覚えてしまう。まさかこの人まで「ひびき様あー」とか言い出すんじゃないだろうか。

ところが彼女はこんな真相を明かしてくれたのだった。

「アタシの名前はつづり。つづりつつむぎ、似てるでしょ?」

「?」

「出席番号が連番。寮が相部屋なのよ、アタシたち」

「あ!」

意外な事実には驚いていると、つづりちゃんは少しだけ照れくさそうに話してくれる。

「本当は講堂で声をかけるべきだったんだけどね、つむぎったら人ごみに流されて全然違う方っちゃうし、やっと追いついたとおもったら変な3人組に絡まれてるし。」

「ありがとう……ぼくのためにそんな。」

「ああ、いやそれがね、あんた見つけたのはアタシじゃなくてコイツなんだけど——」

こいつ? と首をかしげて、つづりちゃんが指し示した入り口を見たぼくは、そこにおなじみのピンク頭があるのに脱力した。

「ばア、だーいじょーぶう? だった?」

「かなで……。」

「探してたらコイツがいきなり現われてね、教えてくれたんだけど……」

つづりちゃんも扱いに困っているのか、引きつり笑いでかなでを見やる。

（なんなの、つむぎの彼氏？）

（ち、違う！ 単なる腐れ縁！！）

空き教室の黒板に鼻歌なんか歌いながらラクガキをはじめ男は、確かに雰囲気は胡散臭かった。

「っていうか、なんで見てたのに入ってこなかったんだよ。」

そうだ、かなでは入ってくれば3対3、それでなくても男の子なんだから、ちよつとはこちらが有利になったはずなんじゃないの？

そう言くと当の本人はへにやりと笑い、でへへなんて声を出す。

「いやあ、女の子がきゃっきゃウフフしてるところに入ったらまずいっしょー」

「キミに期待したぼくがバカだった……」

だけどもあ、一役買ってくれたことは事実だよね。

「一応……ありがとう、かなで。」

「えへへもっと褒めて褒めて、オレ褒められて育つ子。抱きしめてくやさしくそつと」

「いこうか、つづりちゃん」

「アンタら面白いわね」

結局15分遅れで教室に到着したぼくたちは、しょっぱなから怒られるはめになった。

「まったく、初日からこれだなんて、先が思いやられるわね。」

ぼくたち3組の担任、ヒノエ先生は綺麗でスタイル抜群の美人教師だ。先生は笑って腕を組んだ。

「ま、最初からそのくらい元気があるほうが私としては好みだけど。次から注意するように」

「はいっ」「はい」「へへい」

席につくと、ヒノエ先生がこれからのことについて話し出した。

「さてと、全員そろったことだし、改めて自己紹介するわ。1年3

組の担任のヒノエよ。よろしくね」

先生がくりと手を返すと、その手から水しぶきが散り、あたりにキラキラとした涼しげな光景がひろがった。クラスのみんなの間から驚きの声が漏れる。

「アナタたちもすぐにこのくらいのことはできるようになるわ。そのためにはまじめに取り組むことが必要だけどね。」

「ねえつづりちゃん。先生はいま何式魔法使ったのかな。」

「さあ、道具は使ってなかったみたいだけど……歌式？」

すごいなあ、ぼくも頑張ればあれができるようになるのかな。今から楽しみだっ

「それじゃあこれからこの学校で学んでいくために、一番重要なものを配るわ。」

先生はそういつて、横に積んであったダンボールの中から、白い箱を取り出した。前から順番にまわってきたそれはキレイな紅い宝珠で、手にとると適度な重みが伝わってきた。下からは黄色の飾り紐が伸びている。

「それはキーアークと言って、このニキ魔導学校に所属している生徒の証。いわば校章ね。再発行は手間がかかるから失くすんじゃないわよ。」

先生は自分の胸元から似たようなキーアークを取り出し（ただしこちらは透明）ひとなでした。

「出席はすべてこれを私のキーアークにかざすことにより認証されるし、あなたたちがこれから暮らすことになる寮の部屋の鍵にもなります。他にも色々使うから、いつどんな時でも肌身離さず持っているように」

ずいぶん便利なものがあるんだなあ、これも魔法で作られてるのかな？ キラキラと細かい粒子が中で踊っているところを見ると、魔力が働いているみたいだけど……。

「それじゃあ、みんな。用意してきた書類を出してちょうだい。」
ヒノエ先生の指示通りに、ぼくたちは入学書類一式を机の上に出す。そしてキーアークを並べた紙の上をすべらせると――

「わ、わ、わ!」

ペリペリと書類から文字がはがれ、吸い込まれるように宝珠の中へと吸い込まれていく。覗き込むと自分の名前が一瞬中に浮かび上がり、消えていった。

「はい、これで個人登録は終了。簡単でしょ?」

登録が終わると、みんなそれぞれキーアークを自分の持ち物のどこにつけるかでにぎわった。

ぼくはと言うと、いつもつけているヘッドホンにつけることにする。つづりちゃんは魔具からぶら下げ、かなではベルトにつけていた。

うん、なんだかずっと持ってたみたいにしっくり来る。これから長く使うものだから大切にしくちゃ。

「それでは続いて今後の授業のことについてだけど――」

「はああ、やーっと終わったね。」

一通りの説明が終わり、教科書の山を目の前にしてぼくは思いつきり伸びをする。ああ新しい本って良いな、早く勉強したいよ。

「だーるーいーなー、こんな知識詰め込まなくて良かったって良くね、良くね?」

反対にげっそりとした顔で机にもたれかかっているかなで。コイツはまったく……

「もう、何のために入ったんだ。しっかり勉強しなよ、ぼくは面倒みないからね」

「いやっ、外道! 無責任! おにちく!」

「おにちくって何さ、鬼畜でしょ――って誰が鬼だ!」

そうぎゃーぎゃー騒いでいたのがまずかった。教室の前の方から

ある人物が寄ってきて、気づくとぼくの前にスツと立っていたのだ。長い黒髪に同系色のまっすぐな瞳。どこかえらそうに腕を組むその人物は――

「貴様ら……何をサルのように騒いでいるのだ。」

「いっ!?! ひびき……君」

つい数時間前、ぼくに一方的ライバル宣言をした新入生代表のひびき君だった。え、ここに居るってことは

「まさか、同じクラス？」

「なんだ、不満でもあるのか。」

「いやっ、ないない……ないよ。」

「……その妙な間はなんだ。」

ううううよりによって同じクラスだなんて、この先どうなっちゃうんだろう。

ところがやきもきしていたぼくに、彼は意外な謝罪をしてきたのだった。

「すまなかったな。彼女たちに絡まれたから遅くなってしまったのだらう?」

「えっ? 彼女たちってもしかして――」

さっきの大中小の3人組のこと? たぶん『ひびき様ファンクラブ』だと思ふあの子たち。

ひびき君は本当に申し訳なさそうにこう続ける。

「許してやってくれ、あの子らは悪い奴ではないのだが、私に近づく者には妙に敏感でな。ケガはなかったか?」

「う、うん。」

「なら良かった。」

やさしく笑うひびき君はとってもミリオク的だった。たしかにこれだけカッコよかったらファンクラブができるのも頷けるよね。

「確かにあのような目立つ場所で声をかけては迷惑だったろう。言ってしまった後で気がついたのだが遅かったな。」

「ううんっ、全然気にしてないよ! 良かった、ぼくひびき君に嫌

われてるかと思ってた。」

「私はあくまでライバルとしてお前に宣言しただけだ、クラスメイ
トとしては普通に交流を深めたいと考えている。」

そっか、第一印象はサイアクだったけど、本当は誠実で、ちよつ
と熱いだけの人だったんだね。

なんだか嬉しくなったぼくは、にっこり笑って手を差し出した。
「じゃあ友達になろうよ、よろしくひびき君！」

ところが差し出した手はいつまでたっても握り返されることがな
かった。

フシギに思っ て目を開けると、こちらの顔を驚いたようにじつと
見ていたひびき君の顔がみるみる赤くなっていく。

「？」

「らっ、ライバルとそう気安く握手などできるかああ!!」

一言叫ぶと、そのまま教室を飛び出していつてしまう。もらった
教科書もおきっぱなしで、どこ行くつもりなんだろう。

「????」

「ありゃ小学生男子だわ……」

つづりちゃんの何かを悟ったような声を横に、ぼくはひたすら首
を傾げるばかりだった。

食堂で夕食（すっごく色とりどりで豪華だった!）を済ませた後、
寮がある棟に移動したぼくとつづりちゃんは、ドアの前でドキドキ
しながらキーアークを取り出した。

「キレイな部屋だといね……」

「そ、そうね、これから3年間生活するところだからね。」

ちよっぴり古めかしい茶色のドアにキーアークをかざすと、スウ
と表面に銀色の光が走った。そしてカチリと音がし、鍵が開く。

軽くきしむドアを押して入ったぼくたちを、すばらしい光景が待
っていた。

「わぁ……」

真正面に大きくとられた窓から、大きな湖が見えたんだ。

ちようど夕暮れ時の湖は、水色とピンクがまじりあうような空の色を映していてとても幻想的だった。

表面にふわふわと漂っている金色の光は、湖の周囲に生えている星屑草からあふれ出た魔力胞子だ。

「ふうん、なかなか良い部屋じゃない、ちょっとオンボロみたいだけれど……ね!」

バキィ! と、建てつけが悪いシャワールームへの扉を開けたつづりちゃんは、中を確認して一言。

「シャワーしかないわ。」

「お風呂はみんな共同でおっきいのが下にあるみたいだよ。」

ロフトに駆け上ったぼくはそう言いながら中に転がり込んだ。

確かにオンボロだけど、ぼくはこの部屋が気に入った。頑丈だし何よりこれまで何人もの生徒を受け入れてきた暖かみみたいな物があつたんだ。

ゴロンと向かいのロフトに横になった彼女は、目をつむったまま半分眠そうな声で言う。

「荷解きは明日で良いわねー、準備日で丸一日休みみたいだし。」

「ぼくほとんど荷物ないや。自宅がすぐそこだし」

「あぁ、地元進学組だっけ」

そのまましばらく他愛もない話をしていただけで、うとうとし始めたつづりちゃんがこんなことを問いかける。

「ねえ、つむぎはどうして魔導師になりたいと思ったの?」

「……………」

黙りこんでしまったぼくに何かを察したのか、彼女は顔だけをこちらに向けて手をひらひらと振った。

「ごめんごめん、言いたくないんなら別に良いわよ。」

「あ、ふうん。そうじゃなくてね、ちょっとビクリされないかなあって思っただけ。」

体を起こして、湖の方を見る。だいぶ時間が経っていたのですっかり日は沈み、星屑草の魔力胞子だけがフワフワと漂っていた。

「ぼくの両親は2年前に仕事で出て行ったきり帰ってこなくてさ。それを探しに行きたくて、魔導師になろうって決めたんだ。」

「……………」

手がかりは何もないけれど、それでも同じ道に入ればきつといつか――

ここでハッと気づいたぼくは、おそろおそろ顔をあげてつづりちゃんの様子をうかがった。いきなりこんな話しちゃって、暗いやつだと思われたんじゃない……

でも彼女は哀れむでも慰めるでもなく、ただニツと微笑んでいた。

「ふうん、いーじゃない、そういうの。」

「あの……引かないの？」

そう尋ねると、つづりちゃんは どうして？ とでも言いたそうな

顔でごく自然に返してきた。

「話してくれたってコトはとくにアンタの中では結論がついてる話なんでしょ？ ならアタシがいくら慰めの言葉を吐いたところで意味ないじゃない。それとも何かコメント欲しい？」

「ううんっ、要らない！」

あ、なんだろうこの気持ち。胸のつかえがスッと取れていくような。

今までこの話をする、みんなぼくを可哀想な子みたいに接して来たんだ。腫れ物みたいな扱いは、せっかく整理した気持ちをまた暗い方へ引き込むようで、正直キライだった。

だからこそ、この彼女の反応はとても新鮮で嬉しいものだったんだ。

「っあーダメね。アタシってばすっごい合理的だと自負してるんだけど、その分ヒトの気持ちが分からないってゆーか。」

「ううん、それが良い。つづりちゃんはそのままでいて」

バツが悪そうに頭をかくつづりちゃんに、ありのままの気持ちを

伝える。

もしかしたらぼくは、この上なく相性の良いルームメイトに巡り会えたのかもしれない。

しばらくその幸せをかみ締めていたぼくは、パンと一つ手を叩いてこう言う。

「さっ、今度はそっちの番！」

「ええ、アタシい？」

「そーだよ、ぼくだけに話させるのはズルいよ？」

にひひと笑いながら、今度はぼくが質問する側に回る。

最初はためらっていたつづりちゃんだけど、しばらくしてどこか照れくさそうに体を起こし、今までとは違った雰囲気でも語り始める。
「アタシのはつむぎみたいにリッパなものじゃないの。一つ物語りを聞かせてあげようか。クローゼットで村知ってる？」

「ええと……うん。」

「そう、それだけ知名度の低い田舎村よ。ここから遙か西の方、ほとんど大陸の端っこね。アタシはそこから来たの——」

つづりちゃんは流暢に話を紡ぎ、ぼくを見知らぬ土地クローゼに引き込んでいく。

……そうか、彼女もまた話の専門家、スペシャリスト述式魔法のタマゴなんだ。

「そこはとても乾いた地。いつどんな時だってカラカラの風が容赦なく村を襲うわ。朝は凍えるように冷え込み、昼間は容赦なく日が照りつける。それでも住民は決してそこを離れようとはしないの。なぜだか分かる？」

「何か宗教上の理由、とかかなあ？」

「半分当たり。村の近くには古い遺跡と鉱山があってね、神様が宿ると言われるその鉱山から取れる鉱石は、強い魔力を帯びているの。けれども決してむやみやたらと採掘してはいけないしきたりが村には残っている。」

彼女が語るにつれて、ぼくの頭の中にも明確なイメージが伝わってくる。これこそが述式魔導師の話し方の特徴だ。チカラのある語

りは相手を引き込む魅力を放つ。

「昔からの取り決めによって、村人は生きていくのに必要なだけ採掘し、ほそぼそとした生活を続けてきた。けれどもある日突然よそからウワサを聞きつけた盗賊団が来て、鉱山が壊れるほどに掘り起こしたのよ。」

「そんな……。」

「戦う手段を持たないクローゼの村人は、ヤツらが来るたびに怯えて隠れていなくてはいけなかった。自分たちの神様が荒らされ、奪われるのを見ているだけしかできなかったわ。でもそんな中、若者たちが名乗りを上げたの。このままじゃいけないってね。」

「……………」

「彼らは手始めに武装することを提案した。今まで採掘に使っていた工具を手を持ち、鉱山の入り口で盗賊団を待ち構えたの。けれども結果は惨敗。敵の中には魔法を使うものが居たから、鉱山で鍛えた力は何の意味もなかったのよ。」

ぼくはすっかり引き込まれ、物語りに聞き入るように真剣に耳を傾けていた。

「魔法の強大さを目の当たりにした村の者は、対抗するため本格的な魔導師を育てることにしたわ。そこで選ばれたのは村長の娘だった。」

彼女は小さい頃から空想することが大好きで、ヒマさえあれば周りの人たちに自分の作ったお話を聞かせていた。彼女が一面の花畑を語れば、足元に小さな花が芽吹き、大嵐の話をすればほんの少しだけ風が吹いた。述式魔導師としての才能があったのね。

村の期待を一身に受けた彼女は、無事ニキ魔導学校に通うことになり、そして――。」

つづりちゃんはんーつと伸びをすると、突然夢から覚めたようにガラリといつものように戻す。

「――と、まあ、こんなところ。んー、どうも三人称視点はニガテなのよねえ、練習しなくちゃ。」

「え？ え？」

話の突然の終わりに、ぼくはとまどってこんなことを聞いてしまった。

「その女の子どうしたの？ 無事に魔導師になれたの？」

「はあ？」

しばらくポカンとしていたつづりちゃんは、突然はじかれたように笑い出す。な、なんで？

「あははははっ、アンタねえ、自分で聞いたんでしょ。どうしてアタシが魔導師を目指してるか。」

「うん。」

「その女の子は目の前に居るわよ。アタシよア・タ・シ。無事になれるかどうかはこれから決まるんじゃない。だからこの物語りはここで止まってるの。」

「あ！」

そこでようやく理解したぼくは、自分の理解力のなさにガッカリしてしまふ。普通に架空のお話として聞いちゃってたよ……タマゴとは言え、述式魔導師の話をナメちゃいけないね。

「ま、長々と話したけどアタシが魔導師を目指すのは自分の故郷を守るためよ。あんなシケた村だけアタシが育った村には違いないし。」

「すぐくrippな理由だよ。自分の村を大切に思ってるんだね。」

「まあね、村のヒーローになれるっていうんなら、悪い気はしないわね。」

ケラケラと笑う彼女に、ぼくはひとつの提案をすることにした。

「ねえっ、つづりちゃん。そのクローゼから来たんならこの街のことはあんまり知らないでしょ」

「そう、ねえ。入学試験で来たときは列車の都合で早々に帰っちゃったし……。」

「それならさ、明日は準備日だからこの街を案内してあげるよ！ 自慢じゃないけどぼくは生まれた時からこの街に住んでるんだ。裏

道からおいしいケーキ屋さんまで全部知ってるよ。」

「あら良いわね。これから3年間お世話になる街だもの。少しくらい下見にいかなくちゃ。」

「決まりだね。」

ロフトから乗り出したつづりちゃんは、ニツと笑うところ言う。

「上手くやっていけそうじゃない？ アタシたち」

「えへへ、よろしくね」

次の日、よく晴れた青空の下をぼくとつづりちゃんは仲良く歩いていた。

街のメインストリートでもある赤いレンガ敷きの通りは今日もにぎやかで、あちらこちらで活気のある声が飛び交っている。

他の学生もみんな街に繰り出しているのかな。あちこちでキーアークをつけた学生を見かける。その色は赤・青・緑とそれぞれだった。赤が新人生として、他の色は上級生だろうか。

「晴れて良かったね。」

「ホント、いい天気。」

ニキ魔導学校のあるこのレークサイドは、学園都市とも呼ばれる学生の街だ。湖の隣に隣接するように学校が建てられ、その周りを囲むように街並が広がっている。

今ある学校の建物は、元々は貴族のお城だったらしいんだけど、その当主さんが亡くなってから国が買い取って学校にしまったらしい。とは言っても、ぼくが生まれるずっと前の話、300年以上も前の話だ。

「だからこの街は城下町みたいな形をしているんだよ。」

「なるほどねえ」

「へえ、そうなんだー。オレ初めて知ったー。やりい一つ賢くなつたー、明日には忘れてるけど。」

そろって関心してくれるつづりちゃんとかなで……って

「どうして住民のキミが知らないんだよっ、っていうか何で居る！」
「オレに黙って行っちゃうなんて、つむぎのいけずうけちんぼ〜
チビ〜」

「チビって言うなあ！」

ドゴオ！

ぼくにとって禁句中の禁句を放ったかなでをとり蹴りで沈め、肩を怒らせ歩き出す。

「あら、置いてくの？」

「だってかなでが居るとともに散策なんてできないよ、いっつもトラブル持ってくるんだもん、そいつ。」

わすれもしない7歳の春、ぼくはお隣さんだったかなでと一緒にお使いに出かけたのだ。商業区の八百屋さんに行ってカレーの材料を買ってくるという簡単なお使いだったのに……

「それをかなでが寄り道はするわ、学校の生徒にイタズラしてぼくまで追っかけられるわ、ドブの側溝に足つつ込むわ——」

「最後のはつむぎの自業自得じゃなかったっけ。」

「うぐっ」

たしかに、あれは、ぼくの不注意だった、けど。

「さあ〜行こう。案内し倒してやるぜ！」

「あっ」

ぼくが戸惑っている間に、かなでは先に行ってしまう——いつの間にか取ったぼくのヘッドホンを右手にぶら下げて。

「あああ〜、またアイツのペースに乗せられるうう〜」

「良いんじゃない？ 少なくともアタシは楽しいけどね。ああ言う男。」

「んなっ、つづりちゃんまさか——」

万が一にもしたくない想像をしてしまって、ぼくは恐怖におののき振り返る。

ところが彼女は至極まじめな顔でこう言ってのけたのだった。
「つむぎとの漫才コンビ、もっと見たいわ。」

「……そう。」

なんかもう、考えるのがめんどくさくなってきた。

諦めたぼくは大人しくピンク頭の後を追うことにするのだった。

「かくな〜でっ、ばかなで！　ぼくのヘッドホン返せよっ」

「いっつも思うんだけど、これ何が聞こえんの？」

「うるさいかえせーっ」

バツと跳びつき、勝手に頭にはめていたかなでからヘッドホンを取り返す。

背中に飛び乗るような形になったところで、ぼくはふと気づいた。かなでの頭ごしに、道の真ん中で立ち尽くす人がいる。

そこのお店で買ったのだろうか、ベリイソフトクリームを今まさに口に運ぼうとしたまま停止し、ぽたぽたと溶け出した液体が手首を伝って地面に落ちている。こんな陽気のいい日でも昨日と同じカッチリとした黒系の服を着こなす彼は――

「ひびきくん？」

呼びかけにも応じず、ポカンと開いたままの口から「あ」とかう「だとかの音が漏れてくる。ん」と

「あの……アイス、溶けてるよ？」

「おわたあっ!？」

奇妙な叫び声をあげてソフトクリームを放り投げた彼に、悲劇がまっていた。

「あ。」「あー」「あちゃー」

高く放り投げたソフトクリームは、そのまま真っすぐ彼の頭の上に落ちてきたんだ。長い黒髪に、薄ピンク色の液体がベトツと着地しゆっくりと流れてゆく。

「こうして冷たく厳しい冬を越え、ようやく雪解けの季節が始まったのです……」

ブツ

神妙にワケの分からないコメントをつぶやくかなでに、ぼくとつづりちゃんは思わず吹き出してしまう。

その事に気分を悪くしたのか、ひびきくんは眉を寄せてパチンと指を鳴らした。

とたんに水がバケツ一杯分空中に出現し、ひびきくんの髪の毛を包み込みあつという間に汚れを落としてしまう。すっごいなあ。

「まったく貴様らというヤツは！ 往来でななな、何を破廉恥な……」

「ハレンチ……って何が？」

未だかなでの背中に乗っかっているぼくを指して（だってこうでしないと彼と視線が合わないんだ！）ひびきくんはまたも顔を赤くする。もしかして……赤面症？

「若い男女がそのようにベタベタと——ええい、離れんか！！ 学生の内の際は清く正しくからだろう！」

「古い……」

つづりちゃんの呆れたような声を聞きながら、ぼくはようやくかなでの背中から飛び降りる。別になかなでとはそんなじゃないんだけどな。幼なじみなんだし。ありえないよ。

「えっと、ひびきくんはどうしてここに？」

気を取り直して聞いてみると、彼は鼻をひとつフンとならして腕を組んだ。

「知れたこと。こうして新入生が羽目を外していないかどうか街を見回っているのだ。案の定貴様らのようなヤツらが居たわけだがな。」

「別にアタシたちは悪いことしてないわよ。ただ歩いてただけだしねー」

「ねー。あ、ひびきくんも良かったら一緒にどう？」

「んなっ!？」

またもフシギな動きで固まるひびきくんだったけど、一瞬後には普段の冷静さを取り戻そうとしているように咳払いを一つした。

「良いだろう。そのピンクのクラゲ男の監視も含めて同行させてもらおうか。」

「ピンク？ クラゲ？ どこ？」

「貴様のことだ！」

わざとらしく辺りを探しはじめるかなでを見ておくも納得してしまった。ピンクのクラゲか……的を射ているかもしれない。

ともかく、4人で散策することになったぼくたちは歩きながら街の説明をする（かなでは非常に役に立たない情報を提供するばかりだったけど）

「あそこがメリィおばさんがやってる宿屋、その武器屋のおじさんはノザって言うクマみたいな人。あ、それからあっちの魔材屋さんは学校にも納品しているんだ。経営してるのはドロシーさんって言うてすごい綺麗な人なんだよ。ウワサじゃ何百年も生きてる魔女なんだって。」

「その路地を入ったところに店かまえてるのはこの街の子供ならだれもが御用達のイタズラショップ、ねずみ花火がおススメ。それからその覗き穴は——」

「何だ？ 何が見えるんだ？」

「あつ、ひびきくんそこは——」

レンガの壁に丸くあいた穴を、ひびきくんは覗き込む。あああ……

「ぷつ、ちよつとアンタ自分の顔見てみなさいよ！」

「？ なあっ!？」

笑いをこらえるつづりちゃんが差し出した鏡を見て、彼はまたも絶句する。その目のまわりはパンダのようにくっきりと黒インクがついていた。

この仕掛けはかなでがつくったもので、フシギと覗き込みたくなってしまう心理を利用した悪質なイタズラだった。一時期、街には片目だけパンダのような住人が大量発生したものだ。

「いい加減にしないかーっ！」

「いやいや、オレは別に「覗け」とも何も言っていないぜ。」

「それにしても詳しいのね、アンタたち。」

裏通りからメインストリートに戻ると、つづりちゃんが感心したようにそう言う。ぼくたちはニッコリ笑って自慢げに返す。

「そりゃそうだよ、生まれた時からこの街に住んでるんだもん。」

「オレなんかこの街の地下にめぐらされた秘密経路の地図まで頭に入ってるし。」

「えっ、何それそんなのあったの!？」

「ウソだけど。」

「こらあ!」

ニヤニヤと笑うかなでは、陽の下に出るとネコのように伸びをする。

「あー、目的もなくぶらぶらするのって楽しいねー。こんなことから『かなた』も連れてくりゃ良かった。」

「かなた?」

聞きなれない名前に首をかしげると、首だけをこちらに向けて説明してくれる。

「うん、オレのルームメイト。別のクラスなんだけど、これがすげーノリが良くてさあ、すげえ気が合うんだよね、今日は何か忙しいとかでこれなかったけど。今度紹介するよ。」

かなでの紹介か……若干不安があるけど、良い人なんだろうな。コイツが懐くのはたいてい悪人じゃないから。

ところが今の話を聞いていたひびきくんは、顔をしかめて忠告するようにジロリとかなでを見やる。

「おい、あまり部屋で騒がしくするなよ。」

「お堅いなあ、男子が集まって騒ぐとかムリがあるっすよ、ひびちゃんも今度一緒にどう?」

「ひびちゃん!？」

「あー、ひびきくんの相部屋は誰?」

また周囲の注目を集めてしまいそうな展開になってしまおうと思っ

たばくは、穏便な方向に話を持っていこうと話をふる。すると彼はどこか誇らしげに胸を張ってこう答えた。

「私は一人部屋だ。学級委員長だからな。」

「学級？」「委員長。」「ヨッ、ムツツリ委員長！」

「誰がだ！」

脊髄反射的にツツコミを入れるひびきくん。学級委員長だったんだ。

「入学前にヒノエ女史から話があつてな。ぜひにと言われ引き受けたのだ。」

「だからって一人部屋？」えこひいきじゃない？」

「私が決めたことではない。」

ムスツと腕組みをする彼に、ぼくは一つの提案をした。

「あ、じゃあ今度から委員長って呼んでいい？」

「え。」

なぜか戸惑うようなそぶりを見せた彼の肩を、つづりちゃんがニヤリと笑って一つたたく。

「あー、良いわね。ひびきなんてよばれるより、その方がよっぽどしつくりくるわよー。」

「いやっ、私は」

その反対側の肩をたたき、かなでも後押しするように言う。

「委員長！ ムツツリスケベ委員長！」

「だから私はムツツリではない！ 増やすなっ」

がつちりと彼の両脇を固める二人はぼくに視線を向け、コックリとうなずく。なんだろう、そのトドメをさしてやれと言わんばかりの目は。……まあいいか。

正面から見つめると、やっぱり委員長の顔は赤くなる。その顔を見ながら、ぼくは聞いてみた。

「委員長って呼ばれるの、いや？」

「……………好きなように呼べ。」

ガクリと力なくうなだれる彼の後ろで、かなでとつづりちゃんが

ハイタッチをする。

ぼくはやっぱり首を傾げたまま、周りの注目を集めているのを感じていた。

「はあゝ歩いたねえ。」

「もう足がクタクタよ。でも必要な物が買えてよかったわ。」

真上にあった太陽がちょっとだけ傾いてきた頃。ぼくたちは少し遅めのランチタイムをとっていた。

メインストリートから一本外れた道にあるおしゃれなカフェテリア。若い夫婦がやっているこの「リュミエール」は最近できたイチオシのお店だ。

今日は晴れているので、お店の外に設置してあるテラスでお食事中。新鮮なレタスと熱々のしたたるベーコンを挟んだサンドイッチが絶品なんだよ、うーん美味しいなあ。

「まったく女というものは……どれだけ歩かせれば気が済むのだ。」

ご機嫌なぼくらとはウラハラに、向かいの席でアイスカフェオレをすすっていた委員長は不機嫌そうにそう言う。つづりちゃんはその言葉にムツとしたようで、サラダのフォークを突きつけるように振った。

「いいじゃない、別に荷物持たせてるわけじゃあるまいし。忍耐力のない男はモテないわよ。」

「女のショッピングなぞ付き合えと言われても、退屈でたまらん。私は食べたら帰るからな。」

そう言いながらもパスタをつついている様子を見ると、このお店が気に入ったようだ。おいしいもんねえ

しばらくみんな黙々と食べていたけど、ぼくはふと気がついて話題を振る。

「そういえばさ、今度の授業までに4人組のチームを組んでおけて先生言ってたね。」

「ああ、言ってたわね。何をさせるつもりなのかは知らないけど。」
「おそらくは課外実習でのチームだろう。他にも授業内での活動に使うかもしれんがな。」

「ここに居る4人で組まない？」

ぼくがそう言うのと、みんなは一斉に食べる手を止めてお互いを見やった。あれ？ 良い提案だと思ったんだけど……

「つむぎとかなではともかく、委員長が一緒ねえ……。」

「私とてお断りだ。特にそのクラゲ男が気に食わん！」

「オレはつむぎが居ればなんだっていーよー。」

と、みんな乗り気ではない様子。うーん、困ったなあ

「ぼくは相性いいと思うんだけどなー」

と、何とかみんなを説得しようとしたその時だった。

バツ

「え？ あ！」

「あーっ、置き引きっ！！」

通りを歩いていた帽子の男が、とつぜん床に置いてあったつづりちゃんのバックをひったくるように取って行ってしまったのだ。

「待ちなさいよこのっ！」

慌てて立ち上がったつづりちゃんの横を、ぼくとかなでがすり抜け、手すりを乗り越えて追いかけ始める。捕まえなきゃ！

けれども犯人はさすがに素早く、すでに10メートルほど間を開けられてしまった。ああもう！

その時、後ろからパチンと音がして、委員長の声が聞こえてきた。

「フン……アイビーフォロー」

植物をあやつる魔法が、そこかしこにある植物たちを一斉に繁らせ通り一帯を覆いつくしてしまう。犯人は驚いてツタに足をとられて戸惑っている。今だ！

「かなでっ！」

「あいよー」

左の建物のベランダからジャンプしたかなでが、飛び降りざまに

帽子の男の背中をけり倒す。バランスを崩したそこに、向かいの建物から跳んだぼくがタクトをかざし、空気中の水分に働きかけるリズムを作りだした。

「フリーズ！」

キーン！

魔法が成功し、ぼくの掛け声と共に男の両手足が氷で固まる。犯人はうめきながら地面に転がった。やった！

「くそお……魔導師かよ。」

「ったく、返しなさいよ！」

「ぐあっ」

追いついたつづりちゃんが男の背中に蹴りを入れる。と、ふところに隠し持っていたのかキーアークと魔具が転がり出てきた。

「油断もスキもないわねー。」

「観光の街でもあるからね、こういったスリとかは多いんだ。」

慌てて飛んできた自警団の人に犯人を引き渡して、ぼくたちはカフェテリアに戻る。と、委員長は先ほどと同じ体勢でぼくたちを待っていた。

「捕まえたのか。」

「まあね、さっきはありがとう。意外と良いところあるのね。」

「意外とは余計だ。ま、良かったな。」

「そっちの二人も、ありがとね。」

追加で頼んだのか、イチゴのパフェをつついていた委員長は軽く笑う。かなでもへらくつと笑ってるし、ぼくはさっき感じたことに確信を持ち、もう一度言う。

「やっぱり相性いいと思うよ、ぼくたち。」

すると、みんなは互いに見つめあってから、今度は柔らかく微笑んだ。

「そうねえ、それじゃ改めてチームを組んでももらえないかしら。」

「ま、良いだろう。」

「じゃー、そうと決まったら祝杯あげよーぜ、委員長のおごりで」

「何イ!？」

いつの間に頼んだのか、運ばれてきた魔導酒のジョッキを手に、
ぼくたちは大きく声をあげた。

『かんぱーい!』

これが、これから先いくつもの命運を共にする仲間になるとは、
まだこの時のぼくは考えもなかったんだ。

1章『新しい生活〜みんなそれぞれ個性があるワケで〜』

ぼくは真剣な眼差しで前方を見つめる。

（勝負は一瞬……！）

すでに展開を終え、後はぼくの言葉で解放されるのを待っているタクト。その先端は、さきほどから赤い光が点滅を繰り返していた。見据える先にはいつもどおりヒョロリと立って構えもしないかなで居る。そのニヤケ顔に向かってぼくは鋭く叫んだ。

「ファイヤー！」

ボウッ！

言い切るか切らないか、ホントに微妙なそのタイミングで炎の玉が飛び出した。まっすぐに相手に向かって飛んでいく火球は、周囲の空気を巻き込みながら巨大化していく。

このままだと黒こげになるはずだったかなでは、ぼくが魔法を放ったと同時に左手を前に突き出しようやく呼び出しの呪文をかけた。

「f e t h e r」

光の粒子が急速に集まり、後ろに引き抜いたその手には巨大な羽根ペンが握られてた。間髪入れず素早く空中に呪文^{スベル}を書き、発動させる。

「シールド」

フォンッ

いつものふざけた声とは違う真剣な声で、頑丈な白い半透明の盾がかなでを守るように出現する。ぼくのファイヤーはそこにモロに当たり、細かく霧散し消えていった。

1章『新しい生活〜みんなそれぞれ個性があるワケで〜』

クラスみんながシーンと見守るなか、先に口を開いたのはかなでだった。

「あいかわらずバカ正直というか、まっすぐというか、直線にしか打てないんだなーつむぎは。そこが良いんだけど。」

「う、うるさいっ。いつかそのナメくさった根性ごと燃やしてやるっ」

「はいはいはい、私は魔法の模擬合戦を見せろと言っただけで、口での攻撃まで見せろとは言ってないわよ。」

ヒートアップしそうだったばかりの間に、苦笑いのヒノエ先生が割りこみ、みんなから一斉に笑い声があがる。そうでもしてくれなかったら仁義なき肉弾戦が始まってたかもしれない。

ヒノエ先生はパンツと一つ手を叩くと、羽根ペンを指して説明を始める。

「このように、今かなでが見せてくれた展開が『記述式魔法』略して述式と呼ばれるスタイルで、一般的な魔導師はこの手を使います。ようは空中にスペルを書き出して魔法を発動させる、シンプルな方法ね。みんなも大半はこれを使ってるんじゃないかしら。」

いまさらだけど説明しておく、ただいま記念すべき授業の一回目『総合魔法』の真っ最中。魔法を使うにあたっての心構えや基礎知識を学ぶ、総合的な時間だ。

そこまでは良かったんだけど……昨日の大捕り物の騒動が学校側にまで伝わってしまったらしく、ヒノエ先生からじきじきにお手本を見せてくれと頼まれてしまったのだ。これがぼくたちが教室で勝負なんかしてる理由。

「述式魔法はお手軽だけど、その分奥が深いわ。付け足すスペルによって威力が変わってきたりするから、多少の文才が必要とされるわね。それでも基本さえ抑えておけば確実に発動できるのが述式のメリットよ。」

次に——とこちらを向いた先生は、少し困ったように眉を寄せる。「つむぎが使って見せたのが『音楽式魔法』と呼ばれる方法なんだ

けど……ちよつと私には説明が難しいわね。もう一度ゆっくりやってみてくれる？」

「あ、はい。えっと、まず周りの音をよく聞くんです。」

世の中に存在しているモノには全部、音とリズムがある。

たとえば傍に立っているヒノエ先生からは、血液や体の細胞とか色々な音が混ざり合い一つのメロディを奏でている。こういった人間なんかは複雑なので、ぼくの音式魔法では爆発させたり凍らせたりといったことはできない。……したくもないけど。

代わりに空気中の水分や、地面の土などのリズムはとても単純なので、これらをあやつり魔法を使うのだ。

「たいていは流れる音の中に決まったリズムがあるんです。ぼくはそのリズムに向けてタクトで指揮をしてあげる、するとその物質の方向性が変わって、性質を変えたり、形を変えたりと言ったことが可能になります。」

そういつて空気のリズムを指揮すると、緩やかな風が教室内に流れ始めた。

「これはちよつと特殊な方式ね。つむぎが言っていた『モノの音を聞く』が出来るようになるためには訓練された耳が必要とされているわ。」

戻っていいわよ、と指示を出されたばかりは、一番前に座っていた委員長とつづりちゃんの隣に戻る。先生は黒板に向かって板書を始めた。

「述式、音式、歌式、色式などスタイルは魔導師の数だけあるわ。

自分がどれを使うかは、これから色々な方法を試してみても自分に合った物を見つけていくことが大切よ。わかった？」

はい、と返事をしたみんなを見回し、ヒノエ先生は一つ宿題を出した。

「それでは明日の授業までに、初心者の子は同じチームのメンバーに協力してもらって、様々な方法を予習をしてくること。これからの授業内でそれぞれについて指導していくから、今すぐに決めるこ

とは無いけど、何事もやってみることが大事だからね。」

タイミングよくチャイムが鳴って授業が終わる。

ニキ魔導学校の授業は朝8時から午後の4時までが基本だ。その後は練習場にこもって自主練しても良いし、図書館で勉強しても良い。街に繰り出すもよし。門限の9時までに寮に戻れば何をするのも自由なんだそうだ。

けれども宿題を出されたとあってはさすがに街へフラフラと遊びに行く人は居ないようだった。クラスのみんなはチームで固まり、それぞれの段階を確認し出す。

ぼくたちも例外ではなく、話し合う事となった。が――

「その前に確認したいんだけど。アタシたちの組、一人足りなくないい？」

そう、他のクラスは20人ずつなのに、ぼくたちの3組だけ19人しか居なかったのだ。……どうなってるんだろう？

辺りをキョロキョロして余ってる人が居ないかどうか探していたぼくたちに、委員長が淡々と告げる。

「その点については昨晚確認を取った。なんでも家庭の事情で一人来れていないらしい。その生徒が着き次第、自動的に私たちの組に割り振られる事となるな。」

「そうなのかー、女の子だと良いね委員長」

「ぼっ、どうでも良い！」

頭に腕を乗っけるかなでを払いのけ、委員長はオホンと咳払いをする。

「さっさと宿題を片付けるぞ。とは言え私たちは既にそれぞれスタイルを確立している。今さら何式かを模索する必要など無いと思うが――」

「ぼくが音式でしょ、かなでが述式で、つづりちゃんも述式。……だよな？」

「そうよ。アタシの魔具はコレ」

つづりちゃんはポケットからあの赤い魔具を取り出す。改めてみると、手のひらサイズの箱のようで、とても述式使いの筆記用具には見えないけど……。

「ほう、ずいぶんとめずらしい物を使うのだな。」

「委員長、知ってるの？」

興味を引かれたらしい委員長が、つづりちゃんの魔具をまじまじと見つめる。

「これは『ケータイ』と呼ばれるものでな。古代の遺産を模して少し前に開発された魔具らしい。私も実物を見るのは初めてだ。」

「ちょーっとコレを扱うにはコツが居るから、あんまり流行らなかつたらしいわよ。良い？」

パカッと魔具を開いたつづりちゃんは、何やら下に並んでいるボタンを猛烈な勢いで連打し始めた。ゆ、指が見えない……。

「——と、彼は文字通り冷水を浴びせられたのであった。」

彼女が打ち込んでいくたびに、上画面に文字が羅列されていく。またそれと同時に魔法展開する時の光が『ケータイ』を取り囲み回り始めた。

「コールド！」

そして最後のボタンをピッと押すと、かなでの上空に氷水が出現し、バシァアアと頭から浴びせられたのだった。

「ぎゃあー、ひでえよつづちん。風ー邪ーひーくー」

「大丈夫よ、アンタ馬鹿でしょ」

「なるほど。そうだった」

ぷるぷるっと犬のように頭を振るかなでに向けて、つづりちゃんは乾燥の魔法をかける。今まで述式って言うってペンで記述する方法しか知らなかったけど、こんな方法もあるんだなあ

「形式はどうであれ、文章を表現できるならそれは述式魔法の括りになるからな。」

「あれ、でもそれって映像も取れるんだよね？ 映式じゃないんだ。」

例の3人組から助けてくれた時は、映写魔導器でもあったはずだ。そう聞くとつづりちゃんはおくをカシヤツと撮って見せてくれた。

「ケータイはムダに機能がついててね、たしかに映像も撮れるけどアタシは述式の方が性にあってるのよ。」

「ふーん。」

あれ、それじゃあ――と振り向いたおくは、興味深げにケータイを見つめていた彼に問う。

「委員長は何式？」

確か昨日は指を鳴らして魔法を発動させてたけど、いったい何式なんだろう。

その問いかけに委員長はハア？ と、言った感じで顔をゆがめた。

「気づかなかったのか。」

「む、何がさ。」

「貴様と同じだ。音式魔法。」

その答えに一瞬ポカンとしたおくは、ハツと我に振り返った。

「えええ！？ 嘘だ！」

「嘘について何になる……。」

「だって何の音楽関係の魔具も使ってないし、ましてやリズムに働きかけてなかったじゃないか！！」

おくが苦勞してリズムを操っていると言うのに、それを補助である魔具を使わない指パッチン一つで！？

「ずるい！」

「仕方ないだろう、色々試してこれが一番性に合ったのだから。リズムなど指の動き一つでどうとでもなる。魔具などいらん。」

「う~~~~っ」

色々試したってことは、どんな方式でも扱えるってことだ。つまり才能あふれる、エリート……

「おい、何を俯いている。」

「委員長なんか嫌いだー！」

「なあ！？」

うわーんと泣き出すぼくに、彼はあたふたと慌て始める。

よ、世の中には、どんなに苦労したって、全然発動しない人だっているのに、神様なんて不公平だっ

「き、嫌い……キライだと……。」

「まあまあ、つむぎには音式が一番合ってるって。述式試して暴発したり、色式試して物体X作り出したりするからね」

「ぼくを慰めたいのかけなしたいのかどっちなんだよ！」

ドゴォ！

「へぶっ」

調子にのって抱きついてこようとするかなでに蹴りを一発いれて、ぼくはつづりちゃんに泣き付く。どーせぼくには才能なんてないよっ「にぎやかねえ、退屈しないわホント。」

のんきにそう言う声が、ぼくたちの様子を的確に表していた。

ぼくたちが主に寝泊りなど生活をする学生寮は、本校舎の裏手にあって、上から見るとグルリと湖を半分取り囲むような形をしている。その内訳は上の階層から1年、2年、3年、食事のための大広間と言った感じだ。

一学年100人、全校で300人が暮らしているのだから、その規模はとんでもなく大きい。当然それを世話するだけの人員が必要となるのだけど……この場合は『人』と言うのには少し間違いがあるかもしれない。

「あ、ありがとうー」

大広間で夕食をとっていたぼくは、後ろからにゅっと差し出されたお皿をちよつとだけ引きつった笑顔で受け取る。中に大量の魔力を詰め込んだ麻袋は、ぺこりと少しだけ会釈をするとまた別の生徒の給仕へと行ってしまった。

そう、ここでは生身の人間ではなく、無機質な物体に生命を吹き込まれた人工生命体。ホームクルスが働いているのだ。

これはとても高度な魔法で、どうやら校長先生が作り出したみたいなんだけど……うう、やっぱりまだ慣れないなあ。

ホームクルスたちの形状は実に様々で、たいていは布の袋だったりホウキに手が生えてたりするのだけど、時たま等身大の人形などがあって本物の人間と見間違えてしまう。

確かにちよつとだけブキミではあるけど、ぼくたちのために文句も言わず黙々と働いてくれるその姿はなんだか感慨深いものがある。だから素直にお礼を言ったのだけど、少し離れたところからクスクス笑うような声が聞こえてきた。

「いやあね、ホームクルスなんかにお礼を言ったりして。なんてお間抜けなのかしら。」

「だっさー、ただの袋に頭下げちゃってるよ。」

「恥ずかしい人……。」

(うっ)

そちらを見ると、そこには例のぼくを空き教室でおどそうとした3人組が居た。

できれば係わり合いになりたくなくて、食事のトレーを持って移動する。はあ、放っておけばいつか収まるとは思うけど……なんだかなあ。

「だから心情を表すにはやっぱり一人称が一番的確よ。読者はその視点になって話の中に入り込めるんだから。」

「いやいや、時代は二人称視点だね。確かに使いこなすのは難しいけど、新しい斬新なスタイルが——」

何やら熱い議論を交わしながら大広間に入ってきたのは、つづりちゃんとかなでだった。二人とも述式魔導師だけあって魔法に関しての話が合うらしい。

(良いなあ)

ぼくは音式だから、彼らの議論は畑違いだ。

むかし一度だけ述式のまねをして話と魔法をつむいだら、あまりの下手くそさに暴発し、家の壁を吹っ飛ばしてしまった事を思い出す。……ぼくはただ花を咲かせるだけのつもりだったのに。

（あーあ、ぼくって才能ないのかなあ）

考えたくもないそんな思いが浮かんではぼくの頭にこびりついて離れない。

唯一使える音式だって、お父さんとお母さんが丁寧に教えてくれたのにも関わらず、使えるものは簡単な下級のものばかりだ。いったんネガティブな考えになってしまうと、ズルズルと思考が引きずられていくらしかった。

（うー自己嫌悪。）

自分の思考にノックダウンされて机に突っ伏していると、後ろから声をかけられる。

「どうした、はいずりまわるナメクジのようだぞ。」

「いいんちょ……。」

ここでそのトドメを刺すか。と、言うタイミングで、今一番会いたくない人がそこにいた。

「キミってば無意識なの。」

「？」

げんなりしながらも隣を空ける。彼は夕飯のトレーを置くとぼくに向かって妙に姿勢を正した。

「つつ、つつつつ……。」

「？ どっか痛いのか？」

「違うっ、つつむぎ。さっきの話だが――」

ああ、と呟いてぼくはつつぷしたままそちらに顔を向ける。

「ごめんごめん、冗談だよ。本気で委員長が嫌いなわけじゃないから。」

「そっ、そうか。」

そう、むしろ腹立たしいのは才能のない自分なんだ。

「……………」

「おい？」

ぼくはぼんやりと委員長のお皿に取り分けられたケーキを見ながら、問いかけてみる。

「委員長はさー、どうして音式なの。」

「はあ？」

「色んな方式をあつかえるのに、なんで音楽という形式を選んだの。」

文章も、絵も、色んな選択肢を選べるのに、どうしてその中から曲を選んだんだろう。

そう聞くと彼は、しばらく考えたあとフォークを取って食べ始めた。

「忘れた。」

「わすれた!？」

「そうだ、気づいたら音式だったのだ。理由など要らん。」

「そ、そんなのって……。」

言うべき言葉を探し出す前に、彼は淡々と続ける。

「ただ曲を作り出すという作業が好きだったかもしれない。たとえ音式しか使えなかったとしても、私は満足だったろうな。」

こちらをチラッとみた委員長は、すぐに視線をそらすとそっけなく聞いてくる。

「貴様はどうだ、今の自分の形式に不満でもあるのか？」

言われて頭の中がスツと整理されていくのを感じる。

「ううん、ぼくは音式が好きだよ。色んな音を聞くのが楽しい。自分だけの曲を奏でられるのがうれしい。」

「ならばそれで良いではないか。何を悩む必要がある。」

そっか、他の形式が使えなかったって、魔力が弱くたって、ぼくはただまっすぐに音式を極めていけばいいだけなんだ。

そりゃ他の形式を上手く使えないのは、ちよっぴり寂しいけど。

その分ぼくは自分のスタイルを貫けばいいんだ!

「お悩み相談室はこれで良いか？」

「うん、ありがと委員長。……ぼく頑張るよ、たとえばタクソでも一生懸命、勉強するから。」

フツと優しく笑った委員長は、持っていたフォークでリズムを刻み始める。

「確かにお前の魔法は未熟だが、私は好きだ。」

「え？」

「素直で明るくてバカみたいになっすぐに——とても耳に優しい魔法だ。」

委員長が奏でる曲が流れ始め、広間に居た何人かの音式魔導師が顔を上げ始める。

少しだけ顔が熱くなるのを感じながら、ぼくは口を開いた。

「ぼくも、キミの音が好きだよ。力強くて激しくて、でも綺麗な魔法。」

「あら、何かしら。綺麗な音楽ね。」

白熱した議論が続いていたつづりは、ふとかな音を聴いたような気がして顔を上げる。

かすかに魔力を帯びた調べは、聴くものの心をなごませ、癒していく。

うっとり聞き入るつづりとは対照的に、向かいの男は何の感情もあらわさずに小さく呟くだけだった。

「話し紡いで金の糸、調べ奏でて銀の風——」

「それではみんな、予習はしてきたかしら？」

ヒノエ先生がそういうと、みんなはそろっては——い、と返事を返す。その様子に先生はうんうんとうなずいた。

「よしよし、最初のうちはそうじゃなくちゃね。まあこれが1ヶ月後にはサボり始めるヤツが出てくるわけだけど。」

こころなしか、かなでの方を見て言っているような気がする。分かる人にはわかるもんなんだね……。

ところが視線を感じ取ったのか、疑惑の人物は頭の後ろで手を組みながら非常にダルそーにこう言っただけのけたのだった。

「オレちょーまじめよ？　昨日の夕飯なんか、お魚の骨まで残さず頂いちゃったし。うぐっ」

「かなで……少し黙ろうか。」

べしっと左手でおしゃべりな口をふさぎ、先生に先に進めてくれるように視線を送る。

「じゃあアンケートをとるわね。直感でいいわ、自分がこれに合ってるんじゃないかなーっていう方式に手を上げてくれるかしら。」

先生は順番に方式をあげていく。述式、音式、色式、歌式、映式、その他……。

「やっぱり述式が多いわねえ。」

結果だけ言うとクラスの4分の3は述式に手を上げた。残りの4人のうち、音式がぼくと委員長で、残りの2人が歌式。色式と映式は1人もいなかった。

「これから学んでいくうちに、変化していくかもしれない物だから柔軟に捕えてね。それでは今日の授業の内容ですが――」

『絵で見る魔法』をパタンと閉じて、ぼくは机につっぷして寝るかなでの頭をはたいた。

「終わったよ！」

「んー？」

くああーと、あくびをしたかなでは、まだぼんやりしていたのか、こんなことを呟いた。

「あーもう終わり？　つむぎ専門科の願書もー出しちゃった？　オレおんなじのがいーなー」

「専門科あ？」

ぼくはびっくりして思わず教科書をしまう手を止める。専門科つていうのは3年になってからのコース選択の話で、今のぼくたちには全然関係のない話だ。

わけが分からなくて、まだとろんとしている水色の瞳を見つめると、へにやりと笑ったかなではまたずるずると寝の体勢に入ろうとする。

「つていう夢みてさー、いやーん夢の中までおべんきよしてるとか、オレまっじめー」

「ばか。」

なーんだ、夢か。そうだね、かなでが急にそんなまじめなことを話すわけないか。きつとどこかで耳に挟んだ話の夢を見たんだろう。

「ほら、さっさと移動するよ。次は講堂で実技なんだから。ぼんやりしてたらケガするからね」

「やたー、座学より体動かすほうが好き好きー。」

そう言いつつも一向に立とうとしないかなでの手首を掴んでひっぱる。まったく、また遅刻しちゃうよ！

「はーやーくーっ」

「ぐう」

だー、もう！ いっそ捨てていこうか！

こちらにもたれかかって寝始める男を背負い、ずるずると移動を始める。どうしてぼくはコイツに甘いんだろう。もーっ

「えへへーつむぎー、好きー」

自分より頭1つ半も大きい男を背負っていると、そう後ろから言われ、ぎゅーっと抱きしめられる。その瞬間ぼくは掴んでいた手をパツと離し、一人で行くことを決意した。

ゴツと鈍い音をたてて床に落ちたかなでに、ぼくは冷ややかな視線を送る。

「あと2分で始まるからね。サボったら金輪際勉強見てあげないから。」

ガラガラピシャッと扉を閉めて、ぼくは廊下を歩き出す。

はぁぁ、どうしてかなではあぁなのかな。ちっちゃい頃はむしろぼくがアイツに面倒見てもらってたのに、今じゃすっかりアベコベだ。

確かに生来のナマケモノではあったけど、それでも今よりはしっかりしていたはずだ。

「人間って世話を焼かれすぎると退化するのかな……。」

「どうしたのよ、いきなり。」

講堂で基本的な述式の手順を教えてもらい、各自で練習を始める段階になってぼくはぼそりと呟いた。

「あぁ、かなでのこと？　確かにアンタにべったりよねー」

「どうにかならないかな、アレ。」

そのアレ呼ばわりされた張本人はと言うと、委員長とペアになって向こうで練習している。炎を出す訓練のはずなのに、風を呼び起こしては委員長の長髪を乱して遊んでいるようだった。

「放っておいたら自立するんじゃないの？　もうそんな年齢でもないでしょ」

「アイツは別にぼくなんか居なくたって、ホントは一人で何でもできるんだよ！　なのにやる気ないフリしてるだけなんだ。」

腹立ちまぎれに魔法展開を始めたぼくの述式は、あらぬ方向から飛び出し小さな火花を散らす。つとと、あぶないあぶない。

「それじゃあどうしてアンタは自分から離れないのよ。」

「……わかんない。」

チラッと視線を向けると、タイミングよく目があったかなでがニコツと笑ってひらひらと手を振ってくる。ぼくは慌てて顔をそらす。「アタシには互いに依存しあってるように見えるけど。」

「ええ！？」

「フレイム！」

つづりちゃんは支給されたペンを使い、上手にファイヤーの上位

魔法を発動させてみせる。一直線に放たれた火柱は正面に設置さるた吸引玉に引き寄せられ吸い込まれていった。

ぼくは今の言葉のイミを考えて、ぷるぷるっと頭を振る。

「ないないないっ、あんなのただの——そう、ペットだよ！ 気だるげでやる気のない猫！」

「そう？ ならそういう事にしておいてあげる。」

「つーづーりーちゃあーん！」

含み笑いをしながら言う彼女に、ぼくは怖い顔をしてみせる。ぼくがかなでに依存？ ありえないからっ

もやもやした気持ちを振り払うように、ぼくは支給されたペンを大きく振りかざす。体中をめぐる魔力を、ペン先一点に流し込むようにして集中！

火系統のシンボルカラーである赤い光がとまり、教えられたとおりのスペルを空中に描きそして——

「ファイヤー！」

ペンを持つ右手を、左手で包むようにして前方に思いっきり押し出す、すると魔法を発動するとき特有の反動と共に、ペンの先から火の玉がポンツと飛び出した。

やっぱり得意である音式よりは劣るけど、それでもリッパなファイヤーだ！

「やった、ああ！？」

ところがへろへろと酔っ払いのように吸引玉に向かっていった炎は、突然方向を変えてあらぬ方向へと行ってしまふ。向かったその先にいたかなでは、ぼくのファイヤーを引き寄せると器用にお手玉するようにもてあそび始めた。

「あははー」

「かつ、返してよ！」

「えー、やーだー。」

「なんでっ！？」

「だってつむぎが初めて述式で成功したファイヤーっしょ？ 記念

にとつとこーぜ。へなちよこ具合も含めて。」

「こらあ！」

そう言うとかなでは、持っていた支給ペンで何やら炎展開の魔法を書き出し、右手に持っていたぼくの未熟な火の玉にかぶせる様に魔法を発動させた。

何をするつもりかと目を見張っていると、とつぜん床に置いた火の中から一匹のトカゲが飛び出した。しかもただのトカゲじゃなくて、メラメラと小さく燃えていたんだ！

「サラマンダー（火トカゲ）！？」

「ホムンクルスの真似事で作った擬似的なモノだけどねえ。吸引玉に吸わせるよりこっちのが面白いっしょー。」

そばに寄ってきた委員長が、信じられないといった顔でかなでを指さす。その手は少しだけ震えていた。

「な、な、な……なぜ貴様がそのような高度な魔法を使える……！」

「んー？ 見本ならそこらにいっぱいあるじゃん。見よう見まねでやってみたら案外上手くいっただねー。」

そう言ってチロチロと炎の舌を出すサラマンダーを手の甲に乗せ、頭を指の腹でなでている。

確かに校長の作ったホムンクルスならいっぱいあるけどさあ。

「んなアホな……。」

顔面ソーハクと言った感じでわなわなと震えだす委員長の肩を、ぼくはなぐさめるようにポンポンと叩く。

「ごめんね、コイツむかしからこうなんだよ……理論も理屈も分かってないクセに、高度な魔法を時たまやらかすんだ。気にしない方が得だと思う。」

魔導師としての天才はいる、悔しいけど。そう言う点で言うとかなでは間違いなくそのタイプだった。

人並み外れた魔力に、独自性あふれる魔法展開。ぼくが自分の少ない魔力にコンプレックスを持つようになったのも、こいつが原因だったりするんだよなー。今はもうこういう特殊な人物だと割り切

ってるけど。

そんなことを思っていると、様子を見に来たつづりちゃんが、今さっき生まれたばかりの小さな火トカゲを興味深そうに覗き込む。

「触って熱くないわけ？ 火からできてるんでしょ？」

「元々がつむぎが出した威力の低い炎だからねえ。ちよっと加工して触ってもヤケドしないようにした。」

「威力が低いのは余計だよ。」

「あ、でも吹き出す炎はバッチリ熱いから。ほいファイヤーブレス。」

ゴオオ

「熱ィー！！！」

かなでの号令でカパツと口を開けたサラマンダーは、小さな火を吹き出した。そしてちょうど指を伸ばしかけた委員長の手をちよっぴり焦がす。

慌てて冷却魔法で冷やす彼のとなりから進み出て、ポンとサラマンダーをぼくへと渡しとんでもないことを言った。

「はい、お母さん。」

「んなっ!？」

「つむぎの魔力から生まれたんだから、当然デシヨ。」
う、確かに……そうだけど。

両手を目の高さまで掲げて受け取ったサラマンダーを見つめる。
燃え盛る炎は本当に熱くなくて、ほっこりと暖かい熱の塊を手のひらに乗せているような感じだ。

つぶらな黒い瞳で一心にぼくを見つめ、時おり首をかしげるしぐさが可愛らしい、けど。

「だめだめだめ！ 寮でペットなんか飼っちゃいけないんだよ！」

「あらあら、育児放棄ですか。」

「人聞きの悪いこと言うなっ！」

「じゃーオレが飼おうっと。」

そう言っただけで肩に置くと、サラマンダーは安心しきったよ

うにその上で丸くなり寝始めた。なんだか納得いかないけど……まあ、良いか。

「名前はそうだな、チロチロ燃えてるからチロ！」

「……魔法の腕はともかく、ネーミングセンスは無いみたいね。」
ぼそつとつぶやくつづりちゃんの意見には、おおむね賛成だった。

その日の夕方、ぼくらは特にすることもなかったので夕食の時間まで校内を探検することにした。

メンバーは言いだしっぺのかなでと、面白そうだについてきたつづりちゃん、それからぼくだ。

「あら、委員長は？」

「くだらないって断られてさー、来ないと暴露本出してやるって言ったら殴られた。」

「何やってるんだか……。」

校舎の入り口である、正面玄関の扉を背にしゃがんでいたかなではパツと立ち上がると中に向かって歩き始める。

「そいじゃー行こうか。昔からこの城ん中、探検してみたかったんだよねえ」

前にも言った通り、この学校は古い貴族のお城を改造して作った学校だ。たしかに見るからに探検のしごたえがありそうな外見はしている。

かなでの後を追って校舎内に入ったぼくたちは、まず1階部分から探索することにした。

「とは言っても、ここは教室がほとんどだから別に面白いところは無いと思うんだけど……。」

夕暮れ時の独特の斜陽が照らす中、ひとつずつ教室を覗いていく。この時間はみんな自室に戻っているのか人の影はなかった。

そんなことをつぶやいたぼくに、かなでがビシッと指なんか指す。
「甘いなつむぎ。探検家としての名が泣くぜ。」

「いつからぼくは探検家になったんだよ。」

その時、廊下のつきあたりにある大きな鏡を調べていたつづりちゃんが、あら、と小さくつぶやく。

「この鏡、動くわよ。扉になってるみたいね。」

「でかしたつづちゃん！」

ギィ……と、きしむ音をあげて鏡に見せかけた扉を開く。するとそこには地下へと続く薄暗い階段がぼくらを引き込むようにぽっかりと口をあけていた。

「な、なかなか雰囲気あるじゃない……。」「

「とつにゅー！」

「あ、こらっ」

警戒するぼくとつづりちゃんとは違い、かなでは意気揚々とその中に飛び込んで行った。恐れと言うものを知らないのかアイツはっ！

「あーもう、追わなくちゃっ」

「魔具は出しておいた方がいいわね。」

「うん、ライティング！」

ぼくが魔法をかけると、タクトの先端にぼんやりとした明かりが灯る。

つづりちゃんも同じように光を出し、ぼくらは慎重に階段を下り始めた。

どうやら水はけが悪いらしく、ジメジメとした空気と時おりしたたる水が、否が応でも恐怖心をあおる。

「か、かなでー？」

なでー なでー なでー……

おっかなびっくり出した声が石段に反響して下へと吸い込まれていく。返事は……ない。

「どこまで続いているのかしら。」

「そもそも変だよ、あんなところからこんな階段が伸びてるだなんて。……！」

そう叫んだぼくは、前方に扉を見つけて体をこわばらせた。こん

な地下に部屋……？

ギィィィ

警戒しながらも開けると、そこには到底常識では考えられない光景があった。

「なっ……」

視界いっぱい広がる夕焼け空と爽やかな風、とがった塔の先が目線と同じ高さにくつもあるそこは――

「屋上……ね。」

「おかしいって絶対！」

だってぼく達は1階から階段を降りて、絶対地下に居ると思ってたのに、なんで屋上！？

ボーゼンとしていると、今ぼくらが出てきた扉から声が聞こえてきた。

「なんかこの学校は思わぬところに繋がってるっぽいねー」

「かなで！」

頭をかきながらフラリと現れたのは、ぼくたちよりも先に下っていったはずのかなでだった。本当に何がどうなってるの……。

あまり物事を深く考えない性質なのか、つづりちゃんは淡々と言う。

「でもこのショートカット、覚えておくと便利そうね。」

「ん、まあそうだけどさあ。」

「たぶんこのワープゾーンはあっちこっちに在ると思うぜえ。オレ地図つくろー」

嬉しそうなかなでだったけど、ぼくはまだ首を傾げていた。いたい誰が作った仕掛けなんだろう？

「？」

しばらく考えあぐねていたぼくは、ふと何かが聞こえたような気がして空を振り返った。いま一瞬、女の子の声が聞こえたような……

「何かしら。」

つづりちゃんも気づいたらしく、フシギそうな顔をして同じ方向を見つめる。と、空のかなたからそれはやってきた。

——い——やああああああ!!

「!?!」

湖の向こうから、まるで虹を描くようにたくさんの色を引き連れた女の子が、まるで魔女のホウキのように巨大な絵筆に乗って飛んでくるっ

勢いを落とさないまま、彼女はまっすぐにこちらへと——!

「どいてくださいいいいいいい!!!!」

「っうわ!!」

奇跡的にぼくとつづりちゃんの間数十センチをすり抜けた彼女は、凄まじい轟音をたてながらあるモノに突っ込んだ。

つまり、地面に白紙を広げて今まさに地図を作ろうと始めた——かなでに。

「う、うわ——っ!?!」

「こりやさすがに死んだかもしれないわね……」

「かなで!」

もうもうとケムリが立ち込める中に飛び込んだぼくは、凄惨たる光景を覚悟する……のだけど。

「ごめんなさいごめんなさい! まさかこんなところに人が居るだなんて思わなかったんです死んじゃダメですううう!!」

空からやってきた女の子が、泣き叫んでいるその光景にシラけてしまった。

だって、その女の子のひざに頭を乗せて「でへへ」なんて笑ってる幼なじみをみたらダレだってそうなると思うんだ。

こちらの白い目を感じたのか、ニヤケ顔のアホはぼくに向かってひらひらと手を振った。

「……何やってんの。」

「やくとく、やーらかい。」

「ヘンタイ！」

ぼくが一括すると、ようやく女の子はかなでが無事だったことに気がついたようで、ハッと顔を赤らめる（ちなみにパッと離されたかなでの頭は床にゴチンと激突し、今度こそ動かなくなった）

目の下でキッチリ切りそろえられ、床に流れるつややかな黒い長髪。白い衣装はところどころにスリットが入っていてキワドイのだけど、彼女のスタイルのよさにとってもマッチしていてフシギと卑猥さは感じさせなかった。

よっぽど恥ずかしがり屋さんなのか、かぶっていた白いベレー帽で口元を隠した女の子はおそろおそろの切り出した。

「あ、あのう……ここってニキ魔導学校ですよね？」

「全然チガウヨ。ここは国の隠密行動部隊N I N J Aの養成施設。」
「えええ！」

とりあえず適当なウソをつくかなでをもう一回沈めてから、ぼくは慌てて弁解した。

「そうだよ！　ここはニキ魔導学校……の屋上だけだね。もしかしてキミは——」

シャキッと立ち上がった彼女は、慌てながらも自己紹介をしてくれる。

「は、はいいつ、申し遅れました、このたびこちらの学校に入学させて頂くことになりました『いろは』ですう、どうぞよろしく願います。」

「例の遅れてきた新入生ね。空からご登場とは派手なことするわねー。」

つづりちゃんが淡々とそう呟くと、いろはちゃんはショックを受けたようにパサリと手に持っていた帽子を落とした。

「もしかしてアナタは『遅れてきたヤツなんか気合が足んねーよ、人前に出す前にこころでちよっくら絞めてやろーぜ、あわよくば退学に追い込んでやるか。』とかそう言う女番長的なアレですかひい

いい!!」

「だっ、だれが女番長よ!」

めずらしく焦るつづりちゃんの話など聞かずに、彼女の暴走……
もとい妄想は加速していく。

「そして傷心のまま学校を去ったいろはは行く当てもなくフラフラ
と街をさまよう羽目になるのですね。あげくの果てに旅賃が尽き娼
館に売られて慰みものになるのです、ひどいです、ひどすぎますく
っ」

わっと泣き出した彼女の扱いに困ったのか、つづりちゃんはぼく
の方を向き肩をすくめて見せた。なんとかしてよ、の視線におそる
おそる近づいて声をかける。

「あ、あの。いろはちゃん?」

「グスッ……はい?」

「なんで泣いてるの?」

「……なんででしたっけ。」

その返答に、後ろの方でするっとズッコける気配がする。ううん
……なかなかに強烈なキャラかもしれない。

ようやく落ち着いて来た彼女に向かって、ぼくたちは改めて自己
紹介をする。

「ぼくはつむぎ! キミとおんなじ1年生で、たぶん同じクラスに
なると思うんだ。よろしくね。」

「つづりよ、女番長じゃないから誤解しないでよね。」

「かなでー! 人生たなぼたがモットー」

つむぎさん、つづりさん、かなでさん、と小さく微笑みながら呟
いた彼女は、どこかおっとりした口調で聞いてきた。

「同じクラスとは、奇遇ですねえ。もしかしてわざわざお出迎えに
来てくださったんですか?」

「いや、そういうワケじゃ——」

苦笑いして答えるつづりちゃんだったけど、どこかフシギな縁を
感じているようだった。

もしかしたらいろはちゃんに引き合わせるために、この校舎が道をつなげてくれたのかもしれない。なーんてね

そしてぼくはあと一人足りないメンバーのことを言おうとして切り出す。

「それからここに居ないけど、ひびきくんっていう委員長が――」
「居るぞ。」

後ろの――またあのフシギな扉から声がしたかと思うと、今まさに話そうとした本人が出てくるところだった。

やっぱりこの学校、生きてる……よね？

「よくここがわかったね？」

「あれだけ派手なものを残せば当然だ。」

そう言って夕焼け空を仰ぐ委員長。確かに、さきほどいろはちゃんが飛んできた際に残した色のカケラが虹のようにまだきらめいていた。

「さてと、貴様がいろはだな？ 校長が呼びだ。ついてこい」

横柄な態度の委員長は、そう言ってクイツと扉を指し示す。そんな彼を見て、いろはちゃんはぼくにコソツと耳打ちをした。

（ダレですかー あの、ちよっぴりかませ犬臭のする人は。）

（ええと、あれも、ぼくたちのクラスメイトで学級委員長。態度はエラそーだけど、悪い人じゃないから安心してね。）

「だれが偉そうなかませ犬だ！」

よっぽどの地獄耳なのか（音式魔導師はたいてい耳が良いんだけど）ガアッ！ と、ツツコミを入れる委員長に、ぼくといろはちゃんはビクツと肩をすばませる。えへへ……笑ってごまかそう。

「良いか、ここは本来立ち入り禁止の場所なのだぞ、今回は見逃してやるからさっさと寮に戻ってろ。さ、校長がお待ちだ。行くぞ」

そう言い残しいろはちゃんを連れて行く背中を見送って、ぼくたちはそろって顔を見合わせる。

「校長室、ねえ。」

「いいねーいいねー、どんな部屋だと思う？」

「やっぱりみんなも興味あるよね？」

とーぜん！ とばかりにうなずいた二人の跡に続いて、ぼくは委員長が消えた扉へと飛び込んだのだった。

「ちょっと、ヘンなところ触らないでよ」

「ぼくじゃないよおー、かなで！？」

「オレでもにゃーっす。だいたい身動き取れないのにムチャ言いなさんなって」

フシギな扉へと飛び込んだぼくたちを待っていたのは、真っ暗で柔らかな空間だった。どうやらどこかの衣服が大量に詰め込まれたクローゼットにつながったみたいだ。

なんとかコートをかき分け出口を探そうとするのだけど、よつぽど広いクローゼットなのかなかなか明かりは見えてこない。

「ダレか明かり」

「あ、ちょっと待って。これかもしれない。」

ぼくの手のひらに何か固いものが当たり、思いっきり押し開けると――

「「「うわあああ！！」」」

まるでなだれに巻き込まれたかのように、ぼくたち3人はコートにまみれてクローゼットから流れ出た。ううう、あごぶつけた。

立ち上がってみると、そこはとても変わった部屋だった。どうやら応接間のように、深い緋色のソファが机をはさんで向かい合わせに置かれている。

そのセットだけならまだまともな部屋なのだけど、部屋中に妙なオブジェと言うか魔導器がところせましと置かれていたのだ。

「こりゃまた……ずいぶん趣味にあふれた部屋ねえ。」

青と緑と赤の水晶球がゆったりと上下する筒の前に立ったぼくは、首をひねってその向こう側を覗き込む。そこには鏡が1枚かけられていて、覗き込んだ瞬間、向こう側のぼくがベーツと舌を出してケ

タケタと笑いだした。な、何に使うんだよアレ……。

「すげー！ ここにある物つかえば、この学校中をひっくり返すくらいイタズラできるぜ！」

「しなくてよろしい！」

瞳を輝かせ始めるかなでに釘を刺してから、辺りの……まるで水のようにすべらかなコート山の山を見下ろす。クローゼットから流れ出たそれは、部屋中の隅まで広がっていた。

「あーあー、部屋がぐちよぐちよだよ。どうしよう。」

「押し込めば良いだけの話よ。良い？ セーのっ」

つづりちゃんの合図と共に、ぼくたちは一斉に部屋の隅からコートを押し始める。ようやく収納しおえた頃には、汗だくになっていた。

「ふう、ようやく片付いたわね。」

「なんとかこれでバレずに済む——」

ここでハタと気がついたぼくは部屋を見回す。

「どうしたの？」

「ここ……出口は？」

そう、ぴつちりと壁際に隙間無く置かれたオブジェたちがあるだけで、この部屋には窓も扉もなかったのだ。

その事実直面したぼくらは、軽いパニック状態に陥った。

「ど、どーすんのよ、まさかまたこのクローゼットを開けてワープするしかないっていうの？」

「でも、そうしたらまたコートが流れ出ちゃうよっ」

「それでもしなきゃ、アタシたち閉じ込められたも同然じゃない。」

「えええーっ」

キミもなんかアイディア出してよ——と、かなでの方を見たぼくはギョツとして目を見張る。その腰から上半分が、さきほどの笑い出す鏡に埋まって向こう側に行ってしまったのだ。

「ぎゃー！ かなでがそっちの世界に——」

「つむぎ……それちよつと御幣があるわよ……。」

「いやーンドキドキ初体験。」

いつもどおりのおちゃらけ声と共にかなでが体を引き戻すと、その胴体はキッチンとつながっていた。

驚いて駆け寄ると、鏡の表面が波紋を打ったように波打っている。おそろおそろ指をつっこむと、ちゃぷんと言う音と共に手首まで埋まりズブズブとさらに引き込もうとしてきた。

「ひゃ、どうなってるの？ これ」

少し抵抗して引き戻すと、難なく手首は戻ってくる。手を握って開いてみても特におかしいところはない。

その様子を見届けたつづりちゃんは、腕を組みフンツと気合を入れてから、堂々と宣言した。

「こういう仕組みでも良いわ。行くわよ」

「ええっ!？」

「ここで立ち往生していても時間の無駄じゃない。夕飯の時間に間に合わないわよ。」

それはいやだ。いやだけど——!

「でもどこにつながってるか分かったもんじゃないよっ」

「はいここでドーン!」

バンッ

「「うわあああ!？」」

とつぜん後ろで爆発が起こり、ぼくたち3人は問答無用で鏡の中に倒れこんだ。べちゃつと床に投げ出されてから、怒鳴り声をあげる。

「かなでーッ! 爆破魔法を至近距離で使うなって、いつも言うてるだろー!」

「てへ、ごめん。」

可愛らしく舌を出すバカの頭をひとつはたいて、ようやく体を起こそうと力を入れる。

「ところでここはどこ——」

そこでようやくぼくは、目の前に黒い人物が居ることに気がつい

た。わなわなと震え、今にも爆発しそうな――委員長だ。

「きさまら、こんな、ところで、いったい、なにを、やっている？」

「こ、こんなところ？」

妙に単語でくぎってしゃべる委員長に言われ、ぼくたちは辺りを見回す。

さっきまで居た開かずの応接間とよく似た雰囲気だけど、それよりも広くてすこしは片付いている。中央に置かれた大きな机がドーンと占拠するその部屋は――

「校長室だッ！！」

そりゃぼくたちは校長室へ行ったいろはちゃんたちを追ったのだから、当然ここについたのはそう言う意味では成功なのであって、でも本当はバレないようにこっそりと覗くのが目的だったのであって……。

「いいんちよおお！！ もう限界だよ」

「体罰で訴えるわよ、エセ正義者！」

「やかましい！ 当然の罰だと思えっ」

すでに数十分正座をさせられているぼくたちの足は限界に近かった。も、もう感覚がないよ……二度と立てないんじゃないの？ これ

「……アンタなんともないの？」

息もたえだえのつづりちゃんが、一人涼しい顔をしているかなでに問いかける。と、こちらに振り返ったヤツはにやあと笑って指を振った。

「こういう時の魔法デシヨ」

「あっ、かなでずるい！」

「貴様あ！」

どうやら空気のクッションをつくって足の間に入れていたらしいかなでは、必殺の委員長チョップでスパーンとはたかれる。

それからしばらくして、ようやく許されたぼくたちは床にへばり

きってダレていた。

「も、だめ。」

「同じチームメイトによくやるわ……。」

「同じチームだからこそ、だ。身内に厳しく他人に優しくは私の信条だからな。」

「チッ、人道者きどりが……。」

カチャ

「お？ 何事じゃ」

屍になったぼくらを見計らったかのように、奥の部屋からいろはちゃんを伴った幼女、もとい校長先生とヒノエ先生が現れる。

彼女たちはぼくたち3人を見ると驚いたかのように一瞬とまどう。そこにすかさず委員長が提言をした。

「お疲れ様です。コイツらは不当に侵入しようとしたネズミどもですが、すでに十分罰は与えておきました。」

「何があったかは……想像に固くないわね。」

悟ったらしいヒノエ先生が、ハーツと長いため息をこぼす。

その横でカラカラと笑った校長が、相変わらぬのしゃがれ声で話し出した。

「よい、よい。どうせおんしらも呼び寄せるつもりだったのだ。手間が省けたと考えるべきであろう。」

「え？」

「アタシたちを……ですか？」

「ぎゃんっ」

ちなみに最後のは立ち上がろうとして失敗したかなでの断末魔。

ああブザマ……ああならないように気をつけて、っと。

よろよろとようやく立ち上がったぼくたちに、校長先生はニマあとと笑う。

「3組のたんぽぽ組か。まあ個性的なメンバーがよくも集まったものじゃ。」

「たんぽぽ……組い？」

なにやらものすごく平和なチーム名が聞こえたような気がして、
ぼくらは顔を見合わせ——とりわけリーダー格である委員長を見つめる。

「委員長、たんぽぽ組って」

「わっ、私は知らんぞ！」

あせったように否定する委員長の横で、ヒノエ先生が腕を組みながら話し出す。

「チーム名はこちらで振ってるのよ。他も似たようなものだから安心なさい。」

「む、なんじゃ。それではまるでワシが付けたチーム名に不満があるようではないか。」

「そう聞こえたなら失礼。」

チーム名に関しては先生もぼくたち同じ気持ちなのか、どこか遠い目をする。たんぽぽ組、たんぽぽ組か……。

その場の雰囲気を変えるようにおほんと咳払いした校長先生は、左右色違いの目でぼくたちを順番に見回した。

「多才な式使いひびき。入試実技トップのかなで。砂漠の民の秘蔵っ子つづり。虹色使いいろは。そして、純血の音式魔法つむぎ。」

「！」

「こうも色濃いメンバーが自然と集まるとは、因果かのう……。 」

ほうっと吐息をついた校長は、ふいにキリッとした表情を引き締めたかと思うところ忠告をしたのだった。

「良いか、おんしらには期待をしている。じゃが、くれぐれも気を抜いたりすることのないようにな。」

「……。」

「出る杭は打たれる。覚えておくことじゃ」

「結局、校長は何を言いたかったんでしょおか」

校長室から帰る途中、無言だったみんなの雰囲気を変えるように、

いろはちゃんは言った。

同じことを思っていたばくも、応えるように続ける。

「そうなんだよね、チームを組んだとしても、結局他のチームとやることは一緒でしょ？　ダレが杭なんて打つの？」

「優秀な魔導師となることの、何がいけないと言うのだ……？」

ブツブツと呟きながら考え込んでしまふ委員長が、一番深刻に考えているようだった。

ところが残りの二人は生来の気質なのか、明るくこう言っている。

「まあまあ、考えたってしかたねーよ。オレたちが悩んだところでトラブルは向こうからやってくるのさ。」

「トラブル呼び込んでるのはアンタな気もするけど……アタシも概ねその意見に賛成ね。考え込んだって仕方ないじゃない。」

まあ、そう言われてみればそうだね。校長先生も、わざわざこれから学ぼうって時に水を差すようなこと言わなくても良いと思うんだけど。

ふとさきほどの校長の言葉をリピートしていたばくは、あることに気がついていろはちゃんの方を向く。

「ねえ、いろはちゃんは色式使いなんだね。」

「ええ、僭越ながらそう名乗らせて頂いております」

「それじゃあ校長が言ってた『虹色使い』って何？」

そう聞くと彼女は実際にごらんに入れますよと、右手を前にかざし魔具を呼び出した。

「color！」

白い光が集まり、彼女の手にはさきほど飛んできた時に乗っていた絵筆が現れる。パシッと掴んだ彼女は、悩ましげな体を盛大に揺らしながら空中に絵を描き始めた。

「えい、やあ、それっ」

もうすでに暗くなった回廊に、いろはちゃんが動かす筆の軌跡に沿って様々な色の魔力塗料が光を帯びる。

3分くらい描いた後、軽く汗をかいた彼女は振り返ってニッコリと笑った。

「できましたあ。」

「へ？」

虹色の光跡は、しばらくたつと端から消えてしまうので、今は何の痕跡も残さない廊下がそこにあるだけだった。これが……色式魔法？

「ちょっとどういうこと？ まさか今踊ったのが魔法だとか言うんじゃないでしょうね。」

「違いますよお、それじゃあ踊式じゃないですか。」

「なんでも良いが私は疲れた。先に帰らせてもらうぞ。」

「あ、委員長さん——」

どこか疲れた様子の委員長が、そう言って一歩踏み出した時、悲劇は起こった。

突然空気を引き裂くような音が鳴り響き、炸裂した雷が委員長を襲ったのだ。奇襲はそれではとどまらずに、炎・氷・風などありとあらゆる攻撃魔法が、まるでボロボロのようにあっちこっち跳ね回る委員長の体に襲い掛かる。

「すげえ……」

「う、うわぁ——！ 委員長っ!？」

さすがのかなでも、この時ばかりは引いたようにその光景を見つめ、ぼくはと言えはどうすることもできず一方的な拷問が終わるのを待つことしかできなかった。

悲劇は何の前触れもなく唐突に止み、委員長はかろうじて防御魔法を使っていたのか、ギリギリ生還した。

「あのー、大丈夫ですかあ？ 人の話を聞かずに行ってしまうからですよー」

「いいいいろは……お前なにをした。」

「ですからあー、色式魔法をお見せしたまでですよ。」

ここでポンと一つ手を叩いたつづりちゃんは、思い出したと小さ

く呟く。

「色式ってのはすごく持続性があるって聞いたことがあるわ。つまりワナとか時間差での攻撃にすごく特化した方式なのよね。」

「はい、その通りです」

「その分、威力は低めになってしまいうらしいんだけど、いろはの『虹色』を使えばその問題すらカバーできるってどこかしら。」

その推理にいろはちゃんはパチパチと無邪気に手を叩いた。

「大当たりです、つづりさん。頭良いんですね」

「いやなに、ちょっと考えたらすぐ分かることよ」

照れたように頭をかくつづりちゃんと賞賛を贈るいろはちゃん。そんな和やかな光景をよそに、ぼくは盛大に叫んだ。

「良いから委員長医務室に運ぶの手伝ってよ!!」

どこから拾ったのか、木の枝で委員長をつついていたかなでは、ぼくの発言を聞いてそりゃムリだよ。と呟いた。

「だってこの廊下いっぱいに張られた魔法陣、どうやって越えるの？」

「あ」「あ」「あー……」

2章『初めての実習〜聞いてないですよ〜』

柔らかいクリーム色の上着を頭からかぶり、深い緋色のチェック柄のスカートホックを横で留めたぼくは、黒いハイソックスの上から茶色の革靴をはいてトントンと床に打ち付ける。

最後にクローゼットの裏に取り付けられた鏡の前に立ち、赤いリボンが曲がってないかどうか確認する。うん、これでよし！

「タグがついたまんまよ〜」

「えっ、うそ!？」

乾燥魔導器で髪をぶおーっと乾かしていたつづりちゃんが、笑いをこらえたように言う。ぼくは慌てて取ろうと手を首の後ろにやるのだけど、手探りではどうにも上手く見つけられなくて空を掴んでしまう。

「つむぎってば、しっかりしてるようでどっか抜けてるのよねえ。」

「うぐっ、ありがと……。」

タグをパチンと取ってくれたつづりちゃんはそのまま隣に立ち、自分も鏡に姿を映す。なのにせっかく付けていたリボンをほどいてしまった。

「やっぱりアタシはネクタイの方が合ってる気がするわ。変えてくる。」

「なんだか新鮮だね、制服だなんて。」

「そもそも今までが変だったのよ、学生なのに私服だなんて。」

手早くネクタイに取り替えた彼女は、魔具を無造作にポケットへつつ込むと、かちやりとドアを開けた。

2章『初めての実習〜聞いてないですよ〜』

廊下に出ると、同学年の女の子たちがみんな同じ服を着て、きやあきやあと感想を言い合っているところだった。やっぱりみんなも

嬉しいんだね。

ところでどうして1ヶ月経った今になって、ようやく制服を着たのかと言うと――

「おはよーさん、つづり、つむぎ。」

「おはよ。はのい」

「おはよーっ、いよいよ実習だね!」

そう、今日が初めての実習だからなんだ。

普段の授業や生活はラクな私服で良いのだけど、実際に外に出て実習を行う際は、ニキ魔導学校の生徒としてキチンと立場を表すイミで制服を着なければいけないと言う校則がある。

『着なければいけない』とは言ったけど、憧れだった可愛い制服に袖を通したことで、ぼくたち女の子のテンションは俄然あがると言うものだ。スカートなんて普段はかないけど、似合ってるかな? えへへ

制服にご機嫌なぼくたちとはウラハラに、はのいちゃんはイラついているようだった。横に流した黒いショートカットと理知的な緑の瞳が印象的な彼女は、腕を組むと足を床に打ちつけ始めた。

「ねえ、いろは知らへん? あの子ったら何やってるんかなあ。」
遅れたら私が怒られるわー。」

「いろはちゃん?」

「まだ部屋に居るんじゃない?」

あやめ組のチームリーダーでもあるのはいちゃんは、しびれを切らしたかのように歩き出した。そして問題の部屋の前まで行くと猛然と扉を叩き出したのだった。

「いろは! いーろーはっ! また寝てるん!」

――はのいさーん……

しばらく応答がなかったのだけど、わずかに開いた扉の向こうから情けない声が漏れ出てきた。あきれたような顔をしたつづりちゃん、後ろから進み出る。

「一体どうしたっての……いつ!」

続けて入ったぼくたちも、部屋の中の光景にあぜんとする。衣服が錯乱する中で、下着姿のいろはちゃんが、途方にくれたかのように床に座り込んでいたのだ。

「きつくて、制服が入らないんです〜！」

「あ、そういうこと……。」

がくつと脱力したぼくたちは、ことの次第を理解した。

つまり、用意されていた制服ではカバーできないほどに、いろはちゃんの体のラインがメリハリ体型だったとか。そういう………うらやましい。

じぶんのぺったんこ胸を極力みないようにして、ぼくはそこらへんに散らばっていたカーディガンを取り上げた。

「とりあえず今日はこれを羽織って行こうよ。制服は後で先生に言っ
て変えてもらおう。ね？」

「まったく、自分どこのお嬢様やねん。良いモン喰いおってからにこの胸が！ うらっ」

「ひやああ、やめっ、やめてください〜」

ようやく教室へと移動する途中の廊下で、はのいちゃんはいろはちゃんの胸を後ろから猛烈にもみ始めた。手の中のおっぱいは何かの生き物のように動き回る。

「あっ、ああんっ」

「ここか？ ここのかア？」

「ちょっとアンタらいーかげんにしなさいよ。」

ぼくの横を歩いていたつづりちゃんが、ハアッと盛大なため息をついてヒートアップしていく二人を止める。クイと指をさす先に居たのは――

「おはよーっす、いやあ朝から女の子はカゲキだねー良いモン見た。」

「な、なに、なにをして……。」「

ぼくらと同じように真新しい制服に身を包んだ、かなでと委員長だった。

かなではいつもどおりにヘラヘラと笑っていたのだけど、問題は委員長の方だった。その鼻からは赤い物がタラ〜と……

鼻血を吹き出しながらブツ倒れた彼を覗き込み、かなでとつづりちゃんのんびりと言う。

「あれー、委員長には刺激が強すぎたか。」

「ウブねえ……。」

こんな調子で大丈夫なのかなあ……。

「ムツツリいいんちょー、血い足りてる？ レバー食べる？」

「うるさい黙れ！」

数十分後、ぼくたち1年は全員講堂に集められて整列をしていた。ぼくを挟んで男子二人がそんなやり取りをしていると、どうしても気になってしまうことがある。

「委員長もやっぱり、おっぱい大きいほうが好き？」

「んなっ……違うぞ！ 私は断じてそのようなことは——」

「あーら男ですもの、当然大きい方が好きなんじゃない？」

と、委員長の向こう側からつづりちゃんも口を挟んでくる。その表情はニヤニヤしていてどこか楽しそうだった。ぼくは視線をそらして淡々と言う。

「そっかー、やっぱりそうだよねえ。」

「オレはちっちゃくても好きー」

「かなでは女の子ならダレでも良いんじゃないの……。」

そんなやりとりをしていると、壇上に1年主任のエクス先生が現われてこれからの注意事項について話し出す。

実習は学校の外に出て行うつて聞いているけど、具体的にどんなことをするんだろう。

『みなさん、おはようございます。いよいよ実習の日がやって来ま

したが、焦ることなく、普段の実力を存分に発揮できるよう頑張ってくださいね。』

はい。と返事をしたのを確認してから、エクス先生は穏やかに続ける。

『現在このニキ魔導学校は、学費と言うものを皆さんから徴収していません。それは一重にどの子にも平等に学ぶ機会を与えられるようにとの考えからです。』

そうなんだよね、この学校は入学試験さえパスしちゃえば、あとは授業費も寮での食事代も何から何まで全部タダなのだ。だから両親が居ないぼくのような者でも安心して学べるのだけど……確かによく考えてみると、どこからお金が出てるんだろう？

『この学校の運営経費は主に3つ。1つ目は国からの援助金。2つ目は卒業生からの寄付。そしてもう最後の一つが在校生が学外からの依頼で報酬を頂く実習なのです。』

そっか、いくらタマゴとは言えぼくたちはリッパな魔導師だ。そのチカラを有効活用して、自分たちが学ぶために必要なお金を稼いでくるのが、実習なんだ。

『あなた達はいずれこの学校を卒業し、魔導師としてそれぞれの道を行くでしょう。その練習と言う意味合いも含め、今日一日頑張ってきてください。』

よーっし、どんな依頼なのかはまだ分からないけど、がんばるぞ！

「――と、思ってたのに。なんなのよこの仕事は！」

つづりちゃんの叫び声が通りにこだまし、辺りにいた人たちが何人か振り返る。ぼくはため息をついて溝のドブを掻き出した。

「しょうがないよ。初めてなんだからこんなものだよ。たぶん」

ぼくたちたんぽ組の初めての依頼実習。それは、学校のすぐそばにある『ノザの武器屋』の大掃除だった。

ネクタイを頭なんかにかいて、どぶさらいをしていたかなだが、

クワを使って泥を掻き出しながらしゃべりだす。

「オレさー、なんかこう、暴れるマモノ退治とか、ダンジョンにもぐって宝石をとってくるとかそんなだと思ってたんだけどなあー。うりゃっ」

「どわっ、静かに掃除せんか！」

跳ね跳んだ泥に顔をしかめた委員長は、ワケ知り顔で説明してくれた。

「なんでも1年生の初実習は、毎年この街の雑用らしいな。日ごろ世話になっている学校なりのお礼で、頂く報酬も気持ち程度なのだ。」

確かに周りを見回せば、どこのお店にも見知った1年生たちが働いている。ボランティアみたいな労働だけど、たまには良いかもね。しばらくしてようやく掃除は一段落ついた。店の前はピカピカだ！ うーん気持ちがいいね。

「後はゴミを処理するだけね。」

「最後ぐらい魔導師らしくいこーぜー」

めずらしくかなでの意見にみんな賛成だったのか、それぞれの魔具を取り出し構え、一斉に発動させる。

「「「ファイヤー！」」「」」

四方向から撃たれた火球は、狙いたがわずゴミの山へと命中しメラメラと燃え始めた。

見ているだけで気持ちが晴れていきそうなほどによく燃える火を見て、かなでがふところからサラマンダーを取り出し放り込む。

「チロ、ごちそうだぞー」

火から産まれたチロは、やはり火を食べるらしく燃え盛る炎の中を嬉しそうに飛び回っては自らも火を吹き出していた。

「お、なんだなんだ。ずいぶん景気よくやってんなア」

そういつて店の中から出てきたのは、このお店の主ノザさんだった。大きな体に茶色い髪とアゴひげは、街の子供にひそかに「クマ」と呼ばれている……事を本人は知らない。

ぼくは見上げるような大男である彼の下で、元氣よく手をあげ自分の存在を主張する。

「ノザさん、終わったよ。」

「おう、つむぎ。ご苦労さんだったな、他のヤツらもちよいと茶アでも飲んでけや。」

ガッハッハと豪快に笑う彼につれられて、ぼくたちは店の中に入る。

店内は2階建てになっていて、1階が売り場、2階が工房となっているんだ。そして店の裏手には実際に武器を触って試せる練習場がある。と、知っているのは、昔かなでと忍び込んでこっぴどく怒られた経験があるからだったりする。

反省したぼくたちはそれからしょっちゅうここに出入りをして、ノザさんに基本的な武器の扱いなんかを教えて貰ってたりしたんだ。中を初めてみたつづりちゃんと委員長は、もの珍しそうに辺りの商品を眺め回す。そんな態度にノザさんは嬉しそうにうんうんと頷いた。

「どーだどーだア、俺様特製の武器は美しいだろう。」

「ほーんと、その外見には似合わないくらい、繊細な武器つくるよなー」

「かなでテメエ」

「いだだだだ。」

ヘッドロックをかけられ、ぐりぐりされるピンク頭を見ていた二人は軽く笑う。どうやら店の雰囲気が入ったようだった。

とりわけつづりちゃんは近くにあった槍を手にとり振ってみせる。その立ち振る舞いはどこか慣れているように軽やかなものだった。

「故郷では見たことない武器ばかりでとても興味深いわ。」

「ほう、讓ちゃんどこから来たんだ？」

「西の砂漠、クローゼです。」

その答えにノザさんはほう、と小さく呟いて目を輝かせる。あ、やばい火がついちちゃった……。

「閉ざされた砂漠の民族か。そりやずいぶんと珍しい形の武器があるんだろうなア。なあ少し詳しく話を聞かせてくれねーか。何、ちよつとばかり形状と使い方を聞くだけだ。」

「え、ええ……良いですけど。」

喜び勇んだ武器マニア、もといノザさんは、小躍りしながら紙とペンを持ってきて聞き取りを始める。あーあ、ぼく知らないつと。

「いーんちよつ、委員長！ 模擬試合しよーぜ。なんか使える？」

「それはいいが放っておいていいのか？」

「ああなったら1時間は離してくれないよ。つづりちゃんには悪いけど待つしかないと思うなあ。」

幸い一生懸命掃除したおかげで、時間に余裕はあるみたいだし。久しぶりに手合わせしても良いかもね。

そう考えながらぼくは胸の高さくらいの長剣をタルから引っぱり出す。あつたあつた、まだ売れてなかったんだ。

「？ どうしたの？ 委員長」

「……お前がそれを使うのか？」

「そうだよ。ぼく体ちっちゃいからさー、このくらいじゃないと相手に届かないんだよね。」

「いや私が言いたいのはそういうことでは無くてだな……。」

困惑顔で魔導杖をひっぱりだす委員長と、腕の長さくらいのショートソードを持ったかなでを引き連れ、裏の練習場へと出る。

陽がさんと降り注ぐフィールドは、真ん中に白いタイルが敷いてあって試合の場になっている。試し切り用の藁やら丸太をすり抜けて、ぼくたちはタイルの上にあがった。

「それじゃあ、まずは肩ならしにぼくとかなでやって良い？」

「構わないが、なぜ貴様ら杖ではない——」

フィールドの両端にたつてぺこりと頭をさげたぼくらは、視線があったと同時に地面を蹴った。

「全力でいくよっ」

「いっくぜえー！」

キン！

真正面から振り下ろしたぼくの長剣を、両手で支えたショートソードで受け止めるかなで。上からの体勢もあり、そのままチカラ押ししようと思ったのだけど、ふいと重心をずらされて横に抜けられる。

「っこの！」

すり抜けざまにパツとしゃがんで足払いをしようとするのだけど、ひょいと飛び越えられ背後に回られてしまう。

肩口を狙って素早く繰り出される突き。それをなんとかひねって回避したぼくは、長剣の重さを遠心力に利用して背後に振り上げた。
ブンッ

「どっわ！」

それは惜しくもヤツの前髪を少しだけ切るにとどまり、ピンクの髪が数本空中に舞った。

「きゃー、やめてー、髪は女の命よー！」

「そのうっとおしい前髪を切ってあげるって言うんだから感謝しなよっ」

切り込んでくるのを受け止めながらそんな会話をする。

しばらくその状態が続き、このままではラチが開かないと思ったのは向こうも同じだったのか、同時に踏み込んだぼくたちは力の限り相手に向かって飛びかかっていった。

「「っらあああ！！」」

互いの得物がぶつかり、澄んだ金属音を響かせる。

衝撃に耐え切れずに手元から吹き飛んだ2本の剣は、少し離れたところに落下した。

しばらく荒い息を整えていたぼくらは、ふっと気を抜くとドサツとその場に腰を下ろす。

「あー、まアた引き分けかよー。」

「0勝0敗84引き分け、だね。」

「オレ100戦までには、ぜってー決着をつけたい！」

「ハイハイ、頼むから朝駆けの奇襲はそれに含めないでよね。」

「善処する。」

「改善しろ！」

そう言いながら立ち上がって制服のホコリを払う。見た目と違って頑丈に作られているのか、あんなに激しい戦闘をしたのにも関わらずキズは一つも付いていなかった。さすが実習用だなあ。

さてと、体もあったまったことだし、次は委員長と――

「あれ？　どうしたの？」

ところが委員長は、フィールドの外で口をポカンをあけたまま放心していた。何度か呼びかけると、ようやくハッと意識を戻してこんな事を言ったのだった。

「貴様ら魔導師を目指しているのでは無かったのか！　何なんだ今の肉弾戦は……冒険者顔負けでは無いか！」

「でへへ、そんなに褒められると照れるなア。」

「褒めとらんわ！」

「ええ、そんなことないよ。そりゃ、ちっちゃな頃から遊び半分にやってきたから、少しは型が身についてるかもしれないけど……。」

何よりノザさんはもつとすごいのだ。ぼくたち二人がかりでかかって30秒でノされちゃうから。

「いいんちよもエリートなんだから、地元でこのくらいやってたんじゃねーの？」

「私は魔導師を目指しているのだ！　武器なぞ杖しか扱ったことはないっ。いいか、私は魔法を使わせて貰うからな！」

そう言いながらフィールドに上がってきた委員長は、杖を水平にぴたりと構え自己強化の魔法をかける。

「レインフォースッ」

白い光がらせん状に委員長の体を包む。その様子を確認したぼくたちは、ニッと笑って吹き飛んでしまった武器の元へと駆け出した。

「……ずいぶんとまあ、派手にやったわね。」

「あ、つづりちゃん。終わった？」

そろそろお日様も傾いて影が伸びてきた頃、店の中から出てきたつづりちゃんは顔を引きつらせながら練習場を見回した。

なんせタイルはひび割れ、試し切りの丸太はめちゃくちや。辺りの地面はえぐれたような跡まで残っている。

ぼくは剣を支えに座り込んでいたのだけど、男子二人は完全に床に伸びていたのだから、その反応も当然だったかもしれない。

「爆発音が聞こえた辺りからアタシたちは気にするのをやめたわ。」

「こりやまた……」

「アハハ、最終的に三つ巴戦になっちゃってさー」

よいしょっと立ち上がって剣の手入れをするためにボロきれを取ってくる。血とかはついてないけど、泥まみれだったからね。

「なんでか委員長はかなでばかりに攻撃するし、かなではかなででぼくを盾にしようとするし。結果的には二人が相打ちしたんだけどね。」

刀身に顔が映りこむようになったのを確認した後、うんと一つ頷いてノザさんに渡す。

「練習場こんなにしちゃってゴメンナサイ。休みになったら修理しに来るから……。」

「良いさ、どうせ改装しようと思ってたんだ。ちょうどいい」

「そうなの？」

「ああ、返って手間が省けた。」

ニイツと笑ったノザさんは、そのおっきな手でぼくの頭をぼふぼふと撫でる。

「また来いよ。お前さんとかなでが入学してから街は火が消えたみてーに静かなモンだ。」

「うんっ、ありがと——あぁっ!!」

ぼくはその時、とんでもない事に気づいて思わず大声を上げてしまう。びっくりしたつづりちゃんが眉を寄せながら聞いてきた。

「ちょっとどうしたのよ。」

「火！ 消してない！」

「――やばっ」

掃除の時にゴミを燃やしたっきり、そのまま表に放置しちゃった！

慌てて表の通りに駆け出たばかりは、そこでとんでもないものを見ることになった。

「……チロ？」

通常の何倍もの大きさになった火トカゲが、スウスウと小さな寝息を立てていたのだ。まるで中型犬のようなサラマンダーは、通りかかった子供たちに大人しくなでられていた。

のんびり店から出てきたかなだが、頭を掻きながらあっさりと言う。

「あちゃー、火を喰いすぎたかな。火事にならなくて助かったけど。」

「これ、戻るわけ？」

つづりちゃんがチロを抱えると、その柔らかいお腹がぷよぷよとゆれる。よく見ると食べた炎がまだ中で燃えているようだった。

受け取ったかなでは、その大きなトカゲを頭に乗せるとのほほんと笑う。

「しばらくはダイエットだなあ、チロ。」

あはは、と和やかな雰囲気ですべていたぼくたちだったけど、ふいになり始めた学校の鐘の音にビクリと体をこわばらせた。

「おう、もうそんな時間かア、おまえら戻らなくて良いのか？」

まだ気絶してる委員長をぶらさげ出てきたノザさんが、軽い調子でそう呟く。

そういえば、周りの店で働いていたはずの1年生がとくに居ない！

「戻ろうみんなっ！」

「あいさあ」

「委員長、起きなさいよっ」
そんなわけでぼくたちは、挨拶もそこそこにダッシュで学校へと
戻ることになったのだった。

3章『遺跡調査く潮騒の調べく』

その日は特に宿題もなくて、就寝までの時間ぼくたちたんぽ組のメンバーは談話室でまったりしていたんだ。暖炉の中に陣取ったチロの、ゆらゆらと揺らめく炎を見つめながら委員長がいれてくれた紅茶をすすする。

「おいしいねえ」

「実家から送ってきたものだがな、私一人で飲むのは味気ない気がしたのだ。」

「クッキーは！？ ケーキは！？」

「自分で用意しろっ」

スコーン！ と、チョップをかまされるかなでを横目で見て、つづりちゃんがとろんとした目つきで言う。

「食堂にでも行ったら何かあるんじゃない？ よろしくね」

「えええオレが行くの？ こんな夜中に襲われたらどうするの？ かなちゃん怖くていけなあい。」

シナをつくり、体をくねらせる気持ち悪い男をぼくたちは完全スルーする。もう1ヵ月半も経てばみんなも慣れてくると言うものだ。反応がないことに気づいたかなでは、ぼりぼりと頭を掻くと今度はごく普通の調子で言った。

「それでは行ってきます。チロ、おいで。」

3章『遺跡調査く潮騒の調べく』

呼ばれた火トカゲが、のそのそと暖炉から這い出てくる。例のノザさんところでの事件から1週間たち、だいぶ小さくなったとは言えまだまだトカゲとしては大きい。そのチロを定位置の頭の上に乗せ、かなでは鼻歌なんか歌いながら下への階段へ消えていった。

姿が見えなくなったことを確認してから、委員長がどうにも気に

なるといった顔つきでぼくにこんなことを聞いてきた。

「以前から思っていたのだが、ヤツの一家はみんな『ああ』なのか？
だとしたらものすごい一家だろうな。」

「あ、それはアタシも気になってたわ。おしゃべりなクセに意外と自分のこと語らないのよねえ、アイツ。」

「ん？」

カチャリとカップをソーサーにもどしたぼくは、小さく首を傾げて否定する。

「かなでの家は3人家族だけど、お父さんもお母さんもすごく大人しい人だよ。言っちゃ悪いけど影が薄いつていうか、印象に残らないご両親だったような気がする。」

気がするっていうのは、そもそも家にお邪魔すること自体がそんなに無かったのだ。いつも遊ぶ場所は街中だったし、ご両親はあんまり社交的とは言えず近所との付き合いも無かったみたい。

遠い昔に一度だけ見た記憶があるのだけど、顔に霧がかかっているように思い出せないのだ。まあ小さい頃の記憶だからしょうがないと思うけど。

「意外ねー、てっきり家族そろってバカ騒ぎしてるのかと思ってたわ。」

「遺伝子のイタズラとは奇妙なものだな。」

「小さい頃によく頭ぶつけてたから、それが原因かも。」

なかなかみんなヒドいことを言って盛り上がる。その時だった。

——ボンッ

「なに？」

下の方で爆発が起こったかのような音が聞こえ、ぼくたちは一斉に顔をあげる。

そのくぐもった音は断続的に聞こえ、しばらくしてからようやく止んだ。

異変を感じたのか、部屋にいた他の子たちも顔を出して何事かと様子を伺い始める。

そんな中、つづりちゃんがみんな考えていたことを代表して言った。

「ねえ、今の食堂の方からじゃなかった？」

「方向的にはそうだが……まさか。」

「行ってみようよ。」

悪い予感がしたぼくたちは駆け足で1階の食堂へと駆け下りる。

大広間へとたどり着くと、扉の前ではすでにたくさんの上級生たちが集まって何事かとざわめいていた。

「通してくださいっ！」

人ごみを押し分け扉を開けたぼくたちは、部屋の隅——隣の給仕室へと続く扉の前で呆然と立ち尽くすピンクの頭を見つけた。

いや、扉というのはちょっと間違いだ。なぜならそこにあったはずの扉は、跡形も無く吹き飛ばされていたから。

「かなでっ！」

魔具の羽根ペンを手にたたずんでいるかなでに飛びつくと、一瞬ビクッとした後ようやくこちらに焦点を合わせてくる。

「あ……つむぎ。」

「何があったの！　これキミがやったの！？」

「何の騒ぎ！？」

つづりちゃんと委員長、それにヒノエ先生が追いついてきて、辺りの惨状にびっくりする。そんな様子をしばらくボーッと見つめていたかなでは、ぼそりと小さくつぶやいた。

「ゴキブリ……。」

「え？」

「すっげーでかいゴキがこっち飛んできてさあ、わけも分からず魔法乱射しちった。」

「はあああ！？」

一斉にあきれるみんなを見回して、かなではテヘッと舌を出して頭をコツンと叩く。

「ごっめーん☆」

「アホか——!!」

その場にいた全員のツッコミが（物理的なイミも含め）炸裂したのは言うまでもなかった。

結局、先生に大目玉をくらったかなでは、トイレ掃除1週間と言
う罰をもらって事を収めることができた。

ぐちゃぐちゃになってしまった給仕室の片付けもちろんやらさ
れる事になり、たんぼ組も連帯責任という形で手伝うことになっ
た。

「……………」

でもぼくは、なんでだか妙な違和感を感じていて、ダラダラとガ
レキを集めるかなでの背中をジッと見つめる。

（やっぱりなんかヘン。）

かなでがおかしいのはいつものことだけど、それでも今日は何か
違ったんだ。そもそもゴキブリ程度でコイツがあんなに取り乱した
りするはずがないし、それに——

「なに？」

「へ？ あっ、いや」

視線を感じたのか、突然こちらを向いたかなでに何だか焦ってし
まう。なんかいつもと違うから調子狂うよ……。

タタタと小走りに近づいたぼくは、その頭をグイッと掴んで引き
寄せ、聞いてみた。

（ねえ、なんか悩みごとでもあるの？ 相談のるよ。それとも幼な
じみのぼくにも話せないようなこと？）

（あだだ、抜けるハゲる毛根が死滅する。）

若干涙目で頭をさすっていたかなでは、ふいにニッコリ笑うとこ
んな事を言った。

（心配してくれるんだー、やーさしいなア。つむぎは）
（ふざけない！）

とう！ と脳天カラタケ割りをお見舞いして、抱きついてこよう

とするのを阻止する。まったくコイツは……。

呆れて離れようとした時、後ろから小さく声が聞こえたような気がした。

——相談できたら良かったんだけどな。

「……。」

その言葉のイミを何となく察して、ぼくは振り返らずに委員長たちの元へ行った。

ぼくにも相談できないようなこと、かあ。

そりゃもう子供じゃないんだし、お互いに隠し事が出てきたっておかしくない年齢だけど……でも

何となくモヤモヤする思いを抱えたまま、ぼくはホウキを無言で動かし続けた。

——おまえはなにをした？　なにをしている？　なにをするつもりだ？

ああ、これは夢だ。と直感的に悟った。

だってそうだろう？　前も後ろも上も下も過去も未来も分からないような真っ暗な空間が、魔導学校の寮部屋のはずがない。

——おまえはなにをした？　なにをしている？　なにをするつもりだ？

低く響く声は幾重にも反響を繰り返し、オレの頭の中を占領していく。頭が痛い、割れてしまいそうだ

——オオオマエ　ナニニナニ　ツモリダ？

「っ——！！」

無理やりまぶたを開け、覚醒することに成功したオレはそのまま上半身を起こす。背中は汗でぐっしょりと濡れ、ぴたりと貼りついたシャツが不快だった。

時刻は午前2時。時計の秒針がやけに大きく聞こえ、同室のかな

たの深く穏やかな寝息が聞こえていた。

「……あー、くそ。」

何度目だよ。と小さく呟き、もう一度枕に頭を投げ出す。

浅い眠りを繰り返しては起きる。すでに5、6回はそうしているだろうか。我ながら神経の細さが嫌になる。

（仕方がない、今すぐにも消されてもおかしくないのだから）

自分で出した答えに背筋がゾクリとする。駄目だ。早く寝なければ。そうしないといつもの「かなで」にならない。

（オレは後どのくらい存在してられるのだろう、どれだけみんなの側に居られるのだろう、あとどのくらい……。）

「――。」

そうしてゆっくりとまた浅い眠りに落ちていく。絶望と苦しみと――ほんの少しの安堵に身を委ねて。

次の日、ぼくたちはいつもどおりに教室で授業の開始を待っていた。

昨日様子が変だったかなでも、今日はいつも通りにふざけてはだらしく机に上半身を投げ出している。やっぱり気のせいだったのかな……？

「しゃんとしなよ。今日からトイレ掃除の罰でしょ？」

「ちよっと思っただけだよー、オレが女子トイレの掃除しても良いのかな。うえっへっへ」

「……わかったよ、ぼくも手伝うから。」

結局こういう展開になるのか、とガクリとしていると、慌しく入ってきたヒノエ先生がぼくたちの方に向かってくる。どうしたんだろう？

「たんぽぽ組、悪いけどすぐ制服に着替えてきてくれない？」

「どうかしたんですか？」

驚くつづりちゃんがごく真っ当な意見を述べる。その後ろからピ

ンと来たらしい委員長がこう続けた。

「依頼実習ですか？」

「そうなの。実は派遣する予定だった2年のチームが、突然体調を崩して行けなくなってしまったのよ。代わりにアナタたちに行って貰おうと思って。」

「えー、なんでオレたちにー？ 他にも上級生が居るんじゃないのー。」

「そうだよ、いくら病気で行けなくなったとしても、この学校には他にもたくさんチームがあるんだ。それをなんでわざわざ経験の少ないぼくたち1年生に？」

ヒノエ先生はそこでぼくと委員長を指すとワケを説明してくれる。

「ひびき、それからつむぎ。音魔導師志望よね？」

「え？ はい」

「一応はそうですね。」

「依頼主からの指名が音魔導師なのよ、あいにく2、3年の音師は全員出払っていて……おねがい！ 簡単なランクDの依頼だから！」

パンツと手を合わせてお願いされてしまっただけにはぼくたちには断れない。お互いの顔を見合わせた後、ひとつうなずいて部屋へと着替えに戻ろうとする。

ところが最後まで残っていたかなでは、先生に向かってこんな事を聞いていた。

「せんせいせんせい、その代わり今日のトイレ掃除免除で良い？」

「いいから早くせんかつ！」

「きゃー」

かなでは引き返した委員長に首ねっこをつかまれ、ようやくぼくたちは準備するために駆け出した。

「それにしても唐突ね、そんなに急ぎの依頼だったのかしら？」

「いや、学校側の信用問題だろう。約束の日に行かなければ学校全体のイメージダウンにも繋がりがねんからな。」

「なるほど、それでオレたちに白羽の矢が立ったってワケ。」

慌しい出発から1時間後、ぼくらは中部列車の9・15発オピーニア行きに乗っていた。

コンパートメントの一室に入った後、委員長が先生から受け取った羊皮紙を広げる。

「行き先はレークサイドから2つ目の駅、ルアン。依頼主はシュテルン氏。依頼内容は『カギを開けてほしい』との事だ。ランクはD。特筆…音魔導師を希望。」

「カギを開けてほしい?」

なんだかずいぶん大雑把な依頼だなと思って聞き返すと、委員長はさらに羊皮紙を広げてこう続けた。

「ただのカギじゃないな。どうも魔力が絡んでいるようで物理的な力では開かないのだそうだ。しかしなぜ音魔導師が必要なのか書かれていないな。」

「行ってみたら分かるわよ。」

「なあ、それよりランクって何? どういう風に区分けされてんの?」

窓の外に顔を出して(絶対真似しちゃダメだよ!)風を受けていたかなでがボサボサ頭のまま振り向いた。つづりちゃんはスラリと長い足を組むと説明し出す。

「ランクはアタシたちが受ける依頼の難易度によってつけられているのよ。下からEDCBA。まあウワサじゃその上にSランクがあるって話だけど――アタシたちには当分関係ないわね。」

それでどういう風に区分けされているかって言うと、その依頼の内容や学校からの距離、かかる日数などを見て学校側がランク付けをするの。Eはこの間やったような雑用、魔法を使わなくてもなんとかできるような仕事よ。」

「じゃー今回のDは?」

「レベル的にはEと変わらないけど、距離とわざわざ音魔導師を指定してきたところを考慮してDにしたんじゃないかしら。そんなに難しい依頼じゃないはずだから安心だわ。」

「へえ、そうなんだー。つづちゃんよく知ってるねえー、そんなー」

「……って言う授業を、つい先週やったはずなんだけど？」

そう付け足して、ぼくはかなでを白い目で見やる。寝てたな、コイツ。

「でへへー、聞いたような聞かないような」

その時、うっそうとした森ばかりだった窓の景色が一気に開け、輝くばかりの広い海がぼくたちの目に飛び込んできた。おもわず立ち上がって窓枠に手をかける。

「うわーっ、綺麗だね！」

「ほんと、素敵ねえ」

開け放たれた窓から吹き込んでくる塩の匂いを含んだ風を存分に楽しんでいると、委員長が荷物を持ち立ち上がった。

「じき目的地だ。降りるぞ」

ルアンは大きくえぐられた海岸に隣接する港町。その主な産業は運送業で、ぼくたちがいる南の大陸のあちこちから運ばれてきた木材や資源などを各地に運ぶことで町は潤っている。

けれども近年新たに観光事業を立ち上げようと町の人たちはがんばっているらしい——と、言うのを、どうしてぼくが知っているかと言うと……

「だからね、ぜひぜひこのお土産を買っていったレークサイドで宣伝してほしいのよ。あなたたち魔導学校の生徒さんでしょ？ 街の花形であるあなた達に宣伝してもらったら一気に流行ると思うわー！」

お土産屋さんのおばさんが、ひっきりなしに語ってくれたからな

のだ。おかげでぼくたちはルアンについての知識を（いささか不必要なことまで）存分に知ることとなったのだけど

「あのっ、ぼくたちシュテルンさんっていう人を探しているんですけど、どこに居るか知りませんか？」

おぼさんが一息ついた瞬間を狙ってそうたずねると、彼女は一瞬びつくりしたような顔をしてようやくしゃべるのを止めてくれた。よかった、このままずっと喋り続けられるかと思ったよ。

「シュテルンさん？ それならこの街を出て少し歩いたところにある青い屋根の家のご主人よ。ちょっと待ってて、地図かいてあげる。」

そう言って彼女がペンと紙を取りに行った後、驚くべきことが起こった。

「うわっ！」

「な、なんだ！」

店先に並べられていたお土産の人形たちの目が一斉に光りだしたんだ！

びつくりして腰を抜かしそうになったぼくと委員長とは別に、つづりちゃんも冷静に人形を調べ始める。

「簡単な明かり魔法ね、中に小さな魔力電池が入ってるみたい。」
「うわー、かわいくね？」

「ぶきみだよっ！」

「の、呪いの人形の類ではないのか、これは……。」

それぞれが感想を言っていると、奥から戻ってきたおぼさんがニツコリと笑う。

「気に入ったのならお一つどう？ 値引いてあげる。」

「買った！」

（えええ！）

ぶきみな人形を手にしてゴキゲンかなでは放っておいて、ぼくたちは地図を受け取る。

「それにしてもシュテルンさんがねー、あれ以来、魔とつくものは

極力避けてきたのに、いったいどういう風の吹き回しかしら。」

「え？」

そこまで言ったお婆さんは「しまった」と言う顔をしてそそくさと奥に引っ込んでしまう。

「どうのことだろ？」

それに答えられるのはダレも居なかった。

ルアンからいったん出たぼくたちは、駅の線路をまたいで目的の家へと向かう。どうやら目指す場所は草原の中にあるようで、緑の海原の中にぼつんと光る青い屋根が特徴的だった。

「あれみたいね。」

海風になびく髪をかきあげたつづりちゃんが、そういつて地図を確かめる。時間は10時5分前。ちょうどいい感じだ。

家の周りにはこぢんまりとした畑があり、その中でクワを振り上げる一人の老人がいた。

「あの、こんにちは！」

そう呼びかけると、おじいさんはかぶっていた麦藁帽子をクイツとあげ、ふしぎそうにぼくたちを一人ずつ順番に眺める。そして校章のキーアークを見て取ると小さく笑って片手を挙げた。

「おお、学校の生徒さんか。よくこんなとこまで来てくださった。」

「初めまして、ニキ魔導学校より派遣されて参りました。今回依頼を担当させて頂いたんぽ組です。」

さすがのリーダー委員長は、キリッした態度と敬語でそう挨拶をする。ところがシュテルンさんは顔の前で手をひらひらと振るところ言ったのだった。

「そんなにかしこまらなくて良いですよ。今回の件はちょっとした年寄りの酔狂なのですから。」

「すい、きょう？」

首にかけていたタオルで汗をグイとぬぐった彼は、クワを肩にかつぐと家へと向かって歩き出した。

「こんなところで話もなんですから、中へどうぞ。」

家の中へと案内されたぼくたちは、出されたお茶を飲みながら話を聞くことになった。

「開けて欲しいのは、家の裏手にある遺跡の入り口なのですよ。」
「遺跡？」

「ええ、とても小さなものですが、なんでも中々に歴史のある建造物だとか。私は入ったことが無いのですけどね。」

シュテルンさんは立ち上がり、暖炉の上に立てかけてあった一枚の写真を取り上げ、ホコリをぬぐう。その中には今よりちよっぴり若い彼と、その隣によりそう一人の女性の姿があった。

「半年前に亡くなった私の妻リザは、魔導学校の卒業生で音魔導師でした。ですから貴方たちの先輩に当たりますね。とは言え、もう何十年前の話になりますか……。」

遠い眼差しで語るその様子は、まるでその時の幻を見ているかのようで、何となくぼくたちは声を出せずに聞き入っていた。

「リザは魔導師としてはそこまで優れていたわけではありませんでした。私と結婚した後も、ごく簡単な魔法を日常生活で使うばかりだったのです。ですが彼女は時おり自分で作った曲を私にプレゼントしてくれて——ああ失礼、つまらない話をしてしまいましたな。」

「いえ、そんな……。」

意識をこちらに戻したシュテルンさんは、懷から一冊のノートを取り出しパラパラとめくる。最後のページまで行くとこちらに手渡ししてくれた。

「先日ようやく踏ん切りがつき、遺品整理をしていましたらこのような一文が出てきたのです。」

ノートを受け取った委員長の周りを取り囲むように、みんなが覗き込む。そこには綺麗な字でこんなことが書かれていた——

わたしの最後の贈り物。

あなたに送る贈り物。

ひみつの部屋の奥の奥。

思い出用意し待っています。

「ひみつの部屋と言うのが、つまり裏の遺跡のこととして、入り口には音魔導師しか開けられないようなカギが掛けてあるのですよ。」

「なるほど。ですから今回依頼してくださったんですね。」

少しだけ困ったように笑う彼は、照れたように頬をかいた。

「妻は少々イタズラ好きというか、ユーモアにあふれた人物でして、いつも私を驚かせようと画策しているような人物でした。あれが人生の最後に残した私への贈り物というのがどうしても気になってしまったのです。」

しんみりとした空気を打ち破るかのように、お茶を置いたかなでが立ち上がる。

「良いね、オレそういうはなし好き。隠された贈り物ってのも気になるし、早くいこーぜ！」

そのまま外へと飛び出していってしまう姿を見送って、シュテルンさんは笑う。

「魔導師っていうのはお堅いイメージがあっただけど、あんなに元気な子も居るんですねえ」

「す、すみませんアイツ礼儀のレの字も知らないようなヤツでして……。」

慌てて頭を下げるのだけど、彼は笑い続けたままこんなことを言ってくる。

「にぎやかで嬉しいよ。妻が死んでからこの家は静まり返っていたから。」

そう言って出て行くシュテルンさんのことを思って、ちよっぴり鼻の奥がツンとする。大切な人を亡くして、ずっとこの家で一人ぼっちだったおじいさん。

置いていかれた悲しみは、ぼくもよく知っている。だから

「つむぎ？」

「どうした、行くぞ。」

声を掛けてくれた二人の顔をしっかりと見て、ぼくは決意するように言った。

「委員長、つづりちゃん。絶対この依頼成功させようね！」

その遺跡と言うのは、確かにとてもこじんまりとしたものだった。大きさで言うと、さっきのシュテルンさんの家と変わらないんじゃないかってくらい石造りで、パツと見は何かの小屋のようだ。

「こりゃーずいぶんと可愛い遺跡ねえ」

同じことを思っていたのか、つづりちゃんが辺りにそびえたつ石柱の一つに寄りかかりながらそんなことを言う。

辺りを調べていた委員長が、石をひとつひっくり返してそれに答えた。

「だがしっかりカギが掛けられている、古いが魔力を感じるな。」

「そうなのですか？　やはり専門の人には分かるものなんですね。」

一般人のシュテルンさんには分からないみたいだったけど、確かにそこには魔力の痕跡が残っていた。問題はどうかやって開けるかなんだけど――

「ぐぎぎ／＼やっぱ力じゃムリいいい？」

「あのねえ……。」

「ぎゃんっ」

扉を押し開けようとしてすべて頭をうちつけるかなで。ぼくはその後ろ姿に呆れたように声をかけた。

「力任せで開くわけないじゃないか、魔法でかけられたんなら魔法でしか開かないのが常識でしょ？」

「そっか、なら爆発させれば――」

「やめー!!」

スチャツと羽根ペンなんか取り出すアホにとび蹴りをかます。そんなこととして思い出の場所を壊しちゃったらどうするんだよ！

「まったくキミときたら、少しは頭を使うってことを考えなよね！」
「頭突きで開けろって？」

「そのすっからかんの頭を打ち付けてやろうかつ！」

いい加減キレそうだったばかりを制するように、委員長が肩をつつく。
「わかった。ちょっと来い。」

「え？」

その場にドサツとかなでを落とし、導かれるままに入り口の正面に立つ。

そこは周りにある5本の石柱のちょうど真ん中で、少しくぼんだ所に一個の鈴が転がっていた。

「なにこれ？」

「不用意に鳴らすなよ。準備がまだだ。」

そういつて欠けた石柱を魔法で補完していく委員長。しばらくしてその作業が終わると、こんなことを言ってきた。

「いいか、この仕掛けは非常にシンプルだが勘が必要とされる。まずは鈴を鳴らすんだ。」

「こう？」

——チリンチリン

銀の鈴は見た目を裏切らないような可愛い音で鳴く。しばらく鳴らしていると、辺りの石柱に反響しているのか音は少しずつ大きくなっていった。

「うわ、わ」

「今その音は石柱の間を行き交いどんどん増幅している。自分の元に来たとき、音の道をつくり遺跡の入り口にぶつけるんだ。」

「えええ！？」

さらに大きくなっていく音に負けないように、大声でぼくは叫ぶ。
「そんなことやったことないよ！ どうやってやるの！？」

「私もない！ お前の勘だけが頼りだ！」

「そんなぁ！」

すでに音は増幅されて学校の鐘よりも大きくなっていて、耳の良
いぼくたち音魔導師にとっては頭がクラクラするような大きさにな
っていた。あ、うう、目が回るゝ

ええい、このままじゃ遅かれ早かれ気絶しちゃうよ。とにかくや
ってみようっ

「た、／＼t a c t！」

自分の声も聞こえなかったけど、なんとか呼び出しには成功した
ようでぼくは自分の魔具を握る。

ええと、委員長はなんて言ってたっけ、音の道を作る……？

すでに暴力的なまでの音は、時おり体を打ち付けるように通り抜
けていく。

1, 2, 3, 4

1, 2, 3, 4

(ここだっ)

タイミングを見計らい、ぼくは音の流れを一気に前方に向けて操
った。お、重い、けどっ

「いっけええ!!！」

自分の声も上乘せして、思いつきり音の塊を遺跡の入り口にぶつ
ける。すると……。

「お、おお……」

ゆっくりと振動しながら遺跡の扉は開かれた。

見守っていたシュテルンさんは、感動したように手を震わせてこ
ちらの手を取った。

「あ、ありがとう。ありがとう。どんなにやっても開かなかったあ
の扉が……。」

「えへへ、いやいや。」

ぼくが照れていると、後ろの方でつづりちゃんが何か呟いている
のがぼんやり聞こえてきた。

「ねえ委員長、どうして自分でやらなかったワケ？」

「……………」

「もしかして自信がなかったとか。」

「音を扱うセンスは、私よりつむぎの方が上だと判断しただけだっ」

「??? やっぱりさっきのでちよっと耳がしびれちゃったのかな。
よく聞こえないや。」

しばらく耳をマッサージしていると、事の成り行きを見ていたかなでが近寄ってきてシュテルンさんの肩をバンバンと叩きだす。

「おっさん良かったなー、これで贈り物が手に入るぜ。」

「そうだな。これでやっと……」

そう言っただけで彼が遺跡の入り口に近寄った時だった。ふいにその暗がりの中から、突然黒い何か飛び出してきたのだ！

「シュテルンさん！」

「チィッ」

ザッと構えた委員長が、手をまっすぐに伸ばし狙いをつけるように指を鳴らす。

「サンダーアロー！」

その指先から矢のように放たれた稲妻は、呆然と立ち尽くすシュテルンさんの耳元ギリギリを通貨し、襲い掛かってきたマモノを射抜いた。

犬のようなマモノ『ウォルフ』は、空中に縫いとめられたように一瞬とまり、細かい霧となって霧散してゆく。

「なーいす委員長っ」

「大丈夫ですかっ」

「あ、ああ……しかしこれは。」

かけよったばかりとつづりちゃんの助けを借りて老人は立ち上がる。ケガはしてないようだったけど、ショックを隠しきれないように目を見開いた。

その見つめる先に居たのは、階段の下に待ち構える大量のマモノ

だったのだ。外の光を恐れているのか、最初の1匹以外はこちらへはこないようだったけど、その威圧感はそのごく、思わずしり込みしてしまいそうな迫力だった。

「マモノの巣窟になっていたか……。」

「うわ、すっげえ瘴気。」

階段を伝い上ってきた白い霧は瘴気と呼ばれるもので、これが大量にたまるとマモノが大量発生すると言われている。長い間放置されていたこの遺跡は、マモノたちにとっては絶好の住処になっていたようだ。

「そんな、ここまで来て……。」

がっくりと崩れ落ちるシュテルンさんだったが、ぼくたちは顔を見合わせ力強くうなずいた。

「シュテルンさん、依頼の内容変更をお願いします。」

「そーそー、ちよいと変えてくれれば良いのさ。『一番奥まで護衛してくれ』ってね。お値段据え置きそのまま！ なんでもやりますたんぽ組ってか」

信じられないようにこちらを見つめていたのだけど、その口からぽつりと言葉がこぼれおちた。

「本当に、良いのかい？」

「任せてよ！」

羽根ペンを構えたかなでが、空中にサラサラと文面を書き出していく。

「西から昇りし太陽が汝の瞳を焼き尽くすとき、その暗闇の奥で光を見るだろう——ライティング！」

書き上げた文章を読み上げると同時に、まぶしい光球が出現する。それをむんずつと掴んだかなでは、こともなげに遺跡の中へとそれを放り込んだ。

「ほーれ、ポイー」

——キャンキャンインツ

とたんに逃げ出していく無数のマモノたち。小型の太陽を放り込まれたかのような明るさに、光がニガテな彼らは耐えられなかったらしい。

「エグい事するわねえ……下手すりゃ目がつぶれるわよ、あれ。」

「いやあ、お恥ずかしい。」

とにかく、下で待ち構えていた一団を追っ払うことには成功したので、ぼくたちは慎重に遺跡の中へと降りていく。

先頭が明かりを掲げたかなで、真ん中がシュテルンさんを守るようにぼくとつづりちゃん、そしてしんがりは委員長だ。

遺跡の中は一本道のように、暗く長い道が下の方へ向かって永遠と続いているように見えた。

「アタシ地上に出ているところだけが遺跡かと思ってたわ。」

「ぼくも。こんなに広かったんだね。」

中は静かなもので、ぼくたちが交わす会話が細かく反響しては吸い込まれるように暗闇に消えていく。明かりがあるから怖くはないけれど、こんなところに奥さんは何を隠したんだろう？

「扉だ。」

先頭を歩いていたかなでがそう言って歩みを止める。後ろから体をずらして覗き込むと確かにそこには扉があった。入り口と同じように頑丈そうな石造りで出来ていて、その両脇を固めるガーゴイルの置物が、入る者を選ぶかのように目を光らせている。これは生きていないガードマンで、彼らが見つめているなか入ろうとすると、たちまち目から熱線を発して招かれざる侵入者を焼き殺してしまうという恐ろしい仕掛けだ。

「シュテルンさん、奥さんは一体こんなところで何を――」

「わ、私にも分かりません。」

あせったようにそう言う彼と一緒に、ぼくたちも頭をひねる。こんなに頑丈な警備を施すだなんて、奥さんはどれだけ慎重な人だったんだろうか。

「とにかく、入りましようよ。」

そう言つてつづりちゃんがガーゴイル像をずらして見つめられないようにし、扉を押し開ける。ここは入り口と違ってカギが掛けられていないのか、あっさりと開いた。暗くてホコリっぽい臭いと共に、ひんやりとした大量の瘴気が流れ出る。

「――暗いわね。」

「つづりちゃん、気をつけてね。」

「わかつてる。」

彼女は自分の明かりを掲げながら慎重に中へと足を踏み入れる。

数歩行ったところで、息をのむような悲鳴が聞こえてきた。

「つづりちゃん！」

ぼくたちは一斉に中へと突入し、そこにあった光景に唾然とした。天井まで届かんばかりの大きなマモノが、鉄のメイスを今まさにふり降ろそうというところだったのだ。

「ブラスト！」

「きゃっ」

とっさに放ったかなでの魔法が、空中爆発を起こしメイスの軌道をずらす。その反動で部屋の隅に吹っ飛んだつづりちゃんがグググと体を起こした。

「なんだってこんなバケモノがここに居るのよ……！」

「ミノタウロス！」

臨戦態勢をとる委員長が、信じられないと言った声でマモノの名を呼ぶ。

茶色い大きな体と2本の角、体の上半分は牛そのものでありながら下半身はニンゲンと言うこの奇妙な生き物は、魔獣ミノタウロスと言つて本来ならば遭遇することも滅多にないマモノだ。

その性格は非常に残忍で、大柄な体躯に似合わずスピードも早く、熟練者でも手こずる相手だ――と、授業では習ったのだけど、もちろん遭遇するのはみんな初めてで、繰り出される攻撃を必死に回避することしかない。

「あばばばっ」

床に打ち付けられたメイスにぺちゃんこにされそうになったかなでが、慌てて転がりながら回避する。ミノタウロスはそのままなぎ払いをして鉄の塊が委員長の鼻先をかすめる。

その後ろから飛び出したぼくは、タクトを振って叫んだ。

「ファイヤー！」

距離をとって展開を終えていたぼくの火の玉が、一直線にマモノへと飛んでいくのだけど――

パアンッ！

「うそお……。」

なんと腕の一払いでかき消されてしまった。げげげ！ しかも今のでこっちに向かって来ている！

「わぁっ」

大振りの攻撃を何とかよけ、相手の足元をくぐってガレキの裏のみんなの元へと飛び込む。こんなマモノ、ぼくたちには早すぎるよおっつ

「……？」

ところが攻撃がこないことをふしぎに思ってたちょっとだけ覗くと、ミノタウロスは急に消えたぼくたちを探して辺りをウロウロし始めた。視界に入った者しか攻撃して来ないんだ……。

「スピードもパワーも半端なく強いが、頭の方は宜しくないようだな。」

荒い息を整えながらも委員長もそう言う。でもいくら攻撃パターンが単調とは言え、その分を差し引いてもぼく達には到底かなわないような相手だ。一体どうしたら――

その時、シュテルンさんを守っていたつづりちゃんが片手をあげて言った。

「アタシに一つ、作戦があるんだけど。」

「なんだ？」

水平まで降ろされた彼女の指は、ぴたりと正面に居た男を指し示して止まった。

「オレ？」

自分に向けられた指を見つめていたかなでは、混乱したように首を真横に傾ける。ところがつづりちゃんはアッサリとその言葉を否定した。

「ちがうわ、アタシが使いたいののはアンタの腰にあるその人形。」
って、ルアンのおみやげ屋さんで買った、あの目の光る気味の悪い人形？

横に居た委員長が、パツと人形を取るとつづりちゃんに放り投げた。彼女はそれを受け取ると事も無げに力を込めて引きちぎった。
ブチィッ！

「ぎあぁっ！ オレのスーパードリゲス1号！ せっかく談話室に置いて驚かせようと思ってたのにいい！！」

（良かった、ここで使うことになって良かった。）

「町で言った通り、この中には小さな魔力電池が内蔵されているわ。これを使うの。」

そう言うって中の綿をさぐると、親指の爪ほどの六角形の水晶体が現われた。彼女はそれをぼくたちの真ん中に置く。

「さあみんな、ここにありったけの魔力をそそいで。爆発するギリギリまで入れちゃっていいわ。」

「つづり、まさか貴様——」

何をするか分かったのか、委員長があっけに取られたような感心したような顔で彼女を見つめる。ニヤリと笑ったつづりちゃんは、さらっと髪をかき上げた。

「そうよ、即席爆弾を作るの。」

お互いに顔を見てうなずいた後、ぼくとかかなでは一気にガレキの裏から飛び出しミノタウロスにかかっていった。

「たあああ！！」

「つりゃああ！」

ゴッ

ぼくが頭、かなでが腹にそれぞれ蹴りを入れると、ミノタウロスはさすがにバランスを崩して後ろにひっくりかえる。重たい音が止まない内に今度は委員長とつづりちゃんが飛び出した。

カンッと固い音をたてて投げ出された魔力電池を確認したあと、委員長がすばやく指を鳴らす。

「シールド！」

すると倒れたミノタウロスを覆うように、半円状のドームが出現する。マモノが本気を出せば壊れてしまうようなものだったけど、これで十分だっ

「ブコツな牛は寝てなさい！」

最後につづりちゃんがケータイをピッと押すと、ドームの中で小さな爆発が起こった。そしてその衝撃は魔力電池を刺激し――

バボンッ

強烈な連鎖爆発が次々と引き起こされ、ドームの中はすぐにケムリ充滿して見えなくなってしまった。

しばらくして委員長がシールドを解除すると、そこにはほんのちよっぴり美味しそうな匂いを出す、こんがりと焼き色がついたミノタウロスが気絶して倒れていた。白目をむいてぴくぴくと時おりケイレンをおこすその様は、なんとも言えないものだった。

「やあれやれ、何とかなったわね。」

ヘタツと座り込んだつづりちゃんを始めとして、みんなその場に腰を落として作戦の成功を実感する。なんとか、なったんだね……。「それにしてもいつ爆発するかとヒヤヒヤしたぞ。」

「あんな小さな電池でも、意外と貯めこめるのね、こっちの魔力が先に尽きるかと思ったわよ。」

つづりちゃんの作戦である、魔力電池にギリギリまで魔力を貯めて爆発させると言った手段は、かろうじて成功と言った感じだ。と言いうのも小さな電池はなかなか限界まで貯まらなかったのだ、現在のぼくたちの魔力はすっからかんに近かったのだ。

元々魔力がそんなに多いほうじゃないぼくなんかは、今はもうグ

ツタリという感じで精神を休めていた。魔導師が完全に魔力を無くすと、虚脱状態になってしまうのだけど、今回は幸いにもそんな事態にはならなかったみたいだね……。

「眠い……。」

ぼそりと呟きながらも立ち上がる。みんなは完璧に伸びているミノタウロスの前にたつて、物陰に隠れていたシュテルンさんも含め話しているみたい。

「チリ化しないと言うことは、完全には倒せなかったか……。」

「トドメを刺したいところだけど、もうそんな魔力もないわね。」

「ほっといてもいいんじゃない、半日は寝てるデシヨ。」

あれ、なんだかみんなの声が遠く聞こえるや。やっぱり、まりよくを、そそぎすぎたのかな

——ちよ、ちよとつむぎ!?

フェードアウトしていくつづりちゃんの声を聞きながら、ぼくの意識はカクンと落ちたのだった。

引いては寄せる波の音。ぼくの心の奥底にある原始的な部分を刺激するかのような、そんなやさしい音が聞こえる。

——ザザア、ザザ……

耳に心地よい調べは、音魔導師でも作り出せない、自然が奏でる最高の音楽だ。

「あれ……?」

うつすらと目を開けると、そこには岩肌がゴツゴツとしたほら穴が見えてきた。左の茶色い壁とは反対に、大きく開けた右手側にはとびきりの青い海が広がっていて、吹き込んでくる風がぼくの髪をサラサラとなでて行く。ここは……?

「気が付いた?」

後ろから声をかけられ振り返ると、ホッとした顔のつづりちゃんが近寄ってくるところだった。手を借りて起き上がり、まだボーッ

としている頭を2、3度軽く振る。

「驚いたわよ、突然寝ちゃうんだから。そんなになるまで魔力を注入しなくても良かったのに。」

「まったくだな、己の限界を越えてまでやるなど、愚か者のすることだ。」

寄ってきた委員長も、口ではそんなことを言いながらも心配そうに覗き込んでくる。ぼくは素直に謝ることにして、何があったのか聞くことにした。

「ごめん、迷惑かけちゃったね。それよりここは――」

そこまで言いかけてぼくはハッと口をつぐんだ。青色のキャンバスを前に座り込んでいたシュテルンさんが、海を一心に見つめながらハラハラと涙をこぼしていたのだ。

「そうか、これがお前の届けたかった最後の贈り物、最後の音楽なのか……リザ。」

今はそっとしておいてあげましょ、と視線だけで言われて、ぼくたちは静かに壁の方に移動する。ようやくそこで、何があったかを話してもらう事が出来た。

「ここはさっきのミノタウロスが居た次の部屋なの。つまり日記にあった『秘密の部屋の奥の奥』ね。扉を開けたら海が見えたからビツクリしたわ。」

「どうやら遺跡はルアンの町の地下を通り、この海の洞窟まで通じていたようだな。」

はあゝずいぶんと長いとは思ったけど、まさか町の下を通って海まで出ちゃうなんてね。いったいダレがどのようにして作ったんだろう。まあそれが分からないのが遺跡なんだけど。

「……みんな、本当にありがとう。これでふんぎりがついたよ。」
「シュテルンさん。ふんぎりって？」

まだ少し赤い目元のシュテルンさんは、穏やかに微笑むと話し出

した。涼やかな風が彼の言葉を運びぼくたちに届く。

「この町を離れ、息子夫婦の世話になることさ。今まではリザの残した痕跡だけにすがって生きてきたがそんなものはもう必要ない。」胸にしわくちやの手を当てて愛おしそうになでるその姿は、とても満ち足りているようだった。

「彼女の残した音楽はこの中に刻まれた。どこに行ったとしてもこの潮騒の調べを思い出せば彼女は傍に来てくれるのだから。」

「……………」

遠い遠い音楽は、ぼくの中にもある。お父さんとお母さんが、ぼくだけのために作ってくれた優しい音楽が。気が付けばぼくの口からは、言葉があふれ出していた。

「忘れないでいてください。音の魔法は、きつとずっと解けないから。」

解けない魔法はあるんだ。だからきつと、シュテルンさんも大丈夫。夫。

そんな想いをこめて言うと、心からの感謝がそこにはあった。

「……ありがとう。」

ところがその感動をぶち壊す勢いで、それは現われた。

「みてみてーっ！　こんなん見つけた！！」

「いっ、かなで！？」

海側のがけ下から飛び出してきたのはおなじみのピンク色で、嬉しそうにこちらへ駆け寄ってくるその手の平には、海よりも空よりも澄んだ水色の輝きを放つ宝石が乗せられていた。

「なんかねー、この下のくぼみを探検したら吹き溜まりみたいなちっちゃな場所があつてさ、その中であつた。」

「驚いたな、宝珠か？」

「委員長、宝珠って？」

受け取ったその宝石を観察していた彼は、どうやら本物みたいだな。と呟いて続ける。

「世の中には自然の魔力がたまるスポットがあり、長い時間をかけてそこに元々あった物質——まあ大抵は石ころだな——が、結晶化されると聞いたことがある。私も実物を見るのは初めてだ。これはアクアマリンに近いかな？」

確かに少し離れていても感じるほどに、その水色の宝珠からは魔力がじわりじわりとにじみ出ていた。それだけでもものすごく貴重な物だって事がわかる。

しばらく見ていた委員長は、それを持ってシュテルンさんの前に行くときあ、と差し出した。

「この遺跡にあった物ですから所有者はあなたのはずです。どうぞ奥様の形見としてお受け取り下さい。」

「ちょ、その役目は見つけたオレが——もがっ」

ブーブーと言いはじめたかなでの口をバシッとふさいだばくとつづりちゃんは鬼のギョーソーをする。こんな場面まで空気を読まないヤツなんだからっ！

ところが宝珠アクアマリンをじっと見ていたシュテルンさんは、しばらくした後ゆるゆると頭を振った。

「せっかくですがこれは受け取れませんよ。なぜならこの遺跡の所有者は私ではないからです。」

「えっ？」

「誰も立ち入らなかった遺跡に勝手に妻が入り込んでいただけであって、この遺跡には元々所有者など居ないのですよ。」

ですから——と、宝珠を握らせた老人は、穏やかにこう続ける。

「どうぞ発見したあなたの方がお持ち下さい。どのみち魔導師でもない私には無用の長物です。役立ててくれる人のところにあったほうが良いでしょう。」

その日の帰り道、ぼくたちは何となくボケーツとしながら列車に揺られていた。

「なんだかフシギな依頼だったね、最初はただ単にカギを開けるだけのはずだったのに、マモノ退治はしちゃうわ宝珠は手に入れるわで……。」

「結果オーライじゃない。良い経験になったわよ。」

ピンク色に染まり始めた海を見つめながら遠ざかっていくルアンの遺跡を思う。誰かが間違っ入り込んだりしないように、もう一度しっかりカギを閉めなおしたからあの中に人が入り込むことは多分ないだろう。

誰も居ない洞窟で、永遠に響き続ける海の音。一組の夫婦が確かにそこにあった証は、100年後も200年後もずっと変わらぬ音楽――

「あああああああ!!」

「うわっ」

「何だいきなり!」

ちよっぴりセンチメンタルな気分浸っていたぼくたちの意識は、突然のかなでの叫び声によってムリヤリ引き戻された。何事かを見ると、明らかに動揺した様子でこのバカは言い放った。

「もう一回おみやげ屋に寄るの忘れた……スーパードリゲス2号買おうと思ってたのに……くそう、くそう。」

「……。」

「……。」

「お望みならこっから突き落としてあげるから、走ってルアンまで戻ったらどうかしら?」

嘆き続けるアホを前にして、ぼくたちは盛大なため息をついたのだった。

「『――以上で、私たちの報告レポートをお、わ、り、ま、す』……っと!」

ぼくはそう書き上げて紙からペンを放す。うんっ、書き損じもな

し、我ながら上手く書けたんじゃないかな。

「つむぎ、どうだ。分からないところはないか？」

「あ、委員長。ちょうど書きあがったところだよ！」

教室の扉を開けて入ってきた委員長は、一人だけで座っているぼくを見ると顔をしかめて辺りを探し始めた。

「あとの二人はどうした。まさかお前に報告レポートを押し付けて逃げたのではないだろうな。」

「んー、かなでは多分そう。つづりちゃんはぼくの分まで荷物を部屋まで持って行ってもらったんだ。そのまま夕食の席を確保しに行ったはず。」

そうか、もうそんな時間か——と、呟いた委員長は、夕焼けが差し込む窓を見つめながらぼくの前の席に座る。

「取り急ぎ報告を校長にしてきた。事の次第を踏まえ、ランクをDからBに引き上げて下さるそうだ。」

「そうなの？ それじゃあこの部分書き直さなきゃ。」

記入してしまったDの部分をビックリ社製のなんでも消しゴムでゴシゴシと削り始める。Bと書き直して完成っ！ 消しカスをパツパと払って笑いながら続ける。

「ミノタウロスとまで戦ったもんね、確かにBくらいじゃないと今後の基準が変わっちゃうか。」

「私たちに支給される『お小遣い』も増えるな。報酬が目当てなわけではないが、やはり嬉しいものだ。」

お小遣いっていうのは、その月の生徒のがんばりに応じてもらえるちょっとしたお金のことなんだ。大抵はこなした依頼の回数や難易度で変わるけど、学校に貢献した度合いでも増えるから頑張っている子は結構多い。

今月は期待できるなー、かなでは食堂の扉を破壊しちゃったから、その分減点かな……なんて考えていると、何かをコトンと机の上に置いた委員長はぼくにこう言った。

「それから、これはお前が持っている。」

手を離れたところにあつたのは、夕陽の中にあつても確かな水色の輝きを放つ宝珠アクアマリンだった。え、あれ？

「この事は報告しなかったの！？」 委員長そういうのを横領って言うんだよ！」

「人聞きの悪いことを言うなっ、もちろん宝珠のことも報告したさ。」

罰の悪そうに視線をそらす彼は、言い訳をするかのように少し早口になって喋り始めた。

「だが、学校側としては受け取るのはあくまでも依頼主からの報酬だけなのだそう。依頼の途中で手に入れたものの処分に關しては生徒に任せているらしい。捨てるも活かすも自由と言うわけだ。」

「でもどうしてぼくに？」

その丸い物体をつついていけると、指先からじんわりと魔力が入り込んでくるのが分かる。それは微々たるものだったけど確かに今日の精神的な疲れを癒してくれているようだった。

「あ、もしかしてぼくが魔力切れで寝ちゃったから？ ひどーい、こんな回りくどいやり方しなくたって、これからは気をつけるよ。」

「ち、違っ……いや、確かにそういう気持ちも、少しはあつたが……。」

あ、やっぱりそうなんだ。ジト目でにらみ付けていると、委員長はあたふたと言い訳を繰り出す。その様子がおかしくて、ぼくはクスツと笑ってしまった。

「いいよ、心配してくれてるその気持ちはすごい嬉しいし、一番魔力が低いぼくに持たせるのは確かに良いアイディアだと思う。」

でも——と、宝珠を持ち上げて夕陽に透かしてみる。何色かよく分らない光が目射る、キラキラ

「ぼくは自分自身のチカラで成長していきたいんだ。ただのワガママでちっぽけなプライドかもしれないけど。こういうのに頼っちゃうとイザと言う時ダメになっちゃう気がしてさ。」

だからこれは返すよ——と、軽く笑って委員長の手の中に宝珠を

戻す。ぼくは弱いからこそ、便利なものに頼っちゃいけないんだ。

それを黙って聞いていてくれた委員長は、口の端をニツと吊り上げて宝珠を自分のふところに入れた。

「それでこそ我がたんぽぽ組のメンバーだ。良いだろう、これは私が預かることにするか。」

「えへへ、ゴメンね。委員長ならきつと役立てられるよ。もう十分強いもの。」

「当然だ。」

立ち上がった彼は、ぼくが書いていた報告書を取り上げるとそのまま入り口に足を向ける。

「それでは報告書を提出してくるとしよう。先に食堂に言ってくれるか。」

「うんっ、よろしくねー」

さーてと、筆記用具を片付けてぼくも大広間に行こう。今日のごはんは何かなく

ところが、扉の前でふと足を止めた委員長は、振り返ってぼくにこんな事を尋ねてきたのだった。

「おいつむぎ。これは本当か？」

「え？ どこ？」

「ミノタウロスの腕に、妙なタトゥーがあったという記述だ。」

ああ、と一つうなずいて思い出す。確かあれは――

「右の二の腕だったかな？ 飛び越えた時に見えたんだけど、チェスのポーンみたいな形をしていたよ。」

暗く浮かび上がるそのマークがなんだかブキミで、妙に記憶に残ったのだ。それを聞いた委員長は妙だな、と考え込む。

「なぜ野生のマモノに、そのように人工的なものが施されているのだ？ 自ら街の彫り師に所に行き入れてもらったとは考えられん。」

「確かに……。」

「そもそもあの遺跡は何か変だった。いくら人が入り込んで居なかったとは言え、たった半年であそこまでマモノが繁殖する物なのか

？
」

「……………」

ぼくは答えることができずにただ黙り込む。あの遺跡に、何があったと言うのだろう。

夕陽はもう沈んでしまい、ぼんやりと分かるだけのシルエットはお互いに動かなかった。

わずかな松明の明かりだけを受け、その少女は遺跡の中に居た。深紅の長い髪を高い位置で一纏めにし、同じ色の瞳はにらみつけるようにつりあがっている。まるで燃え立つようなその出で立ちそのままに、彼女は怒り狂っていた。床に倒れたままだったミノタウロスを一つ蹴り上げ、少女はグッと上体をそらす。

「ったくよおー、何伸びてんだよ。使えねーなっ！」

——ブモ

ようやく覚醒したミノタウロスは、自分を見下ろしている少女に気づき、慌てて体を起こした。そしてそのまま己の体の半分もないようなその少女の前に跪き、申し訳なさそうに体を縮こまらせる。

しかしそれだけでは怒りが収まらなかったのか、紅い少女はわめき散らすように入り口へと怒号を飛ばした。

「お前だけじゃねえ！ ガーゴイル！ 何してたッ」

ビクツと肩をすくませる一対の番人は、すごすごと少女の元へとやってくる。その姿はまるでしかられた子犬のように気弱なものだった。

少女はくわえたキャンディーをガリガリと噛み砕きながら、辺りを見回す。

「命令は何だった！？ ええ？ ここに来る侵入者を排除して宝珠を探し出しとけて言っただろーが！ それをなんだ、コテンパにやられるわ宝珠は持ち去られるわで——ちくしょー、あたしがルークに笑われるじゃねーか。」

あーっ！ と、頭を抱えて苦悩する少女だったが、唐突にかぶりを振ると気を取り直したかのように歩き出した。

「まあ良い、宝珠は持ってかれちゃったが机上の王の復活にはまだ時間があるさ。」

行くぞ、と一声かけた少女はミノタウロスの肩に乗る。2匹のガールゴイルが慌てて駆け寄り、全体が紺色の光に包まれる。

叙々に透けていく少女の右腕には、ポーンのマークが刻まれていた。

4章『中間試験く夢?』

優しく肌をすべる手が心地いい。頬をなで、愛おしそうに唇をなぞり、まぶたの上にそつとキスを落とされる。

ああ、ぼくはこの人がとても大切で、離れたくないんだ。好きで好きで堪らない。

黒く長い髪を掻き抱くように腕を伸ばす。もっと触れてほしくて、もっと近くに居たくて、もっともっと――

そこでパツと目が覚めたぼくは、一瞬何がなんだか分からなくてしばらくロフトの天井を見つめる。

ゆ、め? でも今のは

(委員ちょ――)

「……………う、うわあああ!?!?!」

4章『中間試験く夢?』

ガバツと飛び起きたぼくは思わず夜中だと言う事を忘れ大声を出してしまう。ななななんだってあんな夢…………!?

「ひっ、ちょっと何よつむぎ! ビックリするじゃないっ」

「うわあ! うわー! ギャあああ!」

向かいのつづりちゃんも飛び起きて来るのだけど、とてもじゃないけど理由なんか説明できなくてぼくはただ奇声を上げ続ける。顔っ、顔が熱いっ

「……………っ、つづりちゃん?」

しばらくしてチラツと見ると、向かいの彼女は何事も無かったかのように健やかな寝息を立てていた。どうやら聞いてもムダだと判断してくれたらしい。良かった、あれこれ詮索してくるような人じゃなくて。

「……。」

ほてった顔を冷やすため、ベランダに出て湖を眺める。今日も星屑草の魔力胞子はふわふわと綺麗に漂っていた。

(どうしよう……ぜんぜん眠れない。)

結局、ぼくはそのまま朝まで湖を眺めていることになるのだった。

「どうした、ひどい限ができてるぞ。」

「ひっ」

次の日の朝一番に、よりもよってもっとも顔を合わせたくない人に声を掛けられてしまった。びっくりしてヘンな声が出てしまう。

「う、あ」

「うあ？」

「な、なんでもない！ 委員長にはぜんっぜん関係ないんだからー！」

これ以上見つめられると昨日の夢を思い出してしまいそうで、ぼくはとっさに教室から逃げ出した。これからどういう顔して付き合っていけばいいんだよーっ！！

「な、何だ……私が何をしたというんだ……？」

「ドンマリー委員長！ 明日があるさっ」

「本当に心辺りないわけ？」

委員長には悪かったけど、ぼくはその日あからさま過ぎるほどに彼を避けて授業を受け続けた。

席は視界に入らないように一番前に陣取ったし、それでも後ろに座った彼の顔を見ないため、プリントをまわす時は腕だけにしたり、実習でペアを作るときは真っ先につづりちゃんと組んだり……うう、こんな事してたら嫌われちゃうよ。

(夢は深層心理を表すって言うけど、やっぱりそういう事なのかな

あ……)

午後に入り、属性についての授業中、ぼくはぼんやりそんな考えに行き着いた。

確かに委員長はカッコいいし、口が悪いように思えるけど実際は親切だから好きだ。でもその好きっていうのは、つづりちゃんやかなでに感じている好きと同じ気持ちで、今のところは付き合いたいと言う気持ちは全然ない。つまり友達としての好きなんだ。

けれども、あの夢の中のぼくは、確かに委員長のことを『愛してたんだ。友達とも家族とも違う、恋人としての好き。』

インキュバス
(淫魔でも居たのかなあ、うーん、でも、いややっぱり)

——スコーンッ

「あうっ！」

物思いにふけていたぼくは、突然額に走った強烈な痛みで意識を戻す。そこにはヒノエ先生のこわーい顔があった。

「一番前でボケーツとするなんて、良い度胸ねえ！つむぎい？」

「あ、あはは。」

ぼくの額にぶつかって跳ねとんだチョークをパシッとキャッチして、先生はニツコリと笑う。あ、ダメだ逆らっちゃいけない。素直に謝ろう。

「……すみませんでした。」

「やれやれ、めずらしいわね。あなたが上の空だなんて。そっちならわかるけ、どっ！」

「ぎゃばん！」

見事な豪速で飛ばされたチョークが、2つ離れた位置で居眠りをしていたかなでの後頭部に突き刺さる。おお、白いチョークが見る間に赤く染まっていく……。

「せんせーヒドイ。これ以上バカになったらどーしてくれんのー」

「安心なさい。それ以上バカになれないほど底辺よ。アナタ」

先生はそう言う就先日やった小テストをぴらっと見せた。かなでのその点数は——ええと、その、正解じゃないおっきなマルが一つ

とだけ言っておこうかな。

「いいこと！ 半月後には初めての中間試験があるのよ！」

バシッと机に手をつきながらの宣言に、クラスの大半からブーイングがあがる。そっか、入学してもう2ヶ月経つのか。

「試験は筆記と実技。基礎的な問題だから普段からまじめに授業を受けていれば決して難しくはないはずよ。普段からまじめに受けていれば！」

もしもウチのクラスの平均点が、となりのエクス組に負けるような事があったら承知しないわよ……。」

握り締めたこぶしをプルプルと震わせながら語る先生は、なにやら鬼気せまるものがあつた。こ、怖い……

（ねえ、つむぎ。ヒノエ先生って、何かとエクス先生に張り合っていると知らない？）

（ライバル視してるのかなあ、年も実力も同じくらいだって聞いたことがあるよ）

「そこっ！ おしゃべりしない！！」

「「ひっ……」」

ヘンなスイッチが入ってしまったらしい先生は、立ち上がると熱血的にこう言い出した。

「さあ講堂に行って実技の特訓をするわよ！ アイツにだけは負けれないわーっ！！ ホホホホ！！」

背後で誰かが火魔法でも使ってるんじゃないかってくらいに燃え上がる先生に、クラスみんなは若干引いたように後ずさりしたのだった。

ヒノエ先生の突発的な訓練のため、急遽講堂に赴いたぼくたち3組はそこで今一番遭ってはいけない人たちを見ることになってしまった。

「おや、あなた方も実技実習ですか？ 妙ですね、この時間3組は

教室で座学のはずでは？」

ニッコリと笑うのは、エクス先生その人だった。その後ろでは彼の担当である4組のクラスが吸引玉相手に特訓を重ねている。

ヒノエ先生は痛いところを突かれたのか、一瞬ウツとつまる。けれどもすぐに気を取り直してズイと前に進み出た。

「ウチのクラスの余りの実力の低さに急遽特訓を行うことにしましたの。4組はさぞかし優秀な生徒がお集まりでしょうから、少しぐらい場所を譲って下さいませんか？」

「いえいえ、ウチの生徒は確かに粒ぞろいですが、まだまだ経験不足です。中間試験も近いですから、お引取り願えませんか。」

「うふふふ」

「ははははは」

次第に眉間の皺が深くなっていくヒノエ先生と、何を言われてもニコニコしっぱなしのエクス先生の間に、どんどん威圧感のような物が増えていく。

異常に気が付いた4組と、最初から遠巻きに事態を見守っていた3組はともじやないけど口を出すことが出来ず、講堂は先生たちの言い合いばかりがヒートアップしていった。

「だーかーらっ、ちよっとくらい譲りなさいって言ってるのよ！
このうすらメガネ！」

「こちらに何の利益もない交渉に応じるわけがないでしょう、……
万年色ボケ女が。」

「ちよっと今なんて言ったのよ！　いつまでもネチネチネチネチ根に持ってるんじゃないわよ、腹黒男！」

「チッ、なんだってコイツが同じ教師粹なんだか。」

「本性出したわねっ。みんなっ、この人はね——あ。」

「……おっと。」

ここで生徒の呆れたような視線に気が付いたらしい二人は、一瞬固まった後コホンと咳払いをした。先にいつもの穏やかな表情に戻ったエクス先生が、気を取り直すようにこう提案する。

「良いでしょう、3組のために場所を空けますよ。ですが一つ条件があります。」

「……なによ。」

警戒するように身構えるヒノエ先生に対し、彼はこんなことを言い出した。

「貴方と私で勝負をし、負けた方がこの場を引くと言うのはどうですか？」

「乗ったわ。」

挑戦的にニヤリと笑った二人に、講堂の中が一気に盛り上がる。先生同士の本気のバトルが見れるんだから、テンションが上がると言うのも当然だ！

「わくわくするねっ、先生たちはどんな方式を使うんだろう！」

「思わぬ収穫ねー」

「貴重な観戦だ。一級の魔導師のバトルはそうそう見れたものではないからな。」

一人分コメントが足りないことに気が付いたぼくは、辺りをキョロキョロと探した。あれ、かなでどこ行っちゃったんだろう？

すると少し離れたところに、何やらチケットを振りかざして注目を集める男の姿があった。

「さア張った張った。ヒノエ先生、エクス先生どっちに賭けるかねー？」

「バクチにするな——っ！！」

すべての吸引玉のスイッチを切り端っこに寄せてから、ぼくたちは中央で対峙する二人の先生……いや、魔導師を固唾をのんで見守った。

「いつかアンタとは決着をつけなきゃと思ってたのよねえ」

「情けない姿を生徒の前でさらす前に降参した方がよろしいのでは？」

エクス先生は小ぶりの羽根ペンを取り出したから述式だとして、

ヒノエ先生が取り出したのは――糸？

「糸なんかどうやって使うと言うのかしら。」

同じ疑問を持ったらしいつづりちゃんが隣で呟く。ながーい糸の先端には、何か魔力を感じるオモリのようなものが付いてるみたいだけど……。

「行くわよ！」

そう叫んだヒノエ先生が、糸を一直線にパツと放つ。その軌跡上に水色に光る魔力の帯がサーッと引かれていく。もしかしてあれは「色式ですねえ」

「いろはちゃん。」

ひょいと後ろから出てきた彼女が、相変わらず目の見えないままに「んんん」っと呟く。

「糸を通じて、先端に付けられたオモリから魔力塗料を発しています。めずらしいタイプの色式の使い方ですねえ、あれなら遠距離でも攻撃できると。ふむふむ。参考になります」

糸を自在に操り、遠い距離にいる相手の頭上にどんどん魔法陣が描かれていく。しかしそれを黙って見ている相手ではなかったようだ。

エクス先生はサラサラと空中に呪文を書き出していき、ヒノエ先生の魔法陣が完成すると共に同時に発動させた。

「くらいなさいっ、アイスエッジ！」

「――強固な天蓋が覆う。ガイアシールドッ！」

広い範囲で氷の槍が降り注ぎ、講堂の床にあたっては碎けていく。もしこの床が魔力強化された物じゃなかったら、とっくにボコボコだったろう威力だ。

ところが槍が止んだところに立っていたエクス先生は、何事も無かったように防御魔法を解除した。そのまま相手に肉迫し、ペンを振りかざす。

「遅いっ」

「そうかしら？」

ニツと笑ったヒノエ先生は、後ろの左手で密かに展開させていた魔法陣を、飛び込んできた相手にカウンターを食らわせるように発動させた。

「アクアスライ！」

高速でくりだされる水の刃が、エクス先生の白い髪を少しずつ切り裂いていく。このままだと負けると判断したのか、エクス先生は一瞬ためらった後、意を決したかのように魔具を押し出した。

「っ……エクスプロージョン！」

「んなっ——」

驚いたのはヒノエ先生だけでなく、周りで見ていたぼくたちもだった。

至近距離で反属性（火と水）高位魔法を発動させたことにより、先生たちが居る場所を中心としてすさまじい爆発が起こったのだ。

「先生！」

ぼくたちは一斉に叫んでかけようとしたけど、あまりの熱気に近寄ることさえままならない。どうしようかとうろたえることしかできなかった。

そしてようやく白い水蒸気が晴れてきた頃、そこにあった光景にぼくたちは愕然とする。

「信じらんないっ、フツーあんな距離で爆破する！？　ブリザードッ」

「お前に負けるのだけはゴメンなんだ！　フレイム！」

なんと先生たちは何事も無かったようにそこで戦い続けていたのだ。ウソみたいに頑丈な人たちだ……。

「杞憂だったな。」

「なんか、あの人たちバトルハイになってない？　アタシたちの存在すっかり忘れてるわよ。」

委員長とつづりちゃんの言葉を聴いた3、4組はなんだか脱力してしまっ、自主練習をするためにそのまま校庭に出たのだった。

――はーはははー!!

――おほほほほー!!

(まだやってる……。)

校庭に出ても聞こえてくる高笑いと爆発音。ぼくがそれに気をとられていると突然後ろからガバあと圧し掛かれた。

「うわぁ!？」

「つーむーぎっ、きいてきいてー!」

「だーっ、重いわー!」

顔を見ずとも分かる相手をチカラいっぱい払いのけると、その後ろには見慣れない二人の人物が居た。

一瞬ぼくの目がおかしくなったのかと思った、だってそこに居た二人は鏡に映したかのように、おんなじような服におんなじような顔でおんなじようなポーズでおんなじ表情をしていたのだから。

男女の双子だと気づくと、彼らはくると一回転してややオーバーアクション気味に、すばらしくよく通る声で話し出した。

「はるか!」

「かなた!」

「二人合わせて遙か彼方でーす! よろしくっ!」

1拍のずれもなくユニゾンを奏でたその自己紹介に、ぼくはちょっぴり感動して音の余韻を味わってしまふ。完璧に揃ってた……。横からやってきたつづりちゃん、双子を見るとビックリしたようにこんなことを言う。

「今売り出し中の双子アイドルユニットじゃない。ここの生徒だったの?」

「そーそー、ちなみにこっちがオレの同室。ほら、前に紹介するって言ったデシヨ?」

そう言ったかなでが、髪の高い男の方をグイッと引き寄せる。二人はぼくよりいくぶん鮮やかな白に近い金髪で、きらめく紫の瞳は明るく、確かに芸能人というか『おーら』があるような気がした。

「どもーっ、かなちゃんの同室のかなたです。夢は世界中の女の子にモテることっ」

「やほーっ、かなちゃんの同室でもないはるかです。夢は世界中のイケメンにもてはやされることっ」

相方が喋ると同じだけ喋らないと気がすまないのか、はるかちゃんも揃って自己紹介をしてくれる。なんだか楽しい人たちだなあ。

「ぼくはつむぎ！ 3組のたんぽぽ組だよ」

「アタシはつづり。ま、よろしくね。」

「「公演とかで居ないことが多いけど、よろしくねーっ♪」」

歌うようにしめた二人に、ぼくはピンと来て一つ聞いてみた。

「ね、二人はもしかして歌式魔導師を目指してたりする？」

「「そうー、よく分かったねー。」」

「わあ、やっぱり！ 歌式の人に会うのって初めてなんだ、もし良かったら模擬演習してみない？」

顔を見合わせた双子は、ニッコリ笑うと承諾してくれた。

「「コンビのチカラ、見せてあげーるー♪」」

四角くラインを引いたフィールドの上で、ぼくは張り切って双子と対峙していた。その横で、つづりちゃんが若干不安そうに魔具を開け閉めしている。

「歌式と戦うのは初めてなのよね。大丈夫かしら。」

「へーきへーき、勝たなくたって良いんだよ。模擬演習なんだから。」

「いや、アタシが心配してるのは勝ち負けじゃなくて——」

その時、チューニングを終えたらしいはるかちゃんが魔具のマイクを片手にその美声で高らかに歌いだした。すぐさま彼女の周りに魔法展開を表す黄色い光が回りだす。

歌式は音式と系統が近いらしく、自分の発する声のリズムと音程で自然に呼びかけ、魔法を発動させるのだそうだ。

まずは防御を固めようと、グツと身構えていつでも発動させられ

るように周囲のリズムをよく聞いておく。つづりちゃんも同じくケータイ（魔具）に防御スペルを打ち出しているようだった。

ところがそこで双子の片割れ、かなたくんが相方に合わせるように歌いだしたのだ。二人の歌声はピタリとハモって驚いたことにどんどん威力を増していく。

「え、え？」

「来るわよっ」

一小節を歌い上げた双子は、パンツと手を合わせると踊るようにポーズを決めた。

「「サンダーストームッ」」

叩きつけるような雷の嵐に、つづりちゃんは素早く対応するのだけど双子のユニゾンに気を取られたぼくは上手く集中することができずに中途半端な防御をしてしまった。

「リバイア！」

「あ、わっ、シールド」

！ いけないっ、これじゃ前方しか守れない――

気づいた時にはすでに遅く、全身をしびれるような感覚が貫いていった。すぐに体の自由が効かなくなり、その場に崩れ落ちてしまふ。

「つむぎ！」

「うあっ、あっ」

舌までしびれて上手く動かせず、ぼくはしばらく喋ることもできなかった。

「「ゴメンねー、あそこまで直撃するとは思わなかったー」」

「ううん、ボーっとしてたぼくが悪いんだ。気にしないでよ。」

ようやく体の痺れが取れてきたぼくはそう言って苦笑する。あーあ、自分から持ちかけた勝負だったのにカッコ悪いとこ見せちゃったなー

簡単な治癒魔法をかけてくれていたつづりちゃんが、心配そうな

顔をして説明してくれる。

「だから不安だったのよ。音式と歌式って戦うととっても相性が悪いのよ。どちらも音を扱う方式だから一方が相手に引きずられて影響を受けやすいって聞いたことがあるわ。」

「うう、とっても良い勉強になったよ……。」

そっか、だから音に引きずられて上手く防御魔法を発動出来なかったんだ。……単純にぼくの実力不足って可能性もあるけど。

それにしても――と、双子を見たぼくは、憧れの眼差しで二人を見つめた。

「ユニゾン攻撃ってすごいんだね！ 息が合えば複合魔法も使えるんだ！」

複合魔法というのは、さっきで言えば『雷』と『風』を合わせた高位魔法のことで、一人で使うには相当の技術がないと扱えないと言われている。それをぼくと同じ学年のコが使っちゃうんだから、二人で息を合わせるっていうのはすごく便利なんだな。

そんなことを思っていると、思わぬ提案を彼らはしてくれた。

「「つむぎもやってみる？」 私／俺たちが合わせるから、自由に

歌魔法を使ってみてよー」

「ホント!？」

「「音魔導師なら、きっと上手くいくよー」

よおーっし、何事もチャレンジだっ

ここですうっと息を吸い込んだぼくは、少し離れたところに居たかなでが全力で逃げて行くことに気付かなかった。

必死で距離をとったオレは、それでも後ろから響く強烈な歌声（仮）に軽く頭痛を覚えてよろめいた。

「相変わらずひっでえ音痴……。」

絶対音感を持つものは、歌うと意外にも音痴が多いっつーのは本当の話なんだな、これが。

振り向けばバタバタと倒れていく3、4組の生徒たち。あーあー、本人は気づかずに気持ちよさそうに歌ってるよ……。オレ知らないかね。

ところでヒノエ先生とエクス先生の勝負はどうなったかと言うと――

「くだらん事で張り合つとらんで、壊した講堂の修理をせんか!!」と、言うニキ校長の一喝により、両者引き分けになったそうだ。

ドキドキしながら紙を受け取る。先生はニツコリ笑ってよくやったわね、と小さな声で呟いてくれた。

今回の中間試験の結果を見たばくは、小躍りしながら自分の席に戻る。実技は平均よりちょっと低いけど、でも筆記は結構いいセン行ったな。

「嬉しそうだな。」

「えへへー、まあね」

結果に興奮してみんなが騒ぐ中、隣に座っていた委員長がばくの様子を見てそう声をかけてくる。あの夢を見てから半月もたてば、インパクトも薄れると言うものだ。気づけば以前のように普通に喋れるようになっていた。

委員長は自分の成績表を見つめながら、難しい顔をする。

「私は思ったより伸びなかった。もう少し行くかと思っていたんだが……。」

「どれどれ? うっ」

そう言って見せてくれた成績に、ばくはグツとつまる。実技A＋筆記Aーって――

「……やっぱり委員長って空気読まない。」

「何っ? どういう意味だ、貴様のも見せろこのっ」

「ぎゃー！ やだやだやだっ」

掴みかかってくる委員長から、必死で自分の成績表を死守していると、後ろからひよいと取られてしまう。聞こえてきたのは彼女の声

「あら、結構良いじゃない。筆記はアタシより上だわ。」

「つづりちゃ……」

「みてよこれ、見事に平均だわ。」

そういつてピラッと見せてくれた彼女の成績は両方ともB＋うわ本当だ、ビックリするくらい平均だ。

「ちよっとつまんないわねー、劇的に良いわけでも悪いわけでもないっていうのは。あ」

あああ、ぼくの成績表がどんどんな人の手に……。つづりちゃんの手からぼくの成績表さらに引き抜いたのは、かなでだった。

しばらく見つめた後、ニヤあと笑ったその口からついにその成績が暴露されてしまう。

「1年3組 たんぽぽ組 つむぎ 実技C＋ 筆記A＋」

「……………」

「頭でっかちー」

「うわあああん！！」

知られたくなかった実技の成績をバラされてしまい、恥ずかしくて飛び掛っていく。けれども頭上高くに上げられてしまったのは背の低いぼくには届きようもない。

「返せーっ、このお！」

ならばと、もう一方の手に握られていたかなで自身の成績表を奪う。ふんっだ、人の成績をバラすんだから、自分の成績をバラされたって文句は言えないはずだ！

戦利品を3人で覗き込むと、ある意味では予想通りの結果がそこにあった。

1年3組 たんぽぽ組 かなで 実技S 筆記D－

「え、ちょっと、これどっちからツツコミを入れるべき？」

つづりちゃんのとまどったような声を機に、固まっていたぼくたち二人の声が同時に響き渡る。

「実技Sとは何だ！ アホか！」 「筆記Dって何だよ！ バカか！」

「ちょっとー、バカかアホかどっちかにしてくれよ。どっちもイヤだけど」

くらあと意識が遠のく委員長に比べ、ある程度の予想はついていたぼくは再度かなでに掴みかかる。

「筆記D一って何さ！ どうやったらそんな成績が取れるんだよっ、せっかくぼくが教えたっていうのにキミはもーっ」

「まあ待てつむぎ。以前のオレとは一つ違う点がある。」

「？」

「自分の名前は間違えずに書けたぜ！」

——ッパーン！

無言で頭をはたいて静かに涙をぬぐう。もう金輪際コイツに教えてなんてやるもんか！

「S？ Sとはなんだ、Aのさらに上に段階があったと言うのか……バカな……」

激しく落ち込み始める委員長は、問いただす気も起きなかったようだ。

「どうじゃ、今年の新入生は」

「校長。」

職員室の机の上で、困ったように何かのデータを見つめていたヒノエは声をかけられてふと顔を上げる。転移装置の鏡を潜り抜けやってきたのは、小さな体から強大な魔力を発する校長であった。ヒノエは見つめていた用紙を校長に渡すと、頬に手を当てため息をついた。

「実技の方で潜在的な魔力の量を測定しましたでしょう？ その結

果が気になる生徒が一人居まして。」

「ほう？　どういうことじゃ」

「なんというか、魔力の回復スピードがダントツに遅いんです。元々の魔力もそこまで多いほうではないですからこれから先の依頼実習での危険性を考えると不安になってしまつて……。」

校長は渡されたデータを目で追ひ、問題の生徒の名前をチラリと見る。ふうむと唸つた彼女はデータを担任に返した。

「確かに消費する魔力と比べ回復スピードがちと遅いようじゃの、ようは異様に燃費が悪いというワケか。」

「ええ、そうなんです。下位魔法を連続で5発も打てばすぐに空っぽになつてしまふ計算ですわ。」

多少古めかしい動作でアゴをなでていた校長は、氣をとりなおしたようにぽつぽと手を振り、こう判断を下した。

「まあ、技量だけがすべてではないからの。訓練を重ねるうちに多少は改善されるだろうて……よいよい、しばらくは様子見にしておけ。依頼実習の危険性は優秀なリーダーだから何とかカバーできるじゃろう。」

「わかりました。」

それでも晴れない顔つきのヒノエは、用紙とのにらめっこを再開しながらぼつりと呟いた。

「誰よりも努力家のアナタに才能がないだなんて可哀想に。……つむぎ。」

あ、と声をあげた彼女は、今まさに出て行こうとした校長の背中に声を掛ける。

「忘れてました。その魔力計測器なんですが割れてしまったので新しいのを購入できますか。」

「なんじゃ、寿命か？　アレも古かったからのー」

鏡から身を引き戻した校長に対し、いいえと小さく首を振るヒノエはどこか引きつった笑いを浮かべてこう答えた。

「一度に魔力を注ぎすぎたせいで、測定値の限界を超え爆発しまし

た……。」

「…………。」

今回使用した測定器は正式な魔導師も使うもので決して学生用ではない。強大な魔力を誇る校長の測定にも耐えられるそれが爆発したということは一――

「なんとまあ、今年は極端な生徒の多いことよ。」

「ホントに。でもそのコは筆記がボロクソなんです。あの二人を足して2で割れたら良いんですけどねえ……。」

そう上手くは行かないことを知っている教師らは、そろってため息をついたのだった。

5章 『森の息吹く祈れば救われるってさ』

委員長と真剣に見つめあい、つないだ手をぎゅっと握る。お互いに何も言わぬままぼくたちはただその合図を待った。呼吸さえ止まってしまいそうな一瞬――

「レディー……ファイッ！」

――ダァン！

合図と同時に、ぼくは相手のこぶしを机に思いっきり叩き付けた。勝利を勝ち取って、おもわず飛び上がって小躍りをする。

「やったあ！ 10人抜きーッ」

「ぐおお……」

悶絶する委員長をよそに、教壇の上にうやうやしく置かれていた『豪華ケーキ食べ放題チケット』の賞品目録を受け取りに行く。へへへ、いつ行こうかなあ、美味しいんだよねこのケーキ屋さん。うっとりとなんか思いついていたぼくは、足首をガツとつかまれてぎゃあと小さく悲鳴をあげる。見ればゾンビさながらに委員長が這い寄ってくるところだった。

5章 『森の息吹く祈れば救われるってさ』

「納得いかん……何か不正をしたのではないだろうな。」

「失礼なっ、ぼくは正々堂々自分の力だけで勝負しました！」

「その体格のどこからそんなパワーが出てくるのだ！」

あまりの必死さにぼくは若干引きながらも、確認のために聞いてみる。

「さくら君が必要ないからって、提供してくれたこのチケット、欲しい人みんなでアームレスリングして決めるんだったよね？」

「……。」

「委員長、そんなにケーキ食べたかったの？」

バツと離れて否定しはじめる委員長だったけど、ぼくの推理では彼はかなりの甘いものの好きと見ていた。そっか、だからあんなに必死になって（それこそコッソリ自己強化の魔法を使ってまで）勝ち抜いてきたんだね……。

「その努力に免じて譲ってあげたいところだけど、勝負は勝負なんだよ委員長。」

「だから違うと言ってるだろーに！ 切なげに肩を叩くなッ」
急遽開かれたチケット争奪アームレスリング大会はぼくの優勝（とは言っても3組の中でだけどね）で幕を閉じ、みんなそれぞれ席に戻る。依頼実習の指示待ち時間にしてはなかなか良い余興だったんじゃないだろうか。

「くそー、男としても魔導師としてもプライドズタボロだ……」

とは言え、まだまだ納得していなさそうな人が約1名いるのだけど。うーん、さすがに魔法強化付きの男の人に、素のままのぼくが勝っちゃったのはまずかったかな……。普段からこの人にはお世話になってるからなんとかしてあげたいけど。あ、そうだ。

「じゃあさ、ぼくが委員長の半額出してあげるから一緒にケーキバイキング行っていくのはどう？ キミも一応準優勝だもんね。」

「え。」

「今日の依頼が終わったら、行けるかなー」

「ん な っ、そ っ、それはまさか、デッ、デデデ、デー……」

その時、どこから現われたのか降ってわいたと思えないかなでが、どもりまくっていた委員長の髪の毛を引っ張ってのけ反らせた。

「ハイさんねーん。そんな余裕はなくなりましたー」

「ごわっ」

その後ろから現われたつづりちゃんが、ブリッジ状になる委員長の体の上にポンと書類を置く。

「抜け駆けは許さないわよ、アタシだってつむぎと一緒にケーキバイキング行きたいんだから。はい、依頼書。」

「行くときは仲良く4人で、だぜー。」

「わかった、わかったから髪を引っ張るのをやめろ！」

ようやくエビ反りから解放された委員長は、ちょっぴり涙目になりながらクルクル丸められていた依頼書を広げた。

「まったくお前らと来たらいつもいつもいつも私の邪魔を……。」

「あーらお邪魔だった？ それはし・つ・れ・い」

「つづり！」

ガアッと吼える委員長の横から手元を覗き込み、今回の依頼実習の内容を読んでみる。ランクはC。用件は通行の邪魔になっている岩を撤去して欲しいとのこと。

「なんだかちよっとランク高いね、この前の依頼が最終的にBだったからかなあ。」

「フッ、それだけ私たちに期待をして下さってるということだろう。」

自信満々に髪をかきあげた委員長だったけど、場所の記載を見て目を見開く。

「なにっ、ヒクサクだど！？ 往復で2日はかかるではないか！」

「そー、だからケーキバイキングに行ってる余裕はねーんだって。」

だははー、とゆるい笑いにガツクリと脱力する委員長。やっぱりそこまでケーキのことを……。

ヒクサク——大陸鉄道をルアンで乗り換え、小さな列車でひたすら揺られた先にある村。その主な収入源は林業で、大自然の中から切り出した材木は首都でも人気が高い。

「また春を売る村としても有名で、ヒクサクのあちこちには売春宿が軒を連ねている。」

「……その観光ガイド、一体誰向けのを買ったのよ。」

駅の売店で買ったガイドブックを頭の上に乗つけて、かなではにへーっと笑う。

「いいなアー、オレも金があったら春を買いたいもんだぜ。」

「春が買えるの？　ぼくも欲しい！」

「馬鹿を言うな！」

なぜか焦ったような委員長のツツコミがコンパートメントに響き渡る。その声が漏れ出てしまったのか、ちょうど通りかかった車掌さんが覗き込んで聞いてきた。

「どうかされましたか。」

「あつ、いえ何でもありません。お騒がせしました。」

そう言って手をふる委員長の袖口からキーアークが見えたのか、車掌さんはニツコリ笑ってキップを切るペンチをカチカチと鳴らす。

「おや魔導学校の生徒さんでしたか。ご苦労様です。どうですハイヤー平原は、広いもんでしょう。」

「ええ、まるで緑の海のようなですね。」

キップを渡しながらそう答えるつづりちゃんの言う通り、窓から見える景色は一面草で、初夏のさわやかな風を受け本当の海のようにうねっているようだった。

順番にキップを切ってもらうのを待っていたぼくは、進行方向にふとその緑の海の中にポツンと染みのような物が見えたような気がして、目をこらす。だんだんと近づいてくるそれは、みんな同じそろいの紺のローブをまとった人の集団だった。

「ああ、アレはCHですね。」

「しー、えいち？」

パチンとぼくのキップに穴をあけた車掌さんは、通り過ぎていく一団を目で追って声を潜めて話してくれる。その言い方はどこか腫れ物に触るように言葉を選んでいるようだった。

「最近新しく出てきた宗教団体ですよ。終末がやってくるだなんて言っって不安を煽って入信させるんです。祈りすがれば救われるだなんて言ってるだけで、別段悪いことはしてないですから害はないんですけどね。どうも私にはうさんくさい——おっと。」

喋りすぎたと思ったのか、口をつぐんだ彼はそそくさと会釈をし

て仕事に戻っていつてしまう。窓の外を見れば紺色の集団はすでにはるか後ろに見えるだけになっていた。

「CHかー、聞いたことないね。」

ちよべんタイ
「CHの略だったりしてね。」

チヨムレゼルがけツ
「CH……」

ビービー
「CHじゃね!？」

「「……………」」

口に出すのものはばかられる下ネタを言ったかなでを冷ややかな目つきで見やり、みんなは何事も無かったように話を再開する。

「祈りすれば幸せになる、かあ。ベタだけどあれだけ人が居るってことは結構流行り始めてるのかな。」

「宗教関係はデリケートよー、関わらないのが一番ね。」

「オレの頭わるいのも、神サマにすれば治るかな。」

「「……………」」

ふたたび訪れた沈黙に、めずらしくかなでが一瞬焦ったような顔をする。ぼくたちは無言のままバッグから用紙とペンを取り出し、目的に着くまで急遽1対3の授業が開始されることになったのだった。

「うわーオウボウだー!! こんなところまで勉強したくねえって、みんな落ち着け、な? な!？」

「そう言うのはテストで赤点取らなくなってから言えーッ!」

「ひでえ目にあった……オレもうダウン寸前、知恵熱で脳みそ爆発しそう……。」

バタツと行き倒れたかなでを放置し、みんなはヒクサクの様子をそこで初めて見た。

駅の改札を出たところからすでに緑のじゅうたんが広がっていて、メインストリートを覆うように、木々の枝が屋根を作っている。よくある『村に緑を植えた』のではなくもとあった森の中に村を

作ったという印象だ。

「列車降りたときから思ってたけど、涼しいね。」

「標高が少し高いからだろう。実に爽やかで空気中の魔力も多い。魔導師にとって心地のいい環境だな。」

確かに深呼吸してみると、体の隅々にまで魔力が満ちていくような感じがする。やっぱり自然が多い場所が良いもんだなあ……。

ぼくたちがそう癒されていると、道の角から突然現われた少年がゆっくりと近寄って来た。年はぼくたちより2つくらい下くらいだろう。柔らかい栗色の髪に藍色の瞳の彼は、やけに大人びた表情でこちらへと話しかけてきたのだった。

「お待ちしておりました。魔導学校からの生徒さんですね。」

「え、ええと、そうだよ。」

「依頼主であるゴドウィンの使いの者です。主人よりあなた方をお迎えするよう遣わされて参りました。ついてきて下さい。」

クルリと体を返した男の子は、そのままスタスタと歩いていってしまう。ぼくたちは慌てて荷物を抱えなおし、その後を追った。

木漏れ日が落ちる明るい通りを何度か曲がっていくと、やがて大きなお屋敷が見えてきた。この森の中の家にふさわしく、屋根は葉っぱで覆われるようにうずもれ、庭にはたくさん樹木が自生しているようだ。

案内されるままにお屋敷に入ったぼくたちは、そこで中の様子にもビックリしてしまう。家の中まで木の根っこが入り込んでいる……！？

呆然としたまま2階に行き、大きな扉の前で使いの男の子が小さく3回ノックをする。

「ゴドウィン様、魔導学校の方をお連れいたしました。」

——入れ。

重々しく響いてきた声に、ぼくたちの背筋はピンと伸びる。緊張するなあ……。

両開きのドアが開けられ中に入ると、そこには大きな机の前でた

くさんの書類に埋もれる男の人が居た。白くなり始めた髪を整髪料でなでつけた彼は、鋭い眼差しであちこちの紙を見ながらひっきりなしにサインやハンコを押していく。

「あ、あの……」

「待ってくれ、これが終わったら——ああ出来た。」

ドンと書類を一纏めにしたゴドウィンさんは、それでも次の山を引き寄せながらぼくたちに早口で話し始めた。

「いいか、すでに話は通っていると思うが、君たちに頼みたいのは山道をふさいでいる岩の撤去だ。どうも魔法が絡んでいるらしくそこから先に行けなくなってしまった。その問題を調べ解決してくれ。場所など詳しいことはそこにいる使用人のアトから聞くと良い。以上だ。頼んだぞ。」

そう一方的に言われ、あっけにとられて口を挟めないでいる内に部屋を追い出されてしまった。ぼくたちの疑問は自然と男の子——アトくんに向かうことになり、代表してつづりちゃんがこう訊ねる。「ちょっとどうなってるのよ？ 依頼主であるあの人が付いてくるんじゃないの？」

「ゴドウィン様はお忙しい方ですので、僕が代理と言う形になります。主人は近頃、道をふさいだ岩の問題もあり、寝る間も惜しんで仕事をしていらっしゃるようです。ご理解ください。」

「いやまあ、それは別に良いんだけど……。」

それでもどこか納得が行かないままに、ぼくたちは現場まで案内してもらった。村の中を歩きながらアトくんは説明を始める。

「今回皆様に頼みたいのは、ヒクサクが主に伐採を行っている主要な3つの山の内、一番大きい山です。数週間前に突然山の入り口に巨大な岩が出現し、伐採作業が完全にストップしてしまいました。別の入り口から登ろうとしたのですが、森全体に結界が張られているように登れないのです。」

「ケガ人とかは出てないの？」

「今のところは居ません。ここです」

そう言って指す方向を見ると、確かに山道の入り口にドーンと置かれていたのはとても大きな岩だった。砂色の表面はザラついている、触るとポロポロと崩れ落ちて足元に小さな山を作る。

「なるほど、確かに魔力を感じるな。」

「でっけー、5委員長ってどこ？」

「なぜそこで私を単位にする。」

「幅は10委員長ってとこだね」

「おい。」

「重さは150委員長ってどこじゃないかしら。」

「き・さ・ま・らあぁー！」

あははと和やかな雰囲気のおぼくたちに、アトくんは少しだけ不安そうにこう尋ねてきた。

「対処できそうですか……？」

「任せてちょうだい。全体的に結界が張られてるけど、こういった物には必ず『要』があるものなのよ。」

「そこを突けばちよちよいのちよいってことさー」

さっそく調査を開始したおぼくたちは、4手に別れて魔力の出所を探してみる。このやり方はその人が何魔導師かで少しやり方が変わってくるんだけど、音魔導師のおぼくの場合はとにかく耳を澄ますことから始まるんだ。

「――。」

森の鼓動の中に、あきらかにそれとは違うリズムを感じる。少しだけざわついたようなノイズの出所は――

「あれ、やっぱりみんなもここ？」

「みたいだな。」

パツと目を開けると、そこにはおぼく以外の3人も終結していた。最初の岩の前で同じように立っている。

「要はやっぱりこの岩かぁー、分かりやすいっちゃ分かりやすいよな。」

「結局これを破壊しないと、結界も解けないってことだね。」

そう言って大きな岩を見上げる。ぼくたちのチカラで壊せるかなあ
「とにかく、今日は日もくれてきて危ない。作業に取り掛かるのは
明日にして今日は一旦戻ろう。」

委員長の指示で、ぼくたちはその場を去ることにする。夜はマモ
ノとかが出てきて危ないからね。

事態を見守っていたアトくんが、サッと案内に立ってくれる。

「宿を用意してありますので、こちらへどうぞ」

夕飯を食べ終わったぼくたちは、女子と男子の2部屋に別れて寝
ようとしていた。でもぼくはなんとなくスツキリしない疑問を抱
えていて、つづりちゃんにぶつけてみることにする。

「あの結界、いったいダレが張ったものなんだろう。」

そう、アレは明らかに人為的な物で、ダレかが意図的にあそこに
張ったとは思えないようなものだったんだ。その疑問に返ってき
たのは、いつもどおりに冷静で客観的な意見だった。

「分からないわね。ただのイタズラにしちゃ手が込みすぎて……
けどアタシたちは気にせず依頼をこなすだけよ。」

「でもっ」

「あのねー」

そこでベッドから起き上がったつづりちゃんは、ぼくの鼻をぶに
っと押すところ忠告してきた。

「気持ちは分からないでもないけど、アタシたちは依頼でここに来
てるのよ。頼まれた仕事をこなして速やかに学校に帰らないと。余
計な詮索までしちゃトラブルに巻き込まれるわよ。」

「うー」

でもなんだか気になるんだ。あの結界はどこか、森と同調してい
るような気配があった。まるであの森自身が自分を守っているよう
なそんな――

——ガシャン！

「何！？」

物思いにふけていたぼくは、隣から聞こえてきた音に思わずビクリとする。ガラスを叩き壊したかのような音は——かなで達の部屋からだっ

「ちよっと何事！？」

慌てて廊下に飛び出て、男子の部屋をノックする。ええい、返事なんか待ってらんないよっ

ボタンと扉を押し開けて入ったぼくたちは、部屋の中の惨状に思わず息を呑む。ベッドは壊れ、シーツはずたずた、あたりに枕から飛び出た綿が舞い散っている。

その中で、壁に寄りかかりうめく人物が居た。おなかを押さえ、立ち上がろうとした彼の元に駆け寄る。

「委員長っ、一体なにがあったの！？」

「奇襲だ……翼の生えたマモノがいきなり部屋に突っ込んできた……。」

治療魔法が得意なつづりちゃんが、彼のおなかに手を当てて治療を開始した。そっちを任せて、ぼくは割れた窓に駆け寄る。

「かなではそのマモノを追って出て行った……一人ではあの相手は危ない……。」

その弱々しい声を背中に、ぼくは2階の窓から飛び出していた。スタツと通りに着地し、耳を澄ます。

——ギョオオオオオン！

（あっちだ！）

聞こえたマモノの叫び声の方角を特定し、そちらに向かって駆け出す。途中でゴミ箱を蹴り倒してしまったけど、今はそんなこと構ってられないっ

たどり着いたそこは、例の岩と結界がある山の入り口だった。岩を背に、巨大な翼をもつマモノ・デビルスティングァーがかなでと対峙していた。

「大丈夫!？」

「よっ、つむぎ。来てくれたの？」

いつもどおりの軽い調子の言葉だったけど、その視線はじっとマモノに据えられている。その腕には赤い線が長く走っていた。

「腕が――」

「んあ？ ああどうりでなんか痛いと思った。」

治癒をかけてあげるヒマもなく、突っ込んできたデビルステインガーを、両脇に跳んでよける。鋭い爪がぼくの頬ギリギリをかすめ背筋が寒くなった。そしてそのまま戦闘が開始される。

「何かマモノにうらまれるようなコトでもしたの!？」

「えー、あれかな、これかな、いやいやもしかしたらあの時のことが――」

「どれだけ悪いことしてるんだよっ！ うわっ」

とぼけた返事に注意をそらされたのがまづかったのか、一瞬の隙を突かれてマモノに引き倒されてしまった。覆いかぶさるように押し掛かれ、荒い息遣いがかかるのを感じる。い、いけない――
ところが今にも爪でのど元を掻き切られようとしたその時だった、マモノの顔が一瞬妙な具合に歪み動きが止まる。その様子はヒトが臭いものを嗅いだ時そっくりの動きで……ってまさか、さっきゴミ箱を倒した時の臭い!？

「誤解だよっ、ぼくちゃんとお風呂入ったから!」

何をこんな場面で弁解してるかと心のどこかで思ったけど、気づかない内にこのマモノに語りかけていたんだ。まるで、人の言葉が分かるような気がして。

（え――?）

そのフシギな感覚に戸惑っていると、マモノの上にドスンと何かが飛び乗って、実に楽しそうな声がぼくの上にも降ってきた。

「ダメだなく、そんな強引じゃ女の子にモテないぜー?」

「かなでっ」

羽根ペンをデビルステインガーの背中につけたかなでは、そのま

ま打ち出すように魔法を発動させた。

「パラライズ！」

バチバチッとすごい音がして、雷属性の電流がマモノの体中をか
けめぐる。ドサリと横向きに倒れたデビルスティーナはビクビク
と痙攣して大人しくなった。

倒れたばくに手を貸しながら、かなではニイッと笑う。

「やっぱ女の子を誘うときはスマートにいかないとな。」

「ありがとう、でもモテたことは無いよね。」

「あいたた、それ言われると痛い。」

立ち上がってお互いの傷の確認をしていると。宿の方から委員長
とつづりちゃんがやってきた。ボロボロのぼくらと倒れているマモ
ノを見て何があったかを悟ってくれたようだった。

「何とかなったみたいね。」

「オレとつむぎは最強コンビだからな！」

「あーハイハイ。」

まだ多少ふらつくのか、ゆっくりとした動作の委員長は、倒れて
いるデビルスティーナに近づくとしばらく観察した後、突然鋭く
声をあげた。

「もう一度麻痺魔法だっ、早く！」

「え——？」

その意味を図りかねていると、突然羽ばたいたマモノは辺りの砂
を巻き上げ結界の向こう側へと逃げていってしまった。信じられな
い……あと1時間は動けないと思ってたのに。

「逃がしちゃったわね。結界の内側に逃げ込んだってことは、今回
の黒幕はアイツなのかしら。」

つづりちゃんが睨むように黒い森を見上げる。余計な詮索をする
など言った彼女も、今回の襲撃のことで考えを改めたようだった。

挑戦的に微笑み、魔具をパチンと閉じる。

「明日が勝負よ。」

「みなさん、昨晩は大変だったようですね。お怪我の方は大丈夫ですか？」

翌朝、朝食を取っていると心配そうな顔をしてアト君がひょっこりと顔を出した。ぼくたちは軽く笑って手をふる。

「だいじょぶだいじょぶ。魔導師はこんな傷しよっちゅうだからね。」

「治癒魔法と言う便利な物もあるのだ。心配には及ばない。」

それなら良いんですが、と少しだけ微笑んだ彼は、今日も僕が着いていきますと先に立って歩き出した。宿屋のおばさんにお礼を言っただけでぼくたちもその後を追う。

「アトの後を追う。なんちってー」

「絶対零度のツツコミが欲しいようだな……？」

「きゃー、串刺しにされるー」

ピキピキと鋭い氷の魔法展開を始める委員長。笑いながらぼくの後ろに避難したかなでは、ふとこんな話を話し出した。

「そういや、オレ昨日こんな風にマモノの背中に乗った時に、首の後ろにコッソリ×印つけといたのよ。」

「×印？　なんでそんなことしたの？」

「んー、なんとなく。でも意味はあったみたいだし良いんじゃないかね。そうだろ、アトくん」

ハッと気づいたぼくたちは、先を歩く少年の首元に目をやった。かなでがほんの少しだけ鋭い声で訊ねる。

「その首の後ろのマーク、オレがつけたヤツだよな。」

そう声を掛けられたアト君は、振り向きもしないで淡々とうろ返してきた。

「……驚いた、そんな仕掛けをしてたんだ。」

「まあね、昨晚つむぎが無意識の内に話しかけた時点で何かおかしいと思ってさア。もしかしたらあのマモノは人語を理解している。人が化けてるんじゃないか。なーんてね。」

おどけるかなでとは対照的に、にわかには厳しい表情になった委員長が横から進み出て詰問する。その手からはバチバチと静電気が音を立てていた。

「どういふことだ。なぜ我々を襲った。返答によつては――」

「あなた達が悪いんだ。言われるままに結界を破壊しようとするから。」

ゆっくりと振り返るアトくんはこれまでとは違った感情を瞳に宿らせていた。憎むような激しい感情に、ぼくはひるんで一歩後ずさりしてしまう。

「ゴドウィンが先導して確かにこの村は以前より格段に豊かになった。だけどそれと引き換えに山は死んでいく一方だ。」

だから僕がドリアド（木の精霊）のチカラを借りて結界を張ったと言うのに、あなた達は依頼だからという理由でそれを破壊しようとする……！」

一歩踏み出してくるその足がにわかには毛に覆われ、その小柄な姿がどんどん凶悪な魔獣へと変化していく。

もはや完璧なハウンドビーストに姿を変えた彼は、とどろくような咆哮を一つしたかと思うとその身に紺色の光をまとった。

「考えたことがあるのか！　あなた達に依頼される内容は世の為に
なる良いことばかりではないことを！　自然破壊を進める手伝いを、
平気ですと言うのか！！」

プレッシャーに押しつぶされそうになるのを、なんとかこらえながら息を呑む。そんなこと、考えたこともなかった……。

「ぼくはただ、困っている人を助けただけで……。」

「ハッ、魔導学校の生徒らしい白痴的な考え方だ、真意も見抜けな
いくせに。」

その言葉にうつむいてしまう。すると委員長が横からかばうように進み出た。

「どちらにせよこちらでも仕事なんぞな。綺麗事ばかりを言ってる
んだ。邪魔だてすると言うのなら排除させてもらおう。」

「やれるものなら。」

静かに言ったマモノは、次の瞬間咆哮するところへと猛突進をしてきた。その身にまとう藍色の光が次々と発射され、地面にぶつかりあちこちが隆起する。

下から押し上げられる感覚に、ぼくはバランス感覚を失いその場にひざまずく。それはみんなも同じだったようで、迫り来るハウンドビーストを見つめるだけしかできなかった。一人を除いては

「クッ、ライトニングバースト！」

委員長が放った雷の魔法が、みんなを守るように壁となって降り注ぐ。真正面から突っ込んでこようとしたマモノは、寸前で急ブレーキをかけ右へと跳んだ。

「みんな、早くっ」

パツと立ち上がったぼくたちは、そのまま一箇所へ駆け寄る。事態に気がついたハウンドビーストがこちらに向かって吼えた。

そしてその大きな口に藍色の光をめいっぱい溜め込み始める。それをみたぼくたちは、全員で防御魔法を固める。

マモノはそれを見てニツと笑い、限界まで達した光をものすごい勢いで発射した。それは威圧感を伴いながらこちらへと来るのだけだ。

「今だよっ」

「なに！？」

一斉に防御を解除したぼくたちは、本当にギリギリのところまで横っ飛びに回避する。向かってきた光はぼくたちの後ろにあった岩へと命中し、すさまじい音をたてながら岩は半分崩れ落ちた。

「己の立ち位置すら把握できていないとは、戦闘ではこちらが一枚上手のようだったな。」

「……クッ」

委員長の言葉にマモノは変身を解き、屋敷の使用人の少年へと戻っていた。

「今の衝撃で結界も崩れたみたいね。」

つづりちゃんの言う通り、今まで辺りに満ちていた結界の魔力は、だんだんと弱まっていくようだった。

そして山へと向かう道を見ていたぼくは、そこに誰かが倒れているのを見た。

（あれは……。）

女のヒトによく似た身体つきだけど、全体的にうっすらと緑がかっているそれは、魔導師とは比べ物にならないほど純度の高い魔力を放っていた。

こちらをじっと見つめるその目は白い部分がなく、深い緑のガラス玉をはめこんだような瞳だ。

「ドリアード……。」

おそらくこの山の精霊であろう彼女は、哀しげに顔を伏せるとうずくまり、小さな宝珠へと姿を変えてしまった。

「あっ、待て貴様ッ」

それまでうつむくばかりだったアト君は、ふいに駆け出すとその宝珠を掬い取るに持ち、山の道を登っていく。

あっけにと取られていると、突然その近くに紺色の光が急速に集まり、一人の赤い髪の女の子が空中から現われた。

「ルークッ、やられたのか!」

「……宝珠は手に入れたよ、ドリアードは姿を変えてしまったけれど。」

「良いんだよそれで!」

その女の子は、キッとこちらへ視線を向けると指を向けて宣言するように言った。

「おいテメェら、これ以上あたしらの計画の邪魔をするとブツ殺されるからな! 今みたことは忘れる! 行くぞ、ルーク」

「……。」

彼女が右手を空に掲げてブツブツと呟くと、その手のひらから二匹のガーゴイルが出現した。その足に掴まり、二人は飛び去ってしまう。慌てて駆け寄っただけで、その時にはもう姿が見えなくな

っていた。

「今のガーゴイル、ルアンの遺跡に居たヤツじゃない！」

つづりちゃんの発言で、ぼくはハツとする。あの女の子の腕にあったチェスのマークは、例のミノタウロスと同じでは無かっただろうか。

「ヤツらは宝珠を狙っているのか。一体何をするつもりだと言うのだ……。」

宝珠はひとつひとつの魔力は弱いけれど、たくさん集めれば相乗効果でとんでもない魔力を生み出すって委員長言ってたっけ。つまり彼らは、大量の魔力を集めて何かをしようとしている……？

みんなの意見を聞こうとした時、その異変はやってきた。

——ゴゴゴゴゴ

「う、うそ……。」

突然の地鳴りがしたかと思うと、目の前の山が一斉に枯れ始め、森はみるみる茶色のハゲ山へと変化していったのだ。あーあ、と頭を掻いたかなでが呟く。

「最後の砦だったドリアードが居なくなったから、限界だったんだろうねー。」

誰も何も言えないまま立ちつくしていると、ふいに後ろからバタバタとかけよってくる気配を感じた。振り向くとそこには今回の依頼主ゴドウィンさんの青ざめた顔が。

「こ、これは一体どういうことだ……。」

「ゴドウィンさん、実は——」

ヘナヘナと崩れ落ちた彼に説明をしようと手を伸ばした委員長を振り払い、一気に激昂した彼は叫び始めた。

「私は森への伐採を再開させるために結界を解けと命じたのだぞ！

山が枯れてしまっただけは何の意味でもないではないか！」

「ですから」

「おたくの使用人のアトが犯人だったよ。」

淡々と言ったかなでに、ゴドウィンさんは一瞬きよとんと固まる。

その口からこぼれたのは、にわかには信じられない言葉だった。

「誰だそれは。私の家にはそんな名前の使用人は居ないぞ。」

「え？」

どうということかと訊ねる隙も見せずに、彼は怒りを収めることなく道の往来でわめき続けた。

「まったく、なんて期待外れなんだ。依頼を失敗したと言うのに悪びれもせず、あまつさえ架空の人物をでっち上げるとは……」

「ち、違う——」

「帰れ！ 依頼は失敗したのだから、ビター文払わないからな。学校にもそう報告をしておく！」

帰り道、ぼくたちはしよげ返って誰も何も言わないまま電車で揺られていた。依頼に失敗はつきものだけど、こんな事であるだろうか。

「どうしよう、怒られるかなあ。」

「大丈夫、きちんと話せば先生もわかってくれるわよ、きっと。」

優しく言ってくれるつづりちゃんに、ぼくは弱々しく微笑んで窓の外を見た。来たときと同じように宗教団体のCHがゾロゾロと夕暮れの草原を歩いている。

（目先の事しか見ていない、魔導学校の生徒か。）

アト、いいや、ルークが言った言葉が頭の中をぐるぐると回っていく。

そんな風にして、今回の依頼はちょっぴり苦い経験と、心のしこりを残して終わったのだった。

「だーかーらあ、あたしに一言くらい感謝の言葉があったっていいだろお!？」

「ポーンの助けがなくても、なんとかなった。」

「つかー、かわいくねえ。」

どこことなく薄暗い聖堂の中を、赤い子供と茶色い子供が連れ立って歩いていた。コツコツと響く足音がどこか硬質な雰囲気を感じさせる中、二人は目的とする祭壇の前へとたどり着く。

巨大な時計盤がそこにはあった。床に設置されたそれは広間のほとんどもを占拠し、ピクリとも動かずに沈黙している。

自然と背筋を正した子供たちは、裁断の影から出てきた人物に向かって軽く頭を下げた。

「お帰りなさい、ルーク、ポーン、机上の駒たちよ。」

どこまでも穏やかな声がよく似合う青年だった。冷静な眼差しは灰色。肩口で切りそろえた薄紫色の髪の毛はなびかず、動かなければまるで一枚の絵のように見えただろう。彼に向かって赤い少女、ポーンは意気揚々と話し始めた。

「ビショップ！ 命令通り宝珠をとってきたぜ！ ルークのヤツが他人に見つかるへましたからさあ、あたしが助太刀したんだ。偉いだろう？」

「宝珠エメラルドを『一人で』手に入れて木ました。」

淡々と言う少年を、ポーンは軽く睨みつけて小突く。少しくらい自分を立ててくれても罰は当たらないだろうに。

ビショップと呼ばれた青年は、威厳を崩さない程度にほんの少し目を和らげる。そして祭壇から降りて時計盤を踏まないように二人の元に歩み寄った。

「二人ともご苦勞様でした。宝珠エメラルドは大地の力を持つ力強い宝珠、入手できなかったアクアマリンの分もおぎなってくれるでしょう。」

「ふふん、そうだろう。これで前回の失敗はチャラだぜ。」

「アクアマリンも、あるにこした事はないと思うけど。」

「オメーはいつも一言余計なんだよっ、この！」

はたこうとする手からすると逃げて、ルークは懷から深い緑に

きらめく宝珠を取り出しビショップへと差し出した。一瞬ピクリとためらうような動作を見せ、大人しく渡す。その様子を見て取った青年は、彼の頭を優しく撫で諭すように話しかけた。

「心配ありませんよ、ドリアードは姿を変えてしまいましたが死んだわけではないのです。机上の王が復活した暁には、きっと精霊が自由に生きれる素晴らしい世界に変えてくれるはずです。」

「……うん。」

そばで話を聞いていたポーンはケツと悪態をついた後に、ニヤリと笑ってこう言った。

「ルークの願いは辛気くせえんだよ。あたしなら断然ヒトなんか居ない世界を作ってもらうぜ。みんなマモノになって平和に暮らせば万々歳だ。」

「ポーンの発想は、野蠻。」

「ンだとお!？」

また火花を散らし始める二人の間に割り込み、ビショップは苦笑する。

「まあまあ、その『筋書き』を王に書いてもらうためにも、私たちは動いているのですから。喧嘩はおよしなさい。さてと……。」

何らかのチカラでふわっと浮き上がった青年は、手に入れたばかりの宝珠を時計盤の中心にそっと置いた。

途端に激しい緑の光が宝珠から吹き出し、時計盤全体を覆う。4時を指していた時計の針がゆっくりと動き出し、2回転を終えたところでまた元のように停止した。

「これで6時。ようやく半分までこぎつけましたね。」

光を失った宝珠を数字の6のくぼみにカチリとはめ込んだ青年は、祭壇に向かってうやうやしく頭を垂れた。

「すべては、理想の世界を描いてもらうために。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7517y/>

新規テキスト ドキュメント.txt

2011年11月24日21時52分発行